

---

# 侍女と総司令官

方位磁針

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

## 【小説タイトル】

侍女と総司令官

〔 $\tau$ 〕  
〔 $\Pi$ 〕

N 0294 W

【作者名】

## 方位磁針

【めりすじ】

## せじめ（前書き）

このお話はファンタジーですが、だからといって大層なものではありません。その世界に生きる人の日常生活のお話です。よろしくお願いします。

「黄金の都」、そんな名称で他国からも呼ばれている程に、この国「インシコベルツ」は栄えている。この国は、300年前に賢王シコベルが悪しき魔王を倒し、苦しんでいた民を救い、出来たのだとされる。そんな大層な国の誕生の話も、今を生きている私には、あまり関係ないものだった。何せ、一分一秒を争うように、忙しい下つ端メイドライフを喰らんでいるからだ。

「ピーナー！ そのシーツ畳んだら、次は神殿の廊下をモップでかけて！」

「はーーー今すぐーーー！」

下つ端メイドを仕切るアンナさんの掛け声に、元気に私は挨拶をした。ここは、王邸の中にある、神殿。国の中でも特に権威ある神官様方が、この神殿には多くいる。そんな神殿で下つ端メイドとして働いているのが私……ピーナ・リロツトである。10歳の頃にこの神殿に奉公に出され、18歳となる今は、それなりに仕事の経験をし、ベテランとはいえないも、それなりに頼りにされるようになつてきたこの頃だ。

しかし、習慣の朝の掃除いつもなら既に終わつてもいい頃なのに、今日は念入りに掃除をさせられている。

「ひ、ひ、ひ、ひ。なんで、こんな忙しいのよ！」

「なんでも、お偉いさんのいうことでは、明日に待ちに待った聖女様が来られるらしいよ。先日その聖女としての能力が認められたようで、急遽明日に来られることになったんだ」

小声でぼやいた私の声を、地獄耳のアンナさんは聞き逃さなかつたようで、苦笑いしながら答えてくれた。

「せ、聖女様ですか！？」

「何と！ それはとてもすばらしい……！」

「ああ、ピーナは熱狂的な聖女様信者だもんね。ようやく、聖女様が見つかってよかったですじゃないか」

そうなのだ、私は聖女様の大ファンなのである。小さい時から、よく両親に聖女さまにまつまる話を好んでせがんだし、神殿で働いているのもいつかは聖女様が現れて、何らかのかたちでお仕え出来るかもしれない、と考えたからだ。

アンナさんは「聖女様がこられるのはいいけど、急すぎるよ。神殿の掃除や準備やらをするあたしらの身にもなつて欲しいもんだ」とブツブツ言つて、忙しそうに他のメイド達へ指示する為に、小走りでかけていった。

「うわーうわー、聖女様が来るんだ！！」

興奮しながら、廊下をぐるぐる歩いて私は、はたから見たらとても変だらうが、そんなの気にしていられない。やつと、憧れの聖女様に会えるのだ。先代の聖女様がお亡くなりになられて15年。新しい風を運びながら、聖女様が神殿に来られる。

とりあえず、来られる聖女様のために、精一杯神殿をきれいにしよう、と思った私は「オー！」と腕をあげた。

そんな私を不審な目でメイド仲間が見ていますが、そんなの気にしませんともっ！

「32代聖女ルナスターイーナ様、到着されました！！」

翌日、聖女様ルナスターイーナ様が無事に神殿にお着きになった。私のような下つ端のメイドは遠くからしか、聖女様を見る」としかできないが、それでも聖女様のお美しさは分かる。

亞麻色の長い髪、翡翠のような瞳はパツチリしていて、小さい陶器

のような白い顔には、バラ色の頬、とれたての果物のようなみずみずしい脣、どれをとっても文句ありません。名前もルナスターーナ様と、とっても高貴な雰囲気があると思いませんか？

うつとりと眺めていると、同期のアリーが「涎がでているわよ、ピーナ」と引き気味に小声で言わ澍れてしまった。おっと、失礼。

涎をふき、また神官方に迎えられている聖女様を見ると、緊張しているのか少し顔が強張つているようです。まあ、こんな人数でおむかえされたら、びっくりですよね。

とりあえず、聖女様を迎える儀式など滞りもなく進み、我が国の神殿には15年ぶりの聖女様がお住まいになることになった。

私のような下使いは、聖女様に直接仕えることはできませんが、せめて快適に神殿ライフを楽しんでもらおうと、ピーナはお掃除を頑張ります！

お掃除にも力が入り、やる気満々で働いているので、アンナさんに褒められるほどだ。

だから、遠く聖女様を見かけると、つい自分の聖女様はあまつこの神殿に入ってしまうのは、許してほしい。

そんな感じで働いている私だが、噂では聖女様はあまつこの神殿に馴染んではないらしい。

まあ、今まで暮らしていた所と全然違つ所に連れてこられたら、誰だって戸惑うけどね。

早く、この神殿に馴染んでもらえればいい、と願うばかりだ。

「ルナスタリーナ様！お待ちください！ルナスタリーナ様！」

奥の廊下から侍女の必死な声と、あわただしい足音が聞こえる。何事かと、掃除中の私は、音の聞こえる方向に目を向けるとなんと小走りになつてこつちにくる聖女様と、追いかける神官や侍女たちが見えた。

うわあ、すごい近くに聖女様がくるー！

と、ただならぬ感じを匂わせていながら、一瞬忘れ、近づく聖女様にドギマギした。

「ルナスタリーナ様、まだお勉強が残っています！すばらしい聖女様になるためにも、是非お勉強を・・」

「いいかげんにしてよつ！…すーっと聖女の勉強やお作法ばかりじやないの！…いいかげん、飽き飽きだわ！」

「そんな」と言わずに「こ

「嫌つたら、嫌！！」

「子供のようなことを・・・」

「何よ、ずつといの神殿から出られなくて、自由はないし、やる」ととこつたらあなた達がやりやるものだけ！…もつ、嫌よこんな生活

・・・どうやら、結構な場面に遭遇してしまったらしい。顔を真っ赤にして、聖女様は神官達に怒っている。翡翠のような瞳には、怒りと悔しさを滲ませているのが分かった。

聖女様の一団が、目の前を通り過ぎるのを腰をおひそめをじて待つた。

でも、こんなに近くに、聖女様を見ることはないので、私は好奇心に負けてそつと目を上げて、聖女様を見た。

すると、すれ違つ瞬間聖女様と目がバチンッと合つてしまつたのだ。

「わ、どうじよー」

目を外すことはなんだか失礼だし、かといつて見つめるのも失礼だ。逡巡していると、翡翠の目につつすら溜まっていた涙が、ポロリと一滴流れるのを見た。

ピーナは、はつとした。

・・・お辛いのですね。そりやあ、家族と離れ、見ず知らずの人  
にずっと見張られながら、生活するのはさぞ大変だろ。

急に、聖女様が憧れに似た気持ちではなく、どうしようもなく愛し  
く感じられた。今までは、雲の上の存在であったのに、家族に向け  
るような気持ちだ。

励ます気持ちで、聖女様に微笑みかけると、聖女様は大きな目をま  
ばたきして、さらに私をじっと見つめた。

怒鳴っていた聖女様が、急に立ち止まってメイドを見つめるのを不  
審に思つたのか、神官は聖女様と私を交互に見て、「どうなされた  
のですか?」と聖女様に話しかけた。

聖女様は、しばらく私を見た後、

「」の子をわたし付きの侍女にしてくれるなら、勉強してもいいわ  
とせりりと爆弾発言をした。

・・・・えつ！？

「なんですと・・？あれは、メイドとはいえ下使いですよ？」  
神官達は、とつても驚いた様子だけど、当の本人の私のほうが、驚  
いてますから！－！

本来、聖女様のような高い身分の方につく侍女は、貴族の娘と相場  
が決まっている。パン屋の娘である庶民の私に、そんな大役が務ま  
るはずない。

務まるはずないんだけど・・・。

「別に、関係ないわ。この子は私専用の侍女にして。あとは侍女い

らないから

聖女様は、腕を組みあいを挑戦的に上げ、さらに、問題発言をしてくださいました。

「本日から、ルナスターリーナ様の侍女を務めさせていただきます、  
ピーナ・リロットと申します。どうぞ、よろしくおねがいします」

深々とおじぎをする私を、聖女様が満足げにみて

「顔を上げて」  
と声をかけてくださった。私は、恐る恐る顔をあげて、美しいルナ  
スターリーナ様の顔を見つめた。

あの日、聖女様が私を侍女へと指名してくださった日は、その後が  
とても大変だった。

神官達は、私を侍女に（しかも私だけ）と主張する聖女様を説得す  
るのに躍起になっていたし、聖女様は聖女様で自分の意見を最後まで  
変えなかつた。私はといづと両方に挟まれ、オロオロとするばかり。

「彼女は貴族の教養ある娘ではありません！国の宝である大事な聖女様にお仕えする侍女にはふさわしくはありません！」

「うつーその通りだけど、本人を前にして言つかー！」

地味に傷ついている私の横で聖女様は

「相応しいかは、私が決める」とよーこの子を侍女にしないなら、聖女の務めやらせんぶ放棄するんだからーー！」

と最終手段の脅しをかけた。

これには、神官達も困ったようで、最後には神官たちも聖女様の願いに折れるしかなくなってしまったのだ。

私は、この騒動のあと、神官たちやメイド長やらに連れて行かれ、聖女様の侍女の仕事を一通り教えられ侍女用の服を渡された。そして、今日に至るわけだ。

機嫌がいいのか、私を二口二口と見つめてくださっている聖女様に、何やらうれしい気持ちと申し訳ない気持ちで一杯になった。

「・・・聖女様、一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「いいよ、なに？」

「あの、今更なのですが、私なんかを侍女にしてもいいのですか・・・？」

「なんで？」

「神官様が言われるよう、私は貴族の娘ではなく、しがない下町のパン屋の娘にございます。大事な聖女様の侍女ですから、優秀な方がそのお仕事をすべきだと思うのですが」

聖女様は、私を選んでくださった。そのことはとてもうれしいし、名譽な」ととは思う。でも、その聖女様の期待に答えられるかは不安があるし、その能力もない。

「・・・どうして、そんなことを気にするの？」

聖女様は、笑顔を引つ込め、窓際に歩いていき、外を見た。

「寂しかったの・・・ここには、大好きな御父様やお母様、お兄様もいない。なのに、聖女様聖女様と期待ばかりされて・・・確かに、私には聖女としての能力はあるかもしれない。でも、それを発揮できるかは分からぬ。もし、皆の期待に答えられなかつたら、どうしようかと思つたら、眠れやしない・・・期待に押しつぶされそうよ」

「聖女様・・・」

「ルナスタリーナ」  
寂しげに、聖女様は呟いた。

「え?」

「私の名よ。御父様たちは『ルナ』と呼んでいる。ここに来て、私は『聖女様』になつて、まともに名を呼ばれたことはない。呼ばれたとしても『ルナスタリーナ様』。・・・私は何も変わっていないのに」

「あ・・・」

私は、自分の口を思わず手でふさいだ。そうだ、私もだ。私もまともに、名を呼ぼうとはせず、「聖女様」とばかり・・・。

「ここに来て、私自身、ルナスタリーナ自身を見てくれる人はいない。私は私よ! 聖女としての力はあるかもしれない。でもルナスタリーナであることは変わらない! なのに、なのに・・・、聖女

としての務めとやらで一日の大半は終わるし、自分が自分でなくなつてしまつようで、恐い……！」

そう吐き出すと、聖女様、いや、ルナスタリーナ様ははらはらと涙を流し、手で顔を覆つた。

私は、目の前で泣いている、華奢な少女を見つめた。確か、年は19歳だったはず。地方の貴族の次女だが、御父様は人柄も素晴らしいらしく、国の中心までその人柄は有名だ。

そんな方に、聖女様が誕生するのは、当たり前かもしけない、と人々は噂した。

また、そんな聖女様だから、きっと素晴らしいことをしてくれるに違いない、と。

ああ、なんて惨いのだろう。こんな少女にそんな期待を押し付けることは、過度の期待は、その人を苦しめる。ましてやその対象が、まだうら若い少女なのだ。

彼女は、さぞ苦しかったに違いない。

「……ルナスタリーナ様は、お辛かつたのですね」

ポツリと、私の口から、自然にその言葉が出てきた。  
ルナスタリーナ様は、ピクリと動き、ゆっくり、顔を覆つていた手を下に下げた。

「あなたと田が合つたとき、あなたは微笑んでくれた。私自身を見てくれている気がして、うれしかった。自分の中にある聖女像を私に押し付ける神官たちのようではなく、私を認めてくれている気がして、ホッとした」

「ルナスタリーナ様」

じーんと暖かい気持ちが、胸に行き渡るのを感じた。

「ピーナ、どうか私の側にいて頂戴。一人ではここは押しつぶされそうなの」  
ルナスタリーナ様は、真摯に翡翠の瞳をこちらに向けた。

「ええ、もちろんです。私で良ければ」

そこまで言われて、引っ込む私ではない。大好きなルナスタリーナ様のため、誠心誠意頼りますともっ！

その日、私は人生で大きな決意をしたのだ。この決意が、後の私の人生を大きく変えるとも知らずに。

## わざわざ（前書き）

やつと粗手が出ます。

「おはようございますルナスタリーナ様、朝ですよ」

窓のカーテンを開けながら、ルナスタリーナ様に挨拶をする。

ルナスタリーナ様は目をこすりながらも、「おはよう」とやわらかく笑い、私に挨拶を返してくれた。

私がルナスタリーナ様に仕えるようになつて、早くも一ヶ月経つた。初めてのことに戸惑つていた侍女の仕事も少しずつではあるが、様になるようになつたと思う。

ルナスタリーナ様も聖女として学びを嫌そうにしてはいるが、さぼらずに励むようになったので、とてもうれしい。

異例な聖女の環境に、あーだこーだと言つていた周りも聖女様がしつかりと務めをはたされるよになつたので、陰口も減つてきている。

そんな中、今日は実は大切な日だつたりする。

「今日は、初めての王族や軍部の方々と一緒に面会の日ですね  
顔を洗う水桶にお湯をはつたものを渡しながら言つと、ルナスター様は眉をひそめてしまった。

「そうなのよねえ、緊張するわ・・・」

この国の権利体制は特殊で、神殿と王権は完全とは言えないが、分権している。持ちつ持たれつの関係なのだ。さらに、軍も大きな権力を保持していて、この3つの権力がお互いをけん制しあつていて。もちろん、王には神殿も軍部も従う形ではある。しかし、祭司長と元帥というトップがいて、建前では王に従つているが、それも形式的なもので実際に従うリーダーはそれぞれ違うのだ。

聖女であるルナスター様は、神殿の保護の下にあり、本来は一番の神殿の権力者である祭司長よりも位は高い。

ルナスター様が神殿に入つて2ヶ月経つた今日、他の2つの勢力である王・貴族、軍部に挨拶・お披露目をする。

「少し、お偉いさんと」挨拶をするだけですよ！そんな気を張らな  
いでください」

「ふふ、そうね。ありがと」

「人前にでるのに緊張するなら、みんなカボチャだと思えばいいつ  
て、昔祖母がいつてましたー」

「ピーナつたら」

くすくすと笑う、ルナスタリーナ様は今日もお美しいです。そんなだから、ピーナは別の意味で心配になるのです。

「あまりにもルナスタリーナ様がお美しいので、殿方が変な気でも起こらないといいのですけれど……」

「なにそれ。ありえないわ」

ぽつりと呟いた私の言葉に、ルナスタリーナ様は笑つたが、なんだか本当に心配になつてきた。

「ルナスタリーナ様、ご入場です！」

門兵が、声たからかにルナスタリーナ様の謁見の間への入場を告げた。侍女である私はルナスタリーナ様の後ろを歩いているが、門の中までしかついてはいけない。門の中に入れば、そこで立ち止まり、ルナスタリーナ様だけが王達のところまで進み行く。

『頑張れ、ルナスタリーナ様！』と一生懸命に念を送りながら、一人で歩いていくルナスタリーナ様を見送る。

ルナスタリーナ様は、神殿を出る前は、そわそわと緊張している様

子だったが、いざお披露目の場所に向かつと堂々と別人のよつた振る舞いだ。

また、ルナスタリーナ様のすばらしい一面を見れて、誇らしい気持ちになった。

「お初にお目にかかります。32代聖女ルナスタリーナと申します。ご挨拶が遅れてしまい、申し訳ありませんが、このように皆様にご挨拶できましたこと、大変うれしく存じます」

ルナスタリーナ様の凛とした声が、会場に響いた。  
ちらつと見回してみて、この場所にいるのは、そうそつたる顔ぶれだと実感する。

まず、一番高い所にいるのが王らしい貫禄を漂わせるこの國を治める王シユレル様と、三人の子持ちとは思えないような若く美しいお后エレイン様だ。

一つ下の段にいるのが、第一王子シオン様と、第二王子アレックス様。また、第一王女フィレナ様。

第一王子のシオン様は、お母様似の柔軟な顔をしていて、中性的な雰囲気を醸し出している。一方、16歳のアレックス様は、まだやんちゃそうな瞳を隠せずに物珍しそうにルナスタリーナ様を見ていた。

挨拶を述べるルナスタリーナ様をシオン様は、熱心に見ていた。優しい眼差しではあるが、何だか熱いものを含んだその瞳に、ピーナは少し落ち着かない気持ちがした。

よく分からぬが、シオン様は要注意人物だと女のカンが騒いでいる

る気がした。

とりあえず、心のメモに書いておこう。

王の右側には宰相やら、有力貴族がずらつと並んでいる。

そして、左側には軍部のトップの元帥であるサルマン様を始め、高位の軍人達が並んでいる。軍人の長とは思えない、温厚な顔をしているサルマン様の隣には、まさに軍人らしい威圧感を出している男性がいた。

ああ、あの人があななエドガー様か

軍人のトップである総帥の隣で高位の軍服をきこなして、たたずんでいる彼は総司令官である。

24歳という若さで総司令官までのし上がった彼は、現在26歳であるが圧倒的な軍人達の尊敬・畏敬を集めている。5年前に、大きい群れをなしてこの国へと攻めてきた魔物を知力戦で壊滅状態へと追いやつた英雄だ。しかも、彼自身この国で、一番強い軍人だと言われ、賢王シユベルの再来などとも影ながら諸外国からも言われ恐れられているくらいだ。

極め付けには、彼はまれに見る美男子で、まっすぐな銀色の髪に、灰色の切れ長の瞳、雄鹿のようすらつとした体型だがつくべきところにはしつかりついている筋肉だと（エドガーファンクラブいわ

く)」の国の貴族から下町までの娘たちのハートをつかんで離さない。  
ここ数年、「付き合いたい人ランキング」で一位をとっているらしい。

彼は、シオン王子とは逆に鋭い視線を王に挨拶するルナスタリーナ様に向いている。

(かつこいいけど、ルナスタリーナ様をあんなふうに見るなんて、  
いただけないな)

彼も要注意人物だな、とピーナは心のメモに付け加えた。

「うーん! 疲れたあ————」

「お疲れ様です。とつても立派でした! ピーナは感激です! —

部屋に戻つて背伸びをするルナスタリーナ様に、紅茶の用意をしながらいかにルナスタリーナ様が素晴らしいかを述べた。

「ありがとう。なんだか、ピーナにそういうて貰えるとうれしいわ

「そんな！みんな絶対そう思つてますよ！ピーナだけじゃありません」

「ふふ」

少し笑つてルナスタリーナ様は視線を下に下げた。

「本当に、ピーナがいてくれてうれしいの・・・。ピーナがいてくれなかつたら今日の挨拶なんて絶対無理だつたわ。ピーナが後ろで見てくれていると思ったから、勇氣を出していけた。・・・ピーナは私の大切な友人よ」

少し頬を赤くしながら、照れたように言うルナスタリーナ様に、私は胸がキュウウッとなるのを感じた。

ルナスタリーナ様、かわいいです！！

「そ、そ、そ、そんな。ピーナはただルナスタリーナ様に仕えているだけで、特別なことは・・・。時々失敗とかしてしまつて、侍女のお勤めも完璧ではないし、ルナスタリーナ様にもご迷惑をかけてしまつてばかりで・・・」

「そんなことない。ピーナは私の心の支えよ。ピーナがいてくれるだけでいいの」

「ルナスタリーナ様・・・」

「あとね、・・・お願ひなんだけど二人でいる時だけでいいから、私のこと『ルナ』って愛称で呼んで欲しいの。家族とか近しい人と同じように呼んで欲しい。ダメ・・・？」

上目遣いで私を見るルナスターーナ様に誰が逆らえよう。私はあまりにものかわいらしさにクラッとしながら、なんとか頷いた。

「ルナスターーナ様、いえ、ルナ様がそう望むのなら」

「本当！？ありがとうーーー！」

ルナ様は手を合せて喜んでくれた。

「ルナ様、私ずっとルナ様のおそばで仕えたいです。ルナ様が大好きだから・・・」

「ピーナ・・・。私もっ！私もピーナのことがだ～い好きーーー！」

「ルナ様」

「ん、なに？？」

「呼んでみただけです〜〜」

「もう、ピーナつたら」

キヤッキヤとはしゃぐ私たちを、窓の外の小鳥が不思議そうに見ている。

ルナ様、私、一生懸命仕えて参ります！！

私はそんな決意を、新たにした。



## わざわざ（後書き）

やつぱり、相手の男性は美形です。  
お約束、といつことじで。

## よんわめ

神殿のトップは祭司長である。といつても、仮のトップだ。本当の神殿のトップである地位にいるのは、聖女だ。祭司長が神殿を束ねるのは、聖女が不在のときで、聖女がいるときは、その補佐をするのが本来の仕事なのだ。

のはずだが、ルナスタリーナ様という聖女が神殿に来られた今もその状況はあまり変わっていない。つまり、いまだに祭司長に大きな権限があるままなのである。

まあ、それは当たり前かもしれない。何故なら、ルナ様は神殿に来られて日が浅いし、聖女のお勤めが何であるかを学んでいる最中である。そんな新米聖女様より、ずっと神殿を動かしてきた祭司長に皆が指示を仰ぐのはショウがない。

しうがないのだが、祭司長のルナ様への態度は、すこし横柄なものだ。まるで、自分が聖女のルナ様より偉いかのような態度を隠しもせず、接していく。

今日も、ルナ様と祭司長達の集まりがあつたのだが、聖女のルナ様のほうから祭司長らのもとへ行くことになつた。普通は逆のはずだが、聖女のルナ様が文句言ないので、周囲もこの状態を黙認している。

今ピーナは一人、ルナ様の帰りを部屋で待っている状態だ。

「ふんっ！前々からあの祭司長は何だか気に入らなかつたんだけど、ここまでだとは。もう、ルナ様に意地悪したら、どうしようつ・・」

ピーナはずつとこの神殿に10歳の時から勤めているわけだが、聖職者のはずなのに、人を見下す田祭司長の目が苦手だった。廊下を掃除しているピーナたち下つ端メイドが掃除しているところを通りすぎる時、彼はチラリとまるで汚らわしいものを見るような目で見てくる。

祭司長は御年65歳だが、40歳の時からその祭司長といつ座についている。噂では、裏から様々なことをして、その座を奪つた、とされている。そして、その地位を維持するために悪事もたくさんしてきたらしい。何とも、本来祭司長という存在からかけ離れたじいさんなのだ。

当然、そんな祭司長は下つ端たちには嫌われていて、裏で『はげじじい』と呼ばれている。

最近は、自分より立場が上の聖女が来たことで、その権力維持に危機感をかんじてゐるらしく、何かとルナ様に何やらと皮肉や難癖をつけてくるらじい・・・本当にやなじじいだ。

「それせり、ルナ様帰つてくるよね？」

も、帰つてきてもいい時間になり、ピーナは落ち着いて座つてゐることもできなくなり、部屋の中をぐるぐると歩き回つた。

ピーナが部屋を何周か回つたといひで、顔色を悪くしてルナ様が帰つてきた。

「ルナ様? どうしたのですか!? 顔色がとても悪いです。はやく、ベットで横になつてください!」

そう呟いたルナ様は泣きそうだった。

「ピーナ・・」

結局、泣き出してしまつたルナ様をなだめながら聞いた話を要約すると『まだ、聖女としてのお仕事を習得していないとは嘆かわしい。せつかくあなたを招いたのだから、結果を出して貰わないと困る。しかも、我ままを言ってどここの馬の骨とも知れない下女を侍女にするなど信じられない。親御さんはどんな教育をしたのか。早く司祭の仕事を安心して引退したいのに、できないではないか』といふことを言つてきらし。

「わ、私だけのことならのことなら、いいのよ。実際仕事や知識もまだ自分のものとしていないし事実なのだから。・・・・でも、お父さんやあなたのことまでも悪く言われるなんて・・・！」

はらはらと涙を流しながら、悔しそうにルナ様は言つた。翡翠色の瞳から涙を流す姿は、場違いだが『どんな時でも、綺麗な人だな』と思つてしまつた。

よ、涎は出れないようにしないと

「私はともかく、お父様達のことまで嫌味に出すなんて、祭司長の品位が疑われますよ！ひどすぎる」

「『じめんね、ピーナ。私があなたを巻き込まなければ、周りに何も言われずにすんだのに・・・」

「ルナ様、私は全然気にしていませんよ。嬉しいんです、私。あなたと一緒にいられるだけで。むしろ、ルナ様に巻き込まれて幸せです！」

「ありがとう、ピーナ」そういうルナ様は少し微笑んで下さつたが、やはりビートなく悲しそうだった。

・・ああ、なんてダメな人間だろう、私は。守りつゝと誓つたくせに、その人の笑顔すら守れないなんて。

ルナを早めに寝かしながら、ピーナはルナの側にいることしかでき

ない自分の不甲斐なさを歯がゆく感じていた。

次こそは、絶対にルナ様を悲しませない！そう決心した。

祭司長にひどく嫌味を言われてから、ルナ様は聖女の学びをそこそこに、部屋に引きこもってしまった。

ルナ様は決して弱音を吐かなかつたが、実は祭司長を恐れて神官たちにも親しくはされず孤立している状態であったことを、噂で知っていた。長年、神殿に居座り、私欲で神殿の体制を悪しきものにしている祭司長に、はむかうことができる者はいなかつた。王も軍部も干渉は許されていないため、事実神殿は祭司長の天下なのだ。ここに来たばかりルナ様が対抗するのは、難しいことだつた。

ルナ様は、時折私と話す以外ぱーっと一日を過ごすようになり、ますます孤立している状態だ。認めたくないが、祭司長が狙つた通りになつていることは、明白だつた。

「ど、どひにかしなければ・・・でも、特に名案とは浮かばないしうまく孤立している状態だ。認めたくないが、祭司長が狙つた通りになつていることは、明白だつた。

迷つたら、部屋を歩き回る癖があるペーナは、寝室で寝ているルナ様が起きないよう、隣の部屋で静かにではあるが歩き回つていた。

(手品とかしたら、喜んでもらえるかな?あーでも、私余り手先が器用じゃないし・・・大道芸人なんか神殿に呼ぶのなんて、絶対反対されるよね。)一なつたら、お父さんがよくやる親父ギャグを連

発すれば、笑ってくれるかな。笑うと元気でるし）

変な方向の慰め方を考えていたピーナだったが、ドンドンドアを激しく叩かれる音に意識を戻した。

「ん？ はーい。どなたですか？」

やつこつて、ドアを開けると、焦った顔の神官が立っていた。

「聖女様はどうぞいますか・・・？」

「 る、聖女様は今具合が悪く、寝ております」

ただならぬ神官の気配に押されつづピーナが答えると、神官は田をキョロキョロさせながら逡巡したのか、「起こす、ことは可能ですか？」

と言つてきた。

（具合が悪いっていつてんじゃん！今のルナ様の状況が分からないうわけじゃないのに、起こせなんて失礼だな！）

憤慨しながら、ピーナは答えた。

「申し訳ありません。聖女様は臥せつており、起きる」とは難しいのです。何か「用件が」ありますなら、私が代わりに伝えておきますが」

「用件とこつか……、その聖女様に面会したい、という方々がお

見えになつていて・・・

(面会?ますますダメだ)

ピーナは今もベットで寝ているルナの苦しそうな顔を思い出した。

「それは、出来かねます。今の状況ではとつても・・・あの、また別の日に再度お越しいただくことは可能でしょうか?」

「それは・・・えーと、どうしても聖女様にお会いしたい、と・・・

「

「我々の話はすぐに終わる。しかし、別に身支度が出来ていなくとも、かまわない。聖女殿に会わせて貰いたい」

じどうもじどうな神官の話をきいたのは、威圧感がある鋭い声だった。

ピーナが声が聞こえた神官の後ろを見ると、いつぞや見たエドガー総司令官が何人か部下を引き連れて歩いてくるのが見えた。

綿のような女なら誰でも羨むサラサラな長い銀色の髪を一つにし、怜俐だがしかし恐ろしく整つた顔。刀を横に差しながら歩くエドガー総司令官は、やはり目が一瞬奪われてしまつ。宮殿の女達が恋人とこう座を狙つてゐる、という噂もあながち間違つていはないだろう。そんな彼が、いきなり「聖女に会わせろ」と言つてきたので、ペーナは戸惑つてしまつた。

「あの、あなた様は・・」

「申し遅れた。私は総司令官のエドガーだ。至急、聖女殿をお会いしたい。侍女殿、お取次ぎをお願いする」

「え？ しかし、どうして・・」

そもそも軍部の者が神殿に入つてくること自体が、異例なことである。しかも、聖女に会いたい、などとは。困惑して先ほどの神官を見ると、何やら諦めきつた顔をして伏せている。  
(こいつ、総司令官殿の迫力に負けて、ここまで通したな〜〜!!  
!-どうしてくれるのよ、私みたいな元下つ端メイドが、国でも特に地位がある方に対峙できるわけないじゃない)

神官を睨むと、神官はビクッとして、目を泳がせた。

キーッと神官を睨んでいると

「悪いが、お取次ぎをお願いしたのだが」とエドガーが冷たい瞳で睨んできた。言葉は丁寧だが、全然お願いされている気分にならないのは何故だろつ。言外に『おい、ちんたらしてないでさつわと聖女に会わせろつ』という気持ちが伝わつてくる。

思わず、エドガーの威圧感に負けて、額をそりになるピーナの頭に、涙を流すルナの顔がよぎった。

（また、私はルナ様を泣かしてしまって？あんな状態で、恐い軍部の方に合わせたら、さらに気持ちが沈んでしまうに違いないわ）

そう考へると、ルナは目をギュッと閉じ、田も前にいる男を見据えた。決心は前からついていたのだ。

そう、ルナ様を守つてみせる、と。

ピーナは半開きだったドアから出て、静かにドアを背にしながら閉めた。

## いへわめ（前書き）

軍の階級の名称については適當です。一応調べましたが、最終的に方位のニュアンスで決めさせていただきました。もし、違和感など感じられたなら、ごめんなさい。

「申し訳ありません。聖女様は最近体調が思わしくなく、臥せつておいでです。起き上がるとは難しいのです。面会は出来かねます。また、日を改めていただくか、至急の伝言がござりますなら、私を責任をもつてお伝えします」

一気にピーナは話した。

たぶん、声は震えていないはず。

相手はまさか、侍女なんかに断られるとは思わなかつたのか、少し驚いた顔をした。エドガーの後ろにいた部下たちもそれぞれ「おや？」という顔をしている。しかし、エドガーはすぐ顔を戻すとそれっきりよりもさらに威圧感を増して、脅してきた。

「直接お話したいことだ。悪いが、侍女であるあなたに伝言できません」

く、く、く、く。侍女だからってしゃしゃつてこんなよ、つてこと？腹立つー

「そうですか・・・では、また別の日にお願ひします  
悔しいから笑顔で言い放つた。

「何故だ！？」

「先ほど申し上げたとおりです。聖女様は臥せつしているのです。面会ができるる体調ではあつませんし、無理をしたらますます悪化して

しまう可能性があります。伝言が出来ぬ、というならあらためい  
ただくしかありませんので、

「……あなたは侍女だが、少し出すきてはいないか？」

「そうですね。しかし、私は、聖女様のお世話を一手に引き受け  
ております。神殿から任されているのです。ですから、個人として  
はあなた様に申し上げることは大変おこがましいのですが、神殿か  
らお世話を任されている以上聖女様をお守りすることは、神殿から  
与えられた私の使命なのです。面会が出来ぬというのは、私ではな  
く私に責任を与えている神殿としての意志、とお考えくださいませ

神官が『うそだろ』といった目でピーナを見ている。一介の侍女  
が軍部のナンバー2に楯突くのが信じられないようだ。

（私だって、ここから逃げたい。でも、私がどくと、ルナ様を守る  
ものはなくなってしまう…）

本当は泣きそうなのだ。こんなガタイのいい男達と対峙することは、  
縁のなかつたことだし、実力行使で通られるならすぐにピーナは倒  
されてしまうだろう。

しかし、ここを通すわけにはいかないのだ。ピーナは腹に力を込め  
て、笑顔で話していくのを悟られないように務めた。

「ほう・・・

笑顔で言つてのけたピーナ（内心はガクガクだが）を探るように見  
た後、エドガーは薄く笑つた。怜俐な顔が、魅惑的に笑う。だが、  
ピーナには、何かを企てている邪悪な笑みに見える。

「そうか。それはしょうがない

やれやれ、というようにエドガーは首をふつたが、それはなんだか演技に見えた。

帰るのか？引き際はいいのか、と考えるピーナの横を、素早い速さで何かが通つて鋭い音を出した。神官がヒツというのを聞こえた。

見たくはないが、ピーナは後ろを振り返ると、エドガーの刀がピーナを横にしてドアに刺さっている。

（アーチー）

ヒーナは内心絶叫をあけた。実際に叫はなかつたのは、あまりの恐怖に声がでなかつたのだ。

「ああ、すまない。手が滑つたようだ」

全然誤っている調子がない声音で、ユトカロが誤っている。むしろ、クスクスと笑っている。

(せ、性格悪いよ、この人ーー！)

「・・・手を滑らせたと?」

「そうだ」

• • • •

平常時なら考へられなかつたが、ピーナはこの時、恐怖より怒りがふつふつと沸いてくるのを感じた。ずっと張り詰めていたので、恐怖を感じる心が麻痺してしまつたのだろう。

（女、なめんなよ……………）

この時、ピーナの頭にはエドガーの総司令官という地位のことは吹っ飛んでいた。

「なんと、総司令官であろう方が手を滑らせるといつ失敗をすることは、驚きです。猿も木から落ちる、ということはこのことですね！私、軍の方が握つてもいなかつた剣を滑らせてとばすといつ、あり得ないミスをするとは思いもしませんでした」

ピーナは、手のひらをパンとあわせて、やつときよりも何倍もの笑顔で言つた。

周囲の空気がピキッと凍つたが、気にしない。

「つ……」

「それではエドガー様、この剣を取つてから、帰つてくださいね」

「帰らぬつ。面会を！」

もはや、ブリザートのような気配を隠すことなく、エドガーは怒つた調子で言つてきた。

「ですから、それは出来かねるのです」

「知るかつ！」

ピーナを睨んでくるエドガーを、ピーナも負けじと睨み返した。これを見ていたエドガーの部下は、後で一人の視線が雷のようにバチバチいつていた、と証言している。

「…………どうじても、ここを通さぬと？」

「はい。それに、剣をもつて脅されるような方と聖女様をお会いさ

せることは出来ません！もし、何か私に伝えられないような重要な伝言があるなら、聖女様の補佐である祭司長にお伝えするのが、筋でしょう」

エドガーとの視線を外さず、まっすぐピーナは言い放った。さりげなく、祭司長にエドガー達を差し向けるようにした。ざまー見ろ、はげじじい。軍人にびびればいい！

「お前は・・・」

ふとピーナとの視線を外し、エドガーは目を一瞬つぶつた。そして、今までで一番強い殺氣をピーナに当て睨んできた。

「最後だ。ここを通せ」

ピーナはエドガーの殺気に満ちた視線をしつかり受け止めた。もはや、恐怖心は完全に麻痺している。ピーナはルナの笑顔を思い浮かべながら、ひとつひとつ言葉をゆっくり言つた。

「なりません。お帰りください」

どのくらい、睨みあつたのだろう。数分にも数刻にも感じられた。エドガーの顔をひたすら睨んでいると、不思議なことに段々エドガーの頬が赤くなってきたのだ。そして時間が経つと、目の淵や耳までもが赤くなってきた。目は潤んでいるようで、男なのに色っぽい。

(ん？怒りで興奮している？それとも風邪ひいた？)  
頭の隅でそんなことを考えていると、エドガーはピーナとの視線を  
やつと外した。

「・・・分かった。今日は帰ろ」

ピーナにふいつと背を向けながら、刀を抜き取ったエドガーのうな  
じはやはり、赤かった。

一人、先に戻っていく、エドガーの後姿を部下達は、「えつ！？隊  
長、まさか？！」と言いながら、ピーナと見比べた後、急いでエド  
ガーについていった。神官は、何が起こったのかいまいち分からな  
い、という顔をしたが、軍人達を送るために戻つていった。

ピーナは、背にしていたドアを開き中に入つた。完全にドアを閉め  
ると、ずるずるとドアを背にして座り込む。

(一)、腰が今さら抜けた・・・

なんだか、体も震えてきた。思わず、両手で自分を抱きしめる。し  
ばらくそうしていると、ルナが寝室から出てきた。

「ピーナ？なんだか騒がしかつた気がするのだけど、何か・・・  
どうしたのっ！？」

ピーナの尋常ではない様子に、ルナも何」とかとピーナに駆け寄つ  
た。

「ルナ様・・・。起きて大丈夫ですか？先ほどは、来客の方でお見え  
になつたのですが、帰つていただきました」

「私は寝ていたから、大丈夫よ。それより、何があったの？？怯えているじゃない。普通の来客ならそんなことにはならないはずよ」

ピーナがエドガー達が、神官達を押し切つてこひりに来たことを告げると、話を聞き終える頃にはルナは怒っていた。

「ひどいわっ！…いくら、面会したいからって、強引すぎるわ」  
そして、唇を噛むとピーナを見て目を伏せながら言った。

「きっと、軍部が神殿よりも優位に立とうとして、新米の聖女の私に抑圧をかけようとしてきたのだわ。…・・・ごめんね。私が引き籠つていたからだわ。私が寝てなければ、面会をしてエドガー様たちの怒りをピーナが受けなくて済んだのに」

「ルナ様！いいえ、違います。私がしたことは、勝手にしたことで、しかも聖女様の品位を侍女の私が落としてしまったのかもしません・・・・」

思えば、すごいことを言つてしまつた、と今更ながらに気付く。相手がいくら強引だとはいえ、売り言葉に買ひ言葉で、あらうことか総司令官にはむかつてしまつたのだから。

「す、すみません。私大変なことを・・・」

「ピーナ」

ルナは、強い口調でピーナの名を呼んだ。思わず顔を上げてルナの顔を見る。ルナは、最近の弱弱しさがある瞳ではなく、何か決意をした強い感情を秘めた瞳をしている。

「ピーナ。私が悪かつたの。ここにきて、打ち解けない神官達や、

嫌味ばかり言つてくる祭司長、難しい聖女としての学び、重圧に私はしつぶされそうだったの。まるで、一人でそれに耐えなければならぬ気持ちだったわ。御父様のところに帰りたい、と何度も願つたことか。・・・・・あなたがいてくれたのに。あなたがずっと私の側にいて、私を励ましてくれていたのに、私はずっと自分が一人だと思つてしまつたの。ごめんなさい。あなたは私を守つてくれていたのに」

「ルナ様・・・」

守ることができなくて、自分が不甲斐なかつた。でも、なんとかして、助けたかつた。

「私、もう一度、戦つてみる。祭司長や神官に。いえ、この神殿という腐敗している体制そのものにつ！大変だとは思うけど、あなたがいてくれるから。・・・ピーナ、私と共に戦つてくれる？」

ルナの顔には生氣があふれ、力強い。

「わ、私、本当に役立たずで、何もできないんです。でも、お側にいて、あなたを支えてたいです」  
もはや、ピーナは号泣だ。

「ありがとう。それだけで、いいの」  
ルナはそつとピーナを抱きしめた。ピーナはふえつと思わず言つてしまつが、暖かいルナのぬくもりに安心し、目を閉じた。

## ななわめ（前書き）

今回は、少し短めですー

## ななわめ

暖かい風が吹き、空は快晴だ。そんな時を楽しみつつ、ピーナはルナが居ない間の掃除をしていた。あの日から、ルナは積極的に聖女の務めを果すようになつた。親しく出来なかつた神官たちにも、ルナから精力的に話すようになり何人か打解ける人が出てきたそうだ。そんなルナをピーナが精神的な支えとなつている。

何もかもが上手く動き出してきたようだが、しかし問題が一つあつた。

それは  
- - - - - - -

ドアが「ンン」とたたかれ、「ピーナさん、・・・エドガー総司令官殿です」と神官の来客をつげる声がした。

ピーナは『げつーまたあの人！？』と思わず言ひやうになるのを、押さえ「はい、ただいま」と返事をした。

ドアを開けると神官と総司令官であるエドガーが立っていた。

ピーナがこわごわと「どうぞ、エドガー総司令官殿。お入りください」と招き入れると、「ああ、失礼する」とエドガーが部屋に入ってきた。

そり、たつた一つの問題、それはこのエドガーのことだ。

ひと悶着ピーナと彼が起こした以来、エドガーは毎日のように神殿ルナのところに通うようになった。と、いつても、ルナに会うことはない。「聖女殿に会いにきた」と言いながら、何故かルナが居ない時間に来るのだ。ルナが不在のため、しかたなくピーナがエドガーに対応するのだが、「聖女様が今はいない」と言つと「では、待機している」とする「と毎回彼はここで待つてゐる。

かといって、ルナが来る前に、「すまない。用事があるから」と失礼する。また来る事にしようと残し帰ってしまうのだ。来てもルナが居ない時にくるため、会わざルナがくる前に帰る、と いう状態がずっと続いている。

ルナが不在のため、必然的にエドガーの相手を侍女であるピーナがすることになつていて、総司令官であるエドガーをないがしろにするわけにはいけないので、お茶などを用意して待つもりう。

しかし、この時間がピーナにとつては苦痛で仕方が無い。何故かと いうと、エドガーはルナを待つてゐる間、ずっとピーナを睨んでくるからだ。あまりにもピーナをジッとみてくるものだから、耐えられず何か御用ですか、と聞いてしまうのだが、決まって「特にない」と返されてしまう。

なら、こつち睨むんじゃねーよーー！

だが、ピーナも負けてはいない。これはきっとエドガーがピーナへ挑む戦いなのだ。『将を射るうとすれば馬から』ということわざがあるが、まさに彼はこれにのつとつて挑んできているのだろう。以前にルナ様が、エドガーは軍部が神殿より優位に立とうと、聖女に圧力をかけに来たのだろう、と言つていたし。

エドガーはじつとピーナの顔を見てがんをつける。だから、負けじとピーナもエドガーの目から視線を離さずに必死に対抗する。數十秒か（ピーナにとつては何十分に感じるが）にらみ合つてから、いつも決まってエドガーのほうが目を先に離す。「勝った！」とピーナは満足げにエドガーに隠れて笑う。そして、エドガーを追い出すとこうなお見送りをするのだ。

ふつ、今日もガン付け対戦ねつ？負けないんだから！ピーナに視線を向けてくるエドガーを「ムムツ」つとにらみつけた。

この恒例となつた二人の行為の眞の意味をお互いに理解するのは、まだまだ遠いのだった。

今日は、シオン殿下がルナのところへ来る日だ。基本的に王族と神殿は分権しているので、それ程交流の機会はないが殿下の希望たつてということで、今回お茶会という名の視察ということで神殿に来るので。ピーナとしては、王族と聖女のお互いの様子見であれば、王でもいいと思うのだが、何故殿下が来るのか少し不満である。王族ヘルナが謁見しに行つたときの、シオン殿下の瞳に見え隠れるものが何だか気に入らないからだ。その瞳の中にあつた感情は、きっと良くないものだ。

神殿の庭でお茶会をすることになつたので、庭にはテーブルやお茶セット等が用意されてある。ルナはイスに座り、ピーナはその側で控えてシオン殿下を待つてゐるのだ。

「ピーナ、ちつきからずつと黙り込んでゐるけど、何があつた？」ルナがおしゃべりなピーナが話さなくなつてゐるのを心配して、話しかけてきた。

「えつ！い、いえ、何でもないです！えーと、殿下がお見えになるので、何だか緊張しちゃつて・・・。ほら、今まで王族の方とお会いする機会なんてなかつたし・・・」

「そうねー。私も実家にいた時は、王族の人と会つなんて考えられなかつたし」

クスクス笑うルナ様はとても可憐だ。

おううと、あまつもの美しさにピーナ涎が出やつです！

でかかつた涎をふいていると、神官の「シオン殿下が来られました」という声がした。声の方向を見ると、殿下がルナ達の方向へ來るのが見えた。ルナはすくと立ち上がり、礼をして殿下を迎えた。

「本日はお日柄もよく、殿下を迎えてお茶会を出来ますこと、感謝です」

「いらっしゃ、貴方のよつな可愛らしに方とお話し出さるなんて、光榮です」

「まあ・・・」

にこやかなシオン殿下と少し頬をそめたルナ様の一人の立ち姿は、見えていて一枚の美しい絵のようだ。

何だか、お腹がむずむずする。

猛烈にこの雰囲気を破壊したいぞ。

むう！やつぱりシオン殿下は危険だ！！

ピーナはこの雰囲気にもどかしさを感じづつ、二人の会話を見ていた。心中穏やかではない。

おだやかなお茶会となり、お開きとなつた。

シオン殿下は「また、来ます」と残して、帰つていった。

彼が帰つたあと、ルナはボーッとぼんやりしていた。頬をいつも

いつも赤く染め、目を潤ませながら。ピーナは恐る恐るルナに話しかけた。

「あ、あのー、ルナ様あ」

「んー？ なあにー？」

「シオン殿下はどひうでした？」

「えつー！？」

「お話ししてみて、どうでしたか？」

ルナは目線を色々な方向へ飛ばしながら、しどりもどり話しだした。

「えーっと、シオン殿下はとてもお優しかったわ。それに、緊張してこる私を気遣つて、楽しい話題を提供して場を和ませてくれたし。

紳士な方ね。・・・・・うん。本当に素敵な方・・・」

だんだん、話していくつひとつとするルナ。

「も、もしかして、お好きなんですか？」

「ええーーーーーーーーーー、そんなんじゃないわ！ ただ、とても良い方だとは思つたけど・・・」

否定するが、ルナのその表情はもはや「恋してます」と言つているようなものだ。ピーナとしては、とっても嫌だ。大好きな聖女さまであるルナが取られてしまつた気持ちになつたからだ。

「やーーー！ 殿下のばかー。やるー。

ピーナはシオンに罵詈雑言を心で浴びせた。聖女様の心を奪つた罪

は重いぞ。

「・・・そうね。もし王族とか聖女とか立場が無く、会つていたらすぐに恋してたわ。だって、本当に素敵な方なんですもの。今日お話したばかりだけど、そう思える」

ルナはそう言つてから、表情を暗くした。

「でも・・・・、それは無理ね。彼は将来王になる方で、私は聖女なんだから。王族と神殿の長が結ばれることは許されない・・。そもそも、聖女である私は、結婚できないしね」

「ルナ様・・・・」

そうなのだ。王族と神殿は表向きは、対立していないが、権力などは分かれている。国という存在は王がまとめているとはい、その内情は国の神官たちを神殿が、そして軍人を軍部がその支配下に置いている。決して交わることの無い、3つの権力。そのトップであるシオン殿下とルナ様が結婚することは出来ない。

ピーナは何だか、悲しくなつた。改めて、聖女は自由がないことを感じた。

しゅんとしたピーナを見て、ルナは明るい声をだした。

「気にならないで。私、聖女として頑張ることを決めたのよ？大丈夫」明らかに、無理しているようだが、ルナがせっかく前向きにしようとしているのを見て、ピーナも自分の顔を笑顔に変えた。

「はい！私も頑張りますよーー！」

「ふふ、ありがと」

二人は顔を見合させ、笑いあつた。

「そういうえば、何だか最近ずっとエドガー総司令官が来られているらしけど、大丈夫？」

「あー、はい。何とか。でも、何だか嫌な方ですね。いや  
みで毎日来るのだと思います。あの時、強制的に帰つてもらつたか  
ら」

「……本当にいやみで私に会いに来ているのかしら？ 本当に……」

「そういって、ルナはプリプリ怒っているピーナを見たが、結局何も  
言わなかつた。」

## まわめ（後書き）

ルナの恋も少し。王族・神殿・軍部の分権体制は、もちろん日本の三権分立を参考にしています。

毎日来るエドガーに加え、お茶といつ名田でシオン殿下も神殿にくるようになつてから、少しずつ、環境が変わつていつた。何がかといつと、3つの権力の体制だ。それまで、互いに不可侵だつた権力が、それぞれの長になる者達が交流をしていることで、下の者達も自分の属している勢力以外の者とも接するようになつたのだ。

しかし、この状況を喜ばない者は幾らかいる。その筆頭が、祭司長だ。3つの権力が合わされば、当然一番の権力者は王となる。彼はそれが気に入らないらしい。

神殿という中で一番の力を持つていたのに、王という自分がより上に存在が出来てしまつことは彼の矜持が許さないようだ。

祭司長は、聖女であるルナに再び、王や軍のものと交流しないように、忠告してきていた。

「王族や軍と付き合つことで、神殿の権威が低くなつてしまふ、なんて言つてゐるけど、本当は自分が上に立てなくなるのが嫌なだけなんだわ！」

祭司長に注意されたルナは、そう言つて怒つていた。

しかし、ルナはシオン殿下との交流をやめなかつた。（エドガーは、勝手に毎日来るので、言わざもがなである）彼に恋をしているから、という個人的な理由ではなく、聖女としてそのようにしたほうが良いと判断したからだ。

「私、考えたんだけど、3つの権力が反目しているのがいけないと思つの。だつて何かあつた時協力して動かなくちゃいけないのに、

互いに牽制して動かないのなら意味ないじゃない？だから、私から積極的に動いて、とりなしをしていきたいの。すこしでもそれぞれの権力の関係が良好になればいいじゃない？」

そう言つて笑うルナは、もう立派な民を思う聖女の顔をしていた。

しかし、事件は起きた。ルナが何者かに攫われたのだ。

それは一瞬だつた。

ルナとピーナがくつろいでいる時、いきなり覆面の男達が入つてきたかと思うと、あつという間にルナを氣絶させ攫つてしまつたのだ。ピーナは叫ぼうとしたが、誘拐犯に口を布で塞がれ縄で縛られた為、ルナが攫われていく様子を見ているしかなかつた。

（ルナ様！やめて、何なの、あなた達！！誰か助けて！）

そう叫んだが、實際に出るのは、「んーー」というこもつた声だけ。そして、覆面の男達はルナを連れ去り、見えなくなつてしまつた。ピーナは呆然と眺めるしかなかつた。

しばらくすると異変を感じた神官たちがやってきて、大騒ぎになつた。驚いたことに、シオン殿下もすぐに来た。シオンはうなだれた。唯一の証人のピーナを個室に連れてイスに座らせ、事情を聞いてきた。

「すると、いきなり数人の覆面の男がやつてきて、ルナスタリーナ殿を攫つていったのだね？」

「はい・・・」

ルナが攫われ意氣消沈しているピーナは、頭をたれて答えた。シオンでなければすぐに泣いてしまいそうだ。

「なるほど。しかし、その者らはやけに手際が良すぎるな・・・」

「え・・・？」

意味深な言葉に思わず顔を上げると、シオンは顔をしかめて考え込んでいるようだった。

「ピーナ。ここはね神殿、しかも国のトップがいるところだよ？そんな所を易々と入り込んでしまうことはまずおかしい。しかも、ルナスタリーナ殿が休まれて部屋に戻っている時間ちょうどに賊が入るなんて、上手すぎるんだ。誰かが、裏で糸を引いているとしか思えない。・・・神殿の者がね？」

「！？そ、それって、神殿に裏切り者がいるということですか！？」シオンの言葉に一瞬頭が真白になる。聖女というのは、国の豊穣を支えている存在だ。聖女がいないと作物はあまり育たないし、病気もはやつたりする。聖女が神殿で神にとりなしをして祈りを捧げるので、聖女が国の繁栄をもたらしているといつても過言ではない。その聖女を補助するのが神官であり、神殿なのだ。なのに・・・！」

「ああ、本来ならば聖女を支えるのが一番の神殿にいる者の役目といつてもいい。でも、その聖女を疎む者もいるのだ。何となく、誰か想像できない？」

翡翠色の瞳で覗き込まれると、ピーナは一人の人間の姿が思い浮か

んだ。

「・・・祭司長・・・？」

「せうだよ」

「でも、祭司長は、確かに聖女様を疎んでいましたが、彼は祭司長ですよ？そんなことをしたら、国や、国民がどんな目に合つか分かる分別はあるはずです！」

「ここ最近聖女は不在だったが、この国は栄えている。だが、それはリーダーである王が優秀であるがゆえに、最小限の被害でとどまっていたのだ。聖女がいるなら、もつとこの国は繁栄していくはずだ。」

「それが、分からぬいよつなんだ」

「何故？」

シオンはため息をつくと、苦々しく話した。

「先代の聖女様が亡くなられて以来、祭司長が実権を握っていたのは君も知っているだろ？彼はね、あくどいことを重ねて今の地位に就いた。君もその噂は聞いたことがあるんじゃない？その噂はほぼ合っているし、もつと酷いことを彼はしているんだ。そんな彼が今の状況に甘んじるとは考えられない」

「そんな・・・」

ピーナはあまりの衝撃にくらつと眩暈がした。祭司長のルナへの嫌がらせは知っていた。だが、そこまでする人だとは思わなかつた。

「証拠はあるのですか？」

「祭司長がある大臣と最近連絡を裏で取り合っているのは、掴んでいたんだ。恐らく、利害が一致しての共謀だろう。だから、何か起こしてくるだろ」と思っていたんだけど。こんなにも早く動くとは」

「では、祭司長を捕まえて、聞いたたせばいいではないですか！」思わず、イスから立ち上がったピーナを、やんわりとシオンはもう一度座らせた。

「それは、難しいんだ」

「つーべりじでー！」

「彼は、実質神殿のトップだよ。そんな人間を確実な証拠も無しに捕まえることはできない。共謀の大臣も高い位にいる。次期王の僕でも、そつそつ捕まえることは難しいんだ。だから、僕たちも裏で祭司長の動きを探っていた。今も多くの手下を使ってルナスターイナ殿を捜させている」

皇太子なんだから、もつと出来ないのですかー?と叫ぼうとして、シオンの顔を見てピーナは叫ぶのを止めた。

シオンの顔は悲痛な面持ちで、自分を責めている様子がまざまざと感じられた。

(この人は悔しいのね・・・。自分は何も出来ないのに、それを棚に上げて怒るのは筋違いだ)

ピーナは自分が恥ずかしくなった。何も出来ないが、冷静にならう。

「聖女様が見つからないときは、どうなるのですか?」

「・・・恐らく、最悪殺されるかも」

「ー?」

「まあ、彼女は聖女だ。だから、彼女が死んだら国の気候は悪くなるし、疫病も流行る。どこかで、監禁されるのが一番高い。彼らも自分の国が栄えにくくなるのは嫌だらうし」

「やうですか」

「殺されるよつはマシだ。ペーナはまつと脳をなでおろした。

「僕も、捜索に加わつてくれるよ」

「はい」

「・・・こんな時、軍が動いてくれるのなら、すこい助かるんだけど」

「はい?」

不思議そうな私を見てすこし笑つて、シオン殿下は答えてくれた。  
「いや、聖女が攫われたのだから、結局軍は動くと思うけど、それまで申請やら会議やらですぐには動いてくれないんだ」

「やうですか」

「まあ、ijhahijhahida一生懸命捜索するから、安心して?んじやー。」

そう言つて、彼は身を翻して出て行つた。

ピーナはシオンの後姿を見ながら、先ほどのシオンの言葉を頭で繰

り返してた。

『軍が「うご」ってくれるのなら』

それを可能にする人間にピーナは毎日会っていたはずだ。

「エドガー総司令官・・・」

次期軍部のトップであり、ナンバー2の彼なら軍を動かせる。

## めめいわぬ（後書き）

この世界での聖女の概念も含んでいます。

## じゅうわめ

ピーナが悶々と部屋で待つていると「失礼する」と言ひて、エドガーがいきなり入ってきた。

いつも涼しい顔をしている彼が今は非常に焦つた様子で、急いできたのが分かつた。

「エドガー様……」

「聖女殿が攫われた、と聞いた。あなたは怪我などはないか！？」

「え、ええ。私は大丈夫です。縄で縛られるくらいでしたからエドガーがピーナに迫るように聞いてきたので、少し引きながらピーナは答えた。

毎日嫌がらせに来るエドガーは、無表情にちかい顔だつたが、声はどことなく心配そうだった。ピーナは拍子抜けしてしまつた。そこまで嫌われてはいなか？それともこれは安心させる芝居なのだろうか？

「それは何よりだ」

ピーナが元気そうなのを確認すると、エドガーはほつとした顔をした。

それを見てピーナは先ほどまで考えていたことを思い出した。ずっと反目していた人だつたが今なら、お願いできるかもしれない。

「あ、あの、エドガー様！」

「？なんだ」

いきなり大声を出したピーナを、エドガーは不思議そうに見た。

「ルナ様が攫われたのです」

「そのようだな」

「あの方は私にとって、本当に大切な方なのです」

「・・・そのようだな」

あれ、少し不機嫌になつた。気付いたが、ピーナは続けた。

「シオン殿下に最悪、こ、殺されるかもしれないとも聞きました」

「そうかもしだれぬな」

ピーナは自分を奮い立たせて、顔を上げた。今からお願ひすることは、これまでの体制を大きく壊すものだ。でも、ピーナにとってこれしか出来ないので。

ギュッと自分の手で拳を作る。

「お願いです、ルナ様をお助けください！！エドガー様のお力で、軍を動かしルナ様を捜索して欲しいのです！」

最後は涙声になってしまった。

「申請やら会議などをしていたなら、間に合わないかもしれません。今すぐ、軍を動かして欲しいのです。・・・ルナ様をたすけてぇ・・！」

ふえっと、嗚咽が漏れるのを、ピーナは押さえ切れなかつた。エドガーを見ながら話していたのに、もはや涙の膜でエドガーの姿がぼんやりとしか見えない。

ルナ様、ルナ様、ルナ様！

どうか無事でいてください。神様、どうかルナ様を殺さないでください。

しばらく、一人がいる個室に、ピーナの鳴き声しか聞こえなかつた。

「何故だ」

「・・・へ？」

「何故、 そもそも聖女殿を思える？ 侍女とは言え家族でもなく見ず知らずの他人だ。 しかも、 彼女と貴方が会つたのは最近ではないか」

思わずエドガーのいきなりの質問に涙が止まる。 ピーナは涙を拭つて、 またエドガーを見た。 彼は、 そことなく、 切なく苦しそうだつた。 そんな様子がまた、 壮絶な色気を醸し出していて、 ピーナは美形は何をしても得だ、 と一瞬場違いなことを思つてしまつた。

おつといけない。 意識を戻さないと。

「ルナ様を愛しているからです」

そう、 それは聖女だから、 という理由ではない。 ルナがルナだから。 その存在がピーナにとつてとても大切なものの。

「何故愛せる？」

「人を愛すことに理由はありますか？」

ピーナがそう言うと、 エドガーは目を大きく開いた。 しばらく間があつた後、 彼は「 そうだな」と呟いた。

「人を愛するのに理由などない」

そう言って、何故か熱い眼差しでピーナを見つめた。ピーナはいきなり背中がムズムズして、居心地の悪さを感じた。

なんか、この視線嫌だ。限りなく、嫌だ。  
すごい、念が込められていそぐなんですけど…

思わず、ピーナは顔を下げる、エドガーを見ないようになってしまった。だが、変わらず熱い視線が自分に注がれているのが、強く感じられた。見られている部分がチリチリと焦がされている気がするのは、何故だろ？・・・。

「あ、あ、あ、それでルナ様のことなんですが・・・」  
堪らず、ピーナは話を戻すことにした。

「ああ。承知した。今より軍部は我が名、エドガーの名より聖女捜索のため全軍をあげて動くこととする」

「ん？なんかすごいこと言い始めた、この人。軍が全体で動くのなんて、何時ぶりだろう？つてか、そういうことって、王様が申請してやつと動くものでしょ？それを一存で決めちゃうなんて・・・まあ、エドガー様は、軍部のトップだからいいのか？でも、こんな簡単に通っちゃうものなのかな・・・」

ピーナが混乱している中、エドガーはきびきびと動いた。

「ヒュージ、そこにいるのだろう？今私が言ったことを全軍に伝え

る。指揮は私がとる

「ハツ」とドアの向こうで声がした。そこで始めてドアがドアの前で控えていたのが分かる。

「では、侍女殿。これより私も捜索に向かうことにす。また来る」そう言って、エドガーは少しピーナを名残惜しそうに眺めた後、無駄の無い動きで部屋を出て行った。

「・・・あ、お礼言えなかつた」

あまりにもすこことを言つてくれたので、言葉も発せられなかつた。

「はははは」

ピーナの力ない笑い声が部屋に広がつた。

神さま、ありがとうございます。何にせよ希望が持てそうです。

（後書き）ささりやじ、

少し、甘くなりましたかね  
・・・?  
?

じ、ひさびさあつた（記書）

こつもあつがとひりやれこます。  
今日は調子に乗って、2話まとめて更新します。

エドガーにより、軍部が動いたことで、事態はあっけなく終了した。エドガーラは自分たちの軍事力をフルに使い、ルナを探し当て、無事救出してみせたのだ。しかも、ルナを攫つた犯人を捕まえ、そこから首謀が大臣と祭司長であることも明らかにし、彼らを拘束してみせた。

誘拐犯の証言により家宅捜索して出てきた多くの証拠から、さすがの彼らも言い逃れが出来なかつたようだ。

ルナは大臣の別荘に監禁されているのが見つかつたが、特に怪我などもなかつた。

「ルナ様～～～！！！」

「ピーナ！」

ピーナは助け出されエドガーラによつて連れてこられたルナにかけより抱きしめた。本来、一介の侍女が聖女に気安くするなど、いけないことだったが、どうでも良かつた。

「良かつた・・！本当に良かつたです。あ、お怪我はありませんか！？怖かつたでしょ？」

一度、ルナから離れ、体を見るが特に大事はないように思える。

「大丈夫よ？監禁されてどうなることかと思つたけど、すぐにエドガー様達が助けてくれたし」

「うへ。お助けできず、すみません。でも、よかつたあああ安心のあまり泣き出したピーナをルナはそつと抱きしめ、背中をさすってくれた。

本来泣くのは逆のはずで、情けなかつたが止められなかつた。

「エドガー総司令官から聞いたわ。あなたが、エドガー総司令官に至急の搜索をお願いしてくれたのでしょ？本当にありがとうございます。エドガ様達もだけど、ピーナのおかげで私助かつたわ」

「そんな、私はぜんぜん・・・」

「いや、ピーナがエドガー総司令官にかけあつてくれたから、早期解決につながつたんだ。君のおかげでもあるんだよ？」

シオンの声がして顔を上げると彼がこちらに来ていた。  
「殿下・・・」

彼はピーナにしか聞こえない声で

「本当、君だから彼も動いたんだしね？」と言つた。

「え？」

ピーナが疑問符を飛ばしていると、シオンは視線をルナに移した。

「ルナスティーナ殿、御無事で何よりだよ」

「シオン殿下・・・」

ポツとルナの頬が赤くなつた。

「僕の力不足を許して。君には怖い思いをさせてしまった」

「いいえ、あなたが一生懸命捜索をしてくれていたことは聞いています。その思いだけで、私はうれしい」

「ルナスター・ナ殿……」

ピーナがシオンを睨んでいる時に、エドガーはピーナを見つめていた。

「失礼します」

そんな時、黒髪の軍の者が入ってきた。

「今回の主犯サルバール大臣、エンボ祭司長の拘束をしました。今は関係者の割り出しを行い、判明次第その者らも捕らることになります」

「ありがとう」

エドガーは無言で頷き、シオンは笑顔で頷いた。

シオンと見つめ合っていたルナは、エドガーにあらためてお礼をしよつと近づいた。

「エドガー総司令官、あらためてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました」

「いや、このよつな事態だつたのだ、当たり前のことだ」

「そういうてくれると、有難いです。あなたの素早い御決意がなければ、私はここにいなかつたかもしません」

そう言つて、エドガーに笑いかけた。

「何かお礼をしたいのです。何か私に出来ることはございませんか？聖女としての地位を乱用することは出来ませんが、私個人として何かしたいのです」

「そうか。であれば……」

エドガーはチラリとピーナを見た。

「時々、あなたのところに話をしにいくことを許してもらいたい」

「ふふ。私とこうより、別のものと話しがしたいのでは？」

「……」

ルナがからかう様に笑つと、エドガーはふいとそっぽを向いた。

「喜んで。毎日でも来て下さつて、かまいませんよ？あいにく、聖女としての学びで私が不在の時がありますが、その時はピーナがお相手するよつにしてもよろしい？」

「一・みる」とで

「えつ！？？」

ルナの言葉を聞くと、エドガーは喜色をあらわにした。とても嬉しそうだ。

逆に一人の会話に耳を傾けていた、ピーナはルナの言葉にショックを受けた。

な、なんですか！？ルナ様！

私はお相手なんて出来ませんよーーお茶を出すだけでも一杯一杯なのにーー！

ピーナは、思わず心で叫んだ。

なかなか、すべてが上手くいくことは難しい。

ピーナが絶望している中、シオンとルナは楽しそうに笑い、エドガーはジッとピーナに熱い視線を送っていた。

数日後、犯人の大臣、祭司長の悪事が国全体に明らかになった。また、一挙に関係者らもつかまり、国に巣くっていた狸どもが消えることになった。

この事により、神殿の権力は実質的にもルナのものとなり、新しいリーダーのおかげで神殿の悪い体制も見直しされるようになる。

じゅりゅわわ

「いい天気ですよ、ルナ様」

「やうね」

誘拐事件が起きたとは思えないほど、のどかな天気だ。

「じゃ、私そろそろ行くわね」

「今日は、神官様たちとの清めの儀式ですね？無理のないよってくださいね？」

「ええ、分かっているわ。・・・後はよろしくね」

「・・・うー、はー」

あの事件以来、大々的に神殿の関係者以外のものが、神殿にも入れるようになつた。それは、いいことなのだが、ピーナにとつてはあまりうれしくない事態を引き起こしている。

コンコンと音がする。

「はー」

ピーナは返事をした。

「エドガーだ。失礼する」  
ドアが開き、いつもながら誰もが見とれてしまつ見田麗しいエドガーが、入ってきた。

「こんなにちは、エドガー様。残念ながら、今日もルナスタリーナ様はお勤めに行つてしまわれましたが・・・」  
「かまわん。待つとしよう」

「はあ。お茶を用意致しますね」

「すまない。・・・待つている間、話し相手になつてくれるか?」

「ワカリマシタ」

毎日同じように繰り返されるこの会話。何度ルナがいないと言つても、このエドガーは仕事の合間に来るのだ。さりげなく、ルナがいる時間を見るのだが、この男はその時間には逆にまつたく来ない。そして、依然と上手い具合にルナがいない時間に来るのだ。だから、侍女であるピーナは今田も嫌々ながらエドガーの相手をする。

(やつぱり嫌がらせなの!?)で、でも、ルナ様が攫われた時は親身になつてくれたし、その恩はしつかり返さなくちゃよね?)

思わず出でたくなるため息を抑え、ピーナはエドガーの向かいに座つた。エドガーを見ると、ずっとピーナを見ていたのか、エドガーと目が合つた。

ギンツー！

（ひいつー）

エドガーの鋭い眼光がピーナを貫いた。眉の間のしわが寄り、切れ目の瞳はさらにそのに陥しさが一層増していく、まるで戦う前の気迫が感じられる。そんな雰囲気に一般人のピーナが平常心でいられるはずもなく、冷や汗が流れる。ピーナ蛇に睨まれた力エルの「とく動けなくなる。もちろん、恐怖によりだ。

少しガタガタと体が震える。

以前からエドガーに睨まれてはいたが、最近ではその睨み方に殺気が込められている。もつ、睨み返すことも怖くて出来ずにいるのだ。

「・・・好きな食べ物は？」

「えー!? 私ですか? わわわ私は、甘いものが好きでありますっ!」  
思わず、軍人のような話しかになつてしまつピーナ。

「具体的にどんなものが好きか?」

「えと、ピラの実のタルトでありますっ!」

「他には?」

「はつー! ザリアのケーキもですっ!」

何の尋問だ、と見ている者がいたなら突つ込むだろうが、生憎とい

うか幸せなこと」というかそんな人間はいなかつた。

そしての「」の会話という尋問の時間は毎日行われている。ピーナが苦手に思うのも、しょうがないことだろ。」

この時間、ピーナは半泣きになりながら、エドガーの相手をする。

（ルナ様 ！助けてください～～）

ピーナは自分の主の名を心で叫ぶ。この酷い状況を、いつも涙涙にルナに語るのだが、ルナは怒るどころかニコニコと笑うだけで助けようとはしてくれないので。かえって、ピーナに留守番をさせエドガーの相手を積極的にさせてくる有様だ。なんの拷問だ、これ。ルナ様ひどい！

「それでは、好きな色は？」

「き、黄色でしょ、うか」

「濃い田の黄色か？薄めの黄色か！？どっちだ」

「ひえっ。どちらかといつと薄めでありますー。」

この日の会話以降、エドガーがなぜかピーナが好きだと言つたお菓子を手土産に持つてくるようになった。初めは「何の呪い！？毒でも入つているの？」と恐怖していたピーナだが、毒が無く、しかももつて来るお菓子がどれも有名店のものだと分かると、喜んで食べるようになつた。

「しかし、不思議な人だな。侍女である私に良くしたって、何の  
得も無いのに」と能天気にもぐもぐケーキをつつきながら食べるピ  
ーナだった。

（後書き）あさひる（あさひる）

恋愛小説を書いているつもりなんですが、まったくもって甘くなりません（笑）すみません～

## じゅうせんわめ

「いやー、カラピヤの地でのエドガー様はさうにすこいカリスマ性を發揮したんだよね。この時らへんから、総司令官の能力を全開で發揮して、周囲も認めるようになつたってわけよーーー！」

「はあ

「かつこーんだよ。すゞモテたんだけど、エドガー様は全然女の子を相手にしなくてさ。でも、一度認めた部下とかはスゲー大切にするから、きっと誰かに惚れたら一生その子のこと大切にするね、きっとー！」

「そうですか

「うんうん。俺も保証するし。エドガー様はすっげー優良物件だよ

「へえ

ピーナは一刻ほど前から続く田の前にいる男の話に、うるさりしながらも相槌をうつていた。

目の前にいる男は、エドガーの右腕とも呼ばれるスカル・ヒュージ大佐である。ツンツンと無造作に生えている短い黒髪に、人懐っこい笑顔の持ち主だが本音を見せない瞳は、さすがエドガーの腹心の部下である。以前、ルナを脅しに来たエドガーの後ろにいた部下の一人だ。

そして、何故か最近ピーナのところに来てお茶を飲みにくるようになった。と言つても、楽しい談笑というわけではなく、1・2時間延々とエドガーがどんなにすばらしい人物かを語るのを、ひたすら

ピーナが聞いているだけなのだが。

めんどうなことに、ヒュージ以外にも、エドガーの部下の何人が入れ替わり立ち代わり来るようになった。かれらもヒュージ同様、エドガーがどんな偉業を成し遂げたかを延々と話していくのだ。おかげで、エドガー様ファンのお嬢様方とエドガーについてのトークができるくらいに、エドガーのことを知れた。まあ、別に知りたくないけど。部下の方々の話の内容は結局エドガーを褒めるものなので、さすがに飽きて時々意識を飛ばしながらも聞くようにしている。

毎日、エドガーの相手をするだけでも、大変な心労なのに、ピーナの苦労は増えるばかりだ。

（もう、軍の方達って、どうして迷惑なかたばかりなの！？つていうか、どんだけヒマしているのよ！…ここに来る暇があれば、体でも鍛えてればいいのに…）

ピーナは内心、軍人達に毒づいた。

「ところで、ピーナちゃんの好みの男性ってどんなタイプ？」  
ずっとエドガーのことを話していたのに、話題がいきなり変わった。

「わ、私ですか？」

「そうそう。正直にお兄さんに言ってみなさい。男性として良いアーバイスが出来るかもだしね」

「ドバイスが出来るかもだしね」「二口二口と言つヒュージ。いきなり、何なのだ。

「え、えと…。神殿ですつとルナスタリーナ様をお支えしたいと考  
えておりましたので、あまり男性の方をお付き合ひするといつ」と  
は考えてませんでしたので、特には…。」

「アジで？」

「  
」

ヒュージの顔が真っ青になつた。

「じ、じゃあ、結婚とかする気はないのー?」

「あまり。まあ、両親には文句をいわれるかもしだせんが」  
ピーナはルナをこの神殿の中で、守ろうと決意してからは結婚しないで独身のまま神殿に勤めようと漠然と思っていた。小さい時から、神殿の中で働いていたから、そんな色恋にも縁がなかつたし、大して未練は感じていな。

いきなり、ヒュージが叫び、ピーナに詰め寄つた。

「ダメだよ？ ペーナちゃん！ 若い子がそんなこと言つちやー！ 女の子なんだから、結婚とかには夢を持たなくちやー！ それ、神殿ですか

と勤めるたつて、結婚して勤める」ともできるんだしね、ね？

「は、はひ」

ヒュージの氣迫に強然としながら、ピーナは返事をした。

「やうだ！ 神殿に勤めているんだから、玉の輿とか狙つたら？ お偉いさんとか聖女様関係でここに来るでしょ？ そんな出会いで恋が始まつたりして～」

「私なんかにありえませんよ。結婚するとしたら、親が準備した縁談とかでじゃないでしょつか」

「いやいやいやいやいや。あるかもだよ？ きっと、ある…ってか、絶対ある…！」

ヒュージは自信満々に言い切つた。その自信はどうから来るのか。

「ありがとウイザードます？」

「ピーナちゃん、灯台下暗しだよ？ 近くに意外とその出会いが始まつているかもだよ～？」

ニヤニヤと笑うヒュージ。

あ、なんだか、嫌な笑い方だ。

帰り際、「いい？ 結婚を諦めたら、ダメだよ？ 約束だよ？」と何度も確認していくヒュージに、曖昧に返事をしながら、見送った。本当、めんどくさい人たちだ。

一息入れていると、ドアが叩かれた。

「はい」と返事をし開けると、案の定エドガーだった。いつもながら、軍の服装をきちつと隙なく、着こなしている。

「失礼する。先ほど、ヒュージがお邪魔したよつで、申し訳ない」

「いえ。先ほども結婚についてアドバイスしていただきだんですねよ」

「け、結婚？」

「はい」

いつも冷静なエドガーだが、何だか焦っている。

「ちなみに、どんな」と話をしたのか？

「えーと、好きな男性は？とか？」

「……ヒュージめ」

「ひつ」

エドガーは小さく、毒づいた。目が鋭くなり、殺気が流れた。  
しかし、怯えるピーナに気付くと、殺氣を引込め、「ゴホンと咳払い

をした。

「……ピーナ殿はどのよつな男性が好きだと答えたのかな？」

何気なく聞く「う」としているエドガーだが、目は『早く聞かせろ』とせつづいている。

「私は聖女様のお側でずっと働きたいので、結婚する気はないとお

話しました

ピーナが答えると、エドガーは衝撃を受けたよう、口を大きくした。音が聞こえるなら、雷が落ちた音がしたはずだ。

「や、そうか」

しばらく、エドガーは呆然として、かすれた声で呟いた。

「すまない。今日は用事が出来た。帰ることにする。これは土産の菓子だ。食べててくれ。では」

そう言つて、フラフラとしながらエドガーは部屋を出て行つた。

「何だったのかしら？・・・まあ、今日はすぐ帰つてもうつたし、お菓子もらつたし、よしとしますか？」

考えることが好きでないピーナは、エドガーのことを考えるのをすぐ放棄し、菓子のつつみをウキウキと開けた。

その日のエドガーの機嫌は最悪で、軍人達の鍛錬の時間はまさに地獄絵図だった。特に、何故かエドガーの攻撃はヒュージに向かつたらしい。

だが、本日もアインシュベルツは平和である。

## じゅうぶんわぬ（前書き）

な、なんとか更新間に合いました！  
今回は、エドガー視点です。

軍部の総司令室で、エドガーは悩んでいた。

悩みの元凶はもむらひん、聖女の唯一の侍女、ピーナ・リロシットといつてである。

そして、悩みとは彼のピーナへの恋についてである。

彼とピーナの出会いは、とても衝撃的な出会いだった。

初め、エドガーは神殿のトップの聖女であるルナを脅し、軍部の権力を強くしようと田論見で、神殿に押し入った。本来、軍部が神殿に立ち入ることは不可能なのだが、神官を怯えさせ無理やりルナに会おうとした。

この国最強のエドガーの圧力に神官たちはすんなりと聖女のもとへと連れてきた。このまま、計画通り聖女を脅すことができると思つた矢先、出会つたのが彼女　ピーナ　だった。

ピーナは小さい体で屈強な男達に歯向かつてきた。位ばかり高い神官たちが自分たちに恐怖して聖女に会わす事を了承したのに対して、元下女であるピーナが自分達を恐れずに対抗してきたのだから、おかしなものである。

少し脅せばすぐに引くだろう、と思っていたのだが、彼女は頑として引かなかつた。彼女の聖女に対する忠誠心がとても厚いものであることが分かつた。仕方なく、剣や殺氣を使って、退いてもらおうとしたのだが、彼女はやはり引かなかつた。

逆に、軍のトップである自分に怒り、皮肉まで言つてくる始末だ。

初めは、彼女に対して憤怒の気持ちがあつた。しかし、彼女と睨みあつてゐる内に、胸が激しく動悸するのが感じた。『何だ、これは？』と心中焦つた。

ずっと自分を睨んでくる彼女がけなげに感じられ、それでいて可愛く見えてしようがない。普通、総司令官である自分に歯向かおうとする人間なんていらない。媚を売るか、従うかだ。なのに、この少女は違つた。自分にけんかを売つてまで、聖女を一生懸命に守りうとしてきたのだ。彼女の一生懸命な姿に、エドガーは胸が打たれた。

睨んでくる　　といつても、可愛くて迫力はないのだが　　ピーナを、見ていられなくなる。体中の血が逆流していくようで、熱い。

たまらず、踵を返してそこから去つていた。

この気持ちが恋であることに気付くに、そう時間はかからなかつた。

初恋だった。

恋だと実感すると、エドガーの行動は早かつた。

初恋は上手くいかないと世間で言われているようだが、エドガーは失敗させるつもりは毛頭なかつた。将来、ピーナを妻にすることは、彼の中で既に決定事項である。

彼は獲物を狩る獸のよつて、どうすれば獲物を捕まえられるか考えた。

とりあえず、アプローチの為、毎日聖女に会つといふ名目で、ピーナに会いに行くことにした。聖女に会つてしまつたら、この言い訳は使えなくなる為、神官たちにお願いして（齋して）聖女が部屋にいない時間を教えてもらい、ピーナのもとへ通つた。

だが、緊張のあまり話すことが出来ず、彼女を見つめることしかできなかつたのは不覚である。しかし、優しい彼女はそんな自分をずっと見つめてくれた。お互いに視線をはずすことなく見つめ合う時間は、エドガーにとつて甘美であり幸せな時間となつた。

そんな時、聖女が攫われた、ということが耳に入り、すぐさま神殿に向かつた。エドガーの頭には、聖女ではなく、ピーナが無事かどうかしか無かつた。彼女は無事であつたが、聖女を心から大事にしているのが感じられ、正直面白くない。聖女への思いは男女間のものではないと分かつていても、彼女は思いがすべて自分に向けて欲しいと思つたからだ。

気持ちを抑えられず、「何故、そつも聖女殿を思える?」と聞いてしまつた。

彼女はまっすぐ自分を見つめ「愛するのに、理由は要りますか？」と逆に聞いてきた。その言葉を聞いて、甘い疼きを感じた。そうだ、自分は彼女を愛している。何故かと聞かれても、『ただ、愛しいから』としか答えられない。彼女のすべてが好ましく、愛しい。欲しくて、堪らない。この気持ちに理由はないが、それでいいのだ、と彼女に言わわれている気がした。

甘い気持ちに浸っていたかつたが、事態が事態であったので、すぐ聖女の搜索へと向かつた。本来軍が神殿のためにすぐに動くことはない。だが、理由があれば、別だ。ピーナの願いだから、この理由に勝る理由はない。愛しい者の笑顔を見る為に、全軍を使い搜索にあたらせた。

現在聖女を助けたからか、以前よりピーナの態度がやわらかくなつた気がする。

そう、チャンスなのだ！

好きな女が自分に好意（恋愛の好意ではないが）をもつているこの時が、まさに好機！ここぞ、とばかりにエドガーはピーナに質問をし、彼女の好きなものから嫌いなものまですべて知ろうとした。今では、『ピーナ 研究ノート』が10冊になり、そろそろ11冊目に突入する。

知れば知るほど、彼女が好きになっていく。

彼女の名前も、侍女殿からさりげなく名前呼びするようにした。ちなみに、最終的な目標である彼女の呼び方は、『ハニー』だ。

そんなとき、彼女が結婚する気が無い、と聞いた。あまりのショックに、彼女との会話もそぞろに帰ってしまった。しばらく、落ち込んだ。

しかし、彼女が結婚する気がないから、何なのだ。

彼女が結婚する気にさせればいいだけのこと… そう、それだけのことなのだ。

エドガーは、新境地に至った。

思わず、笑いが出てくる。

一人静かに、エドガーはクツクツクと笑った。

「総司令室のドアの前にて

「おい！エドガー様が一人、笑ってるぞ！」

「！」

「ヒューブ！お前、入って書類出してこいよ」

「無理だつづーの！今行つたら、絶対殺される！ピーナちゃんのことを考えているのを邪魔するだけで、機嫌が悪くなるんだぜー…？」

「だよな！本当重症、つーか、なんつーか…」

エドガーの部下である大の屈強な男たちは、擦つた揉んだとお互いに必要な書類を誰が出すか、押し付けあつていた。恋は盲目、というが、エドガーはそれが特に酷かつた。<sup>ピーナ</sup>獲物を手に入れるために、容赦はしないだろう。

「しかし、哀れだよな。ピーナちゃん」

「やうだよな」

「ようにもよつて、あのエドガー様に好かれるなんて…」

「良い子なんだけど」

いくら、容姿・頭脳・地位が揃っていても、エドガーが向ける愛情は、半端ない。ってか、絶対重い。重すぎる。

男たちは、哀れな獲物に、哀悼の意を捧げた。

最近、城下では噂が飛び回っている。その噂に出る主な人物達は、この国を担つていくシオン殿下、エドガー総司令官、聖女のルナスタリーナらだ。

どんなことが噂になつてゐるかと云ふと、シオンとエドガーが聖女に恋をして毎日のように神殿を訪れて、求婚している、というものだ。事実エドガーは毎日ルナに会いにくる、という名目で来ているし、シオンは毎日というわけではないが、ルナとの度々のお茶会を楽しんでいる。

こんなことだから、噂の真実味も増して、まことしやかに人々の間で話しが飛び交っているのだ。

その噂は神殿にも当然伝わつており、ルナは少し困つたように「うん、どうしよう」と苦笑いしていた。シオンとのお茶会は、ルナ自身心待ちにしているものであり、噂もあながち間違つていなかもしれない。しかし、シオンはいいとしても、エドガーのルナに対しての思いは噂とはまったく違うものだ。エドガーはまったくといつていいほど、ルナに关心はなく、別の人間に夢中だからだ。だからといって、それは、当人達で越えていく問題であつて、周りの人間に明かしていいものではない。この噂はルナにとつてあまり好ましくないものだつたが（特にエドガーものは）、大切な侍女を守る為にも、ルナはこの噂に対しても、何も否定も肯定もせずただ無言を貫くことにしたのだ。

だが、周りの人間はそれを許さないらしい。

ピーナは部屋の掃除をあらかた終えて、満足げに部屋を見渡した。いつも頑張っているルナが、せめて部屋でくつろげるようにならぬ掃除には余念がない。

「よ～し…我ながら、完璧ね！」

キラリと額に浮かぶ汗をぬぐい、満面の笑みだ。

（すこし、休憩しようかな？）

そう、お茶の準備をしようとした時、ドアがコンコンと叩かれた。なんだらう？…と思いつながら、「はーい」と返事をして、ドアを開けるとこづやの神面が困った顔をして立っていた。

「どうしましたか？」

「聖女様に御面会をしたい、といつお方がこられておつまして…

「

あれ？なんだかこの感じ、前もあつたよつな…。  
内心、ピーナは首をかしげた。

「エドガー様ではなく？」

「はい。実は・・・・・第一王女フイレナ様です、なんですよー？」

「シレアの葉の茶に」ござります・・・」  
そう言つて恐る恐るカップをフイレナの前に置くが、フイレナは眼差しをピーナに向けず無言だった。

あの後、かしこまつた神官に連れられてきたフイレナは「聖女殿に用があります。居ないのであれば、少しここで待ちます」と畳然とするピーナに言い放ち、ピーナが返事をする前に部屋に坐つたと入ってしまった。

以前一度だけ見たことがあるフイレナは、なかなかの美少女である。美しい母親と同じ輝く金髪を丁寧にカールさせ、毎日お手入れされているだろう肌は、毎日働いてガサガサになつてているピーナとは大違いに綺麗だ。また、蒼い瞳は、シオンと同じ色だが、強い意思を感じられる。年は一八歳なので、ピーナと同い年なのだが、そろは思えないくらいの堂々とした態度だ。

お茶を出し終えると、ピーナはすくすくと後ろに下がつた。本来ならば、侍女とはまるで居ないもののように控えめにしているべきなのだろう。しかし、主であるルナはピーナを親友のように扱い、シ

オンも何かとピーナに話しかけてくれる。あの恐ろしげにエドガーでさえ、お茶を出す時には「ありがと」の一言。ついで（その後は尋問のような空気が怖いが）。

だが、フィレナはピーナに目もくれない。上にいる者として当たり前の態度なのだろうが、少し悲しい。

（こつも、監さんのが優しいから、それに慣れてしまったのね。甘えちやダメだ！）

自分に渴を入れ、静かに侍女らしくたたずんでいると、いきなり黙つていたフィレナに話しかけられた。

「あなた、聖女様の侍女でしたね？」

「は、はい」

いきなり話しかけられたことに驚きつつも、ピーナは答えた。

「聖女様はどんな方がいらっしゃる？ 私、御挨拶に来て下さった時しか、お会いしてないからよく存じないの」

「と、とても優しい方です。容姿だけではなく、心も美しいのです。私のような者があ仕えするのがもつたいたいござりで」

「ふーん」

なんだか、フィレナは気に入らないと言わんばかりに相槌をした。

「最近、お兄様が聖女様のところに通われているみたいです。そのせいで、良からぬ噂が飛び交っています。あなたも聞いたことはあるでしょう？」

「はあ。少しば」

「そのような噂は、本来されてはいけないものだわ。聖女様が誰かと恋するなんて、人々の動搖を誘います」

聖女が結婚してはいけない、という法はない。しかし、聖女が結婚した、という例は極端に少ない。というか、初代の聖女以外は皆結婚しなかつたらしい。というのも、聖女という国の状態を支える存在と誰かが結婚しようものなら、その男は大きな権力を握ることができるようになる。聖女の力を思いのままに操ることが出来てしまえば、国の体制自体が崩壊する可能性がある。それを防ぐためにも、聖女が結婚するのは暗黙のうちにタブー化されているのだ。

だが、聖女といえども一人の女である。恋もすれば、誰かに愛して欲しいと思うのは、当然である。なのに、聖女の恋 자체、禁忌のように言ってくるフイレナの言い方はピーナにとって好ましくなかつた。

「・・・・・」

思わず、返事に窮していると、構わずフイレナは話を続けた。もとより、ピーナの返事なんて気にしていないのであるづ。

「それに、あのエドガー様が毎日ここへ来ている、というわけではありませんか。エドガー様は将来軍の頂点に立つ方ですよ？なのに、時間を取らせているなんて・・・！」

エドガー様がルナ様がいる時間にこないのが、一番の原因です。

そう言えたら、なんてスッキリするだろ？

ピーナは、段々文句のようになつてくるフィレナの話を、我慢して聞いていた。

そんな中ドアが叩かれ、「エドガーだ」と声がした。

最悪のタイミングだ、とピーナは絶望した。

逆にフィレナは、先ほどの鬱々とした表情から一気に、頬が赤くなり表情が明るくなつた。

そして、入ってきたエドガーに笑顔でかけよつた。先ほどの高圧的な雰囲気はどこへ・・・？

「エドガー様！お久しぶりです。このよつなどいろでお会いできるなんて、嬉しいですわ！」

「・・・・・」

エドガーは、怜俐な顔を少ししかめた。頬を染め見つめてくる王女の後ろには、意中の少女がたたずんでいるが、なんだか顔色が冴えない。

「・・・お久しぶりですね。あなたも聖女殿に御用か？」

「ええ、少し御話したいと思いまして。エドガー様もですか？」

「ああ」

そう言って、エドガーはすり寄るフィレナを避け、ピーナのところへ大またでやつてきた。

「今日も待たせてもらひ。これはいつもの菓子だ」

「ありがとウイゼーます。あ、これは・・・」

「ああ、確かピーナ殿が一番好きだと言つていた、ピラの実のタルトだ」

覚えてくれていたんだ・・・。なんだか、フイレナの見下す態度に冷たくなつていた心が、温かくなつた気がした。いつもお菓子を持ってくるエドガーに当たり前になつていて、本当はとても感謝すべきことだったのだと、改めて感じさせられた。

「嬉しいです！」

溢れんばかりの笑顔で、お菓子を受け取つたピーナに、エドガーも口元をほころばせた。

そんな一人を見て、フイレナは美しい顔を歪めた。

「・・・エドガー様はいつもこちらへいらして、聖女様をお持ちしているとか。その間は何をしているのかしら?」

「何も。ただ、お茶を用意してもらい待つていてるが」  
いつになく怯えないピーナとの会話を邪魔され、内心イラついていたエドガーは、淡々と答えた。

「あなたが用意するの?」

フイレナの目線がピーナに移り、ピーナは焦つた。なんだか、睨ま

れでいる気がするからだ。

「は、はい」

「やうなの・・・」

そう聞いて、フィーレナは考え込むように黙り込んだ。

（後書き）さむらいじ、

ライバル登場！

（複数形）をさへひらかじ、

（複数形）をさへひらかじ、

「では、ルナ様。実家に帰らせていただきますね。夜には戻ります」「分かつたわ。でも、いいの?泊つてもいいのよ?」

「ダメですよ。ルナ様のお世話をする侍女は私だけなんですから!それに、これ以上は甘えられません!」

「ふふ。ピーナらしいわね」

ピーナはいつも着る侍女の服装ではなく、軽装の格好をしている。何故なら、今日は実家に帰るのだ。その理由は、昨日に遡る。

「今日、フィレナ王女がいらした、と聞いたんだけど本当?」ルナが、心配そうにピーナをみた。

「あ、はい。ルナ様に用事がある、とのことでしたが、結局エドガー様と一緒に帰られました。」

「そうなの。何しにきたんだか」

そういえば、そうだ。フィレナは、待っている間ずっとエドガーにひつきりなしに話しかけ、ルナが来ないうちに帰ると言つたエドガーに付いて一緒に帰ってしまったのだ。

エドガーは、自分に付いてくるフィレナを嫌そつに見ていたが、諦

めたように向も言わず去つていった。

「そうですね~」

ルナはピーナに近寄つた。

「それはそうと、何だか元気ないわ。どうしたの?」

「え! ? 別になんでもないです! !」

ピーナは手をブンブン振つて、否定した。

あはははは、と誤魔化そうと笑うピーナを胡乱な目で見たルナは、「そうだ」と手をポンと叩いた。

「明日は、気分転換に城下に下りて、実家に帰つてみたら?」

「ええ! ? そんな、お仕事がありますし・・・」

「こつもピーナは頑張つてくれているから、御褒美よー。」

「ルナ様」

「これは、命令なんだからね!」

腰に手を当てて怒ったように言つるナ。しかし、本当に怒っているのではなく、ピーナへの愛情のために、言つてくれているのがピーナにまやまやと感じられた。

「はい・・・」

ピーナは、頷いた。本当に、ルナ様に仕えられて良かつた、と思いながら。

こんなわけで、翌日ピーナはルナの『気分転換に』という言葉に甘えて、実家に帰ることにした。最近、侍女になつて実家に帰るのもご無沙汰になつていたので、ルナの申し出は有難かつた。ルナは神殿の門まで、ピーナを見送るために、一緒に来てくれた。

「では、行つてきます」

「行つてらつしゃい」

ルナは大切な侍女 ルナは大親友と思っているが の後姿をまぶしそうに見た。ルナがこうやつて聖女としての役目を出来ていいのは、ピーナの励まし・存在が大きい。ピーナがいなければ、自分はこうやって、立つていなかつただろう。彼女の明るく、一生懸命な気持ちは、ルナの心を暖かくする。

そんな大切な彼女に、今春が来ている。・・・といつてもピーナは分かつていなが。だが、ピーナにとつて大切な時期だらう確信している。だからこそ、壊してはいけないと思う。ピーナとエドガー、二人の恋がどうなるかは分からぬ。だが、大切に見守つていこう、と思うのだ。

小石に躊躇、転びそうになつたピーナを見て、ルナは小さく笑つた。

「頑張れ、ピーナ！」

そう呴いて、自分の今日の勤めのため、くるりと後ろを向いて歩き出した。

「久しぶりの家だな」。よし、何かお土産でも買つてこい!」  
最近、来ていなかつた城下は、いつものようににぎわつてゐる。ピーナは露店の商品や、様々な店、行き交う人々に目と留めつつ、久しぶりの城下を堪能していた。

ピーナの家は、城下のパン屋を営んでゐる。祖母と両親、そして5つ離れた弟がピーナの家族だ。

弟のビリーにはペンを買つてあげよう。なんでも、学校のクラスでの成績が一番らしいし。

少し、生意気になつた弟の顔を思い出しつつ、フフと笑つてゐると「ちよいと、待つてくれんか」とお爺さんに呼び止められた。来ている服はお世辞にも綺麗とはいえず、伸び放題の髪と髭は彼の顔を見えなくしてゐる。

ただ、髪と髭の間から少し見える瞳は、老人とは思えないくらいキラキラと精彩を放つてゐた。

「すまないのう、お嬢さん。ぎつくり腰になつてしまつて、動けんのじや。ちよいと、家まで送つてくれないかのう」

「わ、大丈夫ですか?もちろんです!お家はどっちの方面ですか?」  
ピーナはすぐに、老人の肩を持つた。

「ありがとうございます。あっちの方面なんだが、大丈夫かね?」

老人は指で方角を示した。

「はい、分かりました!」

「何か、用があつたのでは、ないか?すまない」とした

老人は、眉を下げ申し訳なさそう（といつても表情はみえないが）にした。

「いえいえ。後でまた買つともできますし、お爺さんのことのほうが大切ですからー。ぎっくり腰なんですね？痛いのでしょうか？私の祖母もよくなつてつらそうにしていたから、気持ちは分かります」

「ほつほつほ。そつかいそつかい。お嬢さんのお婆さんも、良い孫をもつたようだな」

「そんなことは・・・」

ピーナは照れくさそうに、頬を赤らめた。

この後、老人を家に送ろうとしたが、それはなかなか難しかつた。その原因是老人本人にある。この老人、家に送る途中「実は買い物があつて、店に寄つて欲しい」と一つに限らずいくつものお店に寄らせ、買い物をさせた。ぎっくり腰はどうしたのか、とツツコミたかつたが、ピーナは我慢して根気強く付き合つた。

おかげで、ピーナは老人と荷物の両方を持つことになり、へとへとになつた。仕舞いには、「廁にいきたい」と言い出し、ピーナは老人を廁の前で大量の荷物と待つ羽目になつた。

「おおー！あそこがわしの家じゃ。着いた着いた」

「いーいーですかあー？ぜつはあー、良かつたですう」

そう言つピーナは疲れ果て、息が切れていた。しかも、すっかり夕方になつてしまつた。

「ありがとう、お嬢さん。お礼にお茶でもどうかな？」

「け、結構です！お気持ちだけ受け取つておきまー。」

このまま、お爺さんに付き合つたら、もう実家に帰れなくなる。それでは、せつかくのルナ様の気持ちを無駄にしてしまう…。

「やうか、残念じやのう」

老人は懐からガサガサとまわぐつた。

「これは、せめてもの礼じや。もらつておくれ」

そう言つて、ピーナに差し出したのは、シンプルだが、綺麗な蒼い石に獅子の模様が刻まれているペンダントだった。

「え、そんな・・・・こんな高価なものお受け取れませんー。」

「いやいや、君に受け取つてほしい。わしのよくな爺が持つよりも、お嬢さんのよくなかわいいい子にこれは相応しい」

「で、でも～」

「もらつてくれるじや ろう？」

そう言つて、老人は強制的にピーナの手にペンダントを握らせた。少し垣間見た老人の力強い瞳に、圧倒されピーナはペンダントを貰い受けていた。

「あ、ありがとう」やれこます。それでは・・・」

「ふむ、また会えたらの～」

そう言つて元気そうに腕をブンブン振つて、老人はピーナを見送つてくれた。

本当に、ぎりぐり腰だつたのだろうか・・・。潑刺とした老人に疑問を抱きつつ、ピーナは実家に向かった。

疲れて、トボトボと歩くピーナの遠ざかる背中を、老人は目を細めて見ていた。ニコニコと笑う様は、まさに好々爺だ。

「とても素直で優しい子ではないか」  
老人は長い髪を触りながら、呟いた。

「あの子なら良いだろ?」

また、会おう。ピーナ・リロット」

老人はいつのまにか、消えていた。

ピーナは暗くなつた、帰り道を急ぎ足で歩いていた。  
夜だからといって、にぎやかなこの城下町では人が見えなくなることは無い。だが、ルナと夜には帰る、と約束していた為、急がねば

ならない。

老人と別れたあと、ピーナはやつと実家に帰った。家族にはお土産もペンも買えず申し訳なかつたピーナだが、家族が喜んで迎え入れてくれたので、ほつとした。

家族と一緒に夕飯を食べたピーナは、ずっとルナがどんなに素晴らしい女性かを政治家のごとく大演説した。

ピーナが聖女の侍女としてやつているのか不安だつた家族も、ルナが良くなしてくれているのを知つて安心したよつだつた。

短い時間だつたが、久しぶりの実家を堪能し、ピーナは意氣揚々と神殿に帰つた。

翌日、とんでもないことが待ち受けているとも知らずに。

## じゅうななわめ

ピーナは気分がとても良かつた。ほんのひと時だったが家族と会つことができ、嬉しかつたからだ。

昨日あつたお爺さんにもらつたペンダントは、服の中に隠れてはいたが身につけていた。なんだかんだ言つても、お爺さんの好意がうれしかつたからだ。

蒼い石できたペンダントは、ピーナの胸のあたりで淡い光を放つてゐる。

ルナ不在の中、いつもよりも早く洗濯物や掃除を片付け、暖かい天氣にまどろんでゐると、神官がやつてきて来客を告げてきた。

「フィレナ王女がピーナ殿に、面会を御希望です」

「わ、私ですか！？ルナ様ではなく？」

「はい、そのようです」

一介の侍女に王女が話があるなんて、考へられない。神官も不思議そうにしていたが、伝えられた内容をそのままピーナに話した。

「なんでも、ピーナ殿だけに用があるらしく、お一人で来て欲しいそうです。フィレナ王女は客室にてお待ちです」

「はあ・・・。分かりました」

ピーナは觀念し、神官の後ろについていった。

（何故に私!? 偉い人なんて、今まで話したこと無かつたし、緊張する! · · · ん? 待てよ? 結構私偉い人と話してるかも。ルナ様はもちろん、シオン殿下でしょ? あ、エドガー様も一応偉い人なのよね · · · 忘れてたけど。ヒューブ様や他の部下の方々も実は軍の幹部の方々だし · · · 私つて実はすごい環境にいる! ?）

今更に、自分の状況を把握したピーナだった。そんなことを考えて  
いると、いつのまにか客間に着いていた。

「どうしましょ、とにかく連れてきた神官に田線で訴えるものの、諦めたように首を振られた。あ、裏切りましたね、今!! 神官は「では」と小声で言いつぶつてしまつた。

ちよ、待ってください! ピーナはそそくかと去る神官の背中に、思わず手をのばした。しかし、神官は触らぬ神たたりなし、というようにわざと行ってしまった。

頼りにならねえ！

ピーナはドアを見た。このドアの中にはあのフィレナ様がいる。ここは腹をくくらなければならないだろう。

「失礼します！お呼びいただいたルナスターーナ様の侍女をさせていただいている、ピーナ・リロットです」

恐る恐るドアを開けると、フィーレナはチラリヒーナを見て、自分

が座つてこむ向かいのソファを指差し「ソリック」と囁つた。

「し、失礼致します」  
こわいわとソファに座ると、フィレナはピーナに視線を合わせた。  
なんだか、睨まれている。絶対気のせいなどではない。

「今日、あなたにここへ来てもらつたのは、他でもありませんあなた自身のことについてです」

「はい」  
何を言われるのか、とフィレナを見ていると、フィレナはキッヒピーナを睨みつけて言い放つた。

「あなた、侍女を辞めなさい」

「・・・え・・・?」

何を言われたのか一瞬分からず、ピーナは頭が真白になつた。

「聞けば、あなたは貴族でもなく城下街の娘なのでしょう? 聖女様の侍女というものは、貴族の娘がやるものと決まつております。あなたのような下々の者が、聖女様の侍女になるなんて言語道断ですわ。立場をわきまえなさい!」

言われていることは、以前に神官達にも言わしたことだ。しかし、このように憎憎しく見られ、言われたのは初めてだ。  
息が止まつそうになるほど、胸が痛むのは何故だらう。

「地位も教養もない者に侍女をさせるなど、周りがよく許しましたね。周りが許したとしても、私は許しませんよーどうせ、ここに来

て間もない不安な聖女様につけこんで、侍女に任せたのでしょうか。  
?なんて、小さかしい!」

「そ、そんなことは……」

「聖女様もお可哀想。あなたのよつう者が侍女なんだから。心の中ではあなたを煙たく思つていてよ!」

「つー」

「聖女様にあなたのような者は相応しくないわ。あなたが侍女をしているだけで、聖女様の権威がさがつてしまつ。聖女様はお優しいから、あなたを辞めさせることができないだけなんだわ。あなたのほうから、侍女を辞しなさい」

フィレナの言葉一つ一つが、ピーナの心をえぐつてくれる。ピーナの存在自体を否定された気がした。

確かに、私が侍女をやるのは、不釣合いかもしれない。でも、決めたのだ。

「・・・それは、できません」

ピーナは震える声を必死に抑えながら、言葉を発した。鼻の奥がつーんとする。

「何故!?あなたも強情な娘ね。あつかましいわ」

「せつかもしれません。ですが、決めたのです。ルナスタリーナ様をお守りすると」

「あなたが?冗談もほじほじしたら」

容赦なく、フィレナはピーナに突つかかってくる。

「確かに、私は役立たずで何も出来ません。でも、何と言われようと辞めません！」

絶対にルナをやる。何も出来ないけど、一緒にいて痛みを分かち合うことはできる。

そう思つから、ピーナは辞めない。

「……」

ピーナの言葉に、フィレナはカツとなたのか、持っていた扇を投げてきた。

「いっ」

扇がピーナの頬に当たった。鋭い痛みが頬にはじる。

「なんて、娘かしら！身分をわきまえなさい、と言つているのが分からないの！？」

フィレナは思わず、ソファから立ち上がり、ピーナに怒りをぶつけた。

何も言わないピーナは、俯いていて表情が見えない。

無言のピーナに業を煮やしたのか、フィレナはダンつ！と机を叩いた。

「だんまり？つべづく礼儀のなつてない娘ね」

それでも、顔を上げないピーナを、フィレナは苛立つたように見ていた。

しかし、反応がないのを見てそのまま、フィレナは「もういいわ、明日また来るけど、その時には辞めもらいますからね」と言い残

し、憤りを隠さず去つて行つた。

バタン！とドアが閉められた。部屋には誰も居なくなる。ピーナはソファに座つたまま動かなかつた。

ピーナの膝の上に置いた手の上に、ポタポタと水滴が落ちた。いつのまにか、ピーナは泣いていた。

自分はここに居ていけなかつたのだろうか・・・。

ルナ様に、本当は迷惑をかけているのか・・・。

私は分不相応なのだろうか・・・。

そんな言葉が頭の中をぐるぐると渦巻き、堪らはずピーナは部屋を飛び出した。

とつあえず、ここから出たかった。

「ふえ、えつ、うくつ、うつ」

ピーナは神殿のはずれにある庭の隅で泣いていた。ここは、人が滅多に来ない場所で、長年働いている神官達でさえ、ここを知らないだろう。偶然、ピーナが見つけた穴場だつたりする。落ち込んだりした時は、いつもここで泣くのだ。

「うえ、うー、ふくつ」

涙が止まらない。あそこまで、憎しみをぶつけられたのは初めてだ

つた。

ピーナだって、自分が侍女でいいのか、と自問自答したときはあつた。だが、ルナが『居て欲しい』と言つてくれたからこそ、侍女として足りないながらも一生懸命にやってきた。

しかし、自分は本当はいけない邪魔な存在だったのだろうか・・・。

そんな考えがつらつらと止まらず、ピーナは子どものように泣いていた。

そんな時、誰かの足音が聞こえた。

ここは、『ピーナ専用の泣き場所』ですよ、と一瞬バカなことを考へていると「ピーナ殿？」と名前を呼ばれた。

ふえ？と思わず涙が止まらない顔を、名前が呼ばれた方向に向けると、そこにはエドガーが立ち尽くしていた。いつも威風堂々とした雰囲気の彼だが、今は困った少年のようになたふたとしている。

そんなギャップに、泣いているのも忘れピーナは思わず小さく笑ってしまった。

じゅうななわめ（後書き）

フィレナが怒るシーンが、今まで一番書きにくかったです。人がキレるのって、書くの難しいですね。

「ハハハハを田端して！」

エドガーは、ピーナに近づいてきた。

「いかがした？ あなたが、いつもの部屋にいなく、泣いて走るあなたを数人みかけた、と聞いた」

「え、えと少し悲しいことがあったので・・・」

「どんなことか」

言えませんっ！ 王女に侍女を辞めると、言われたなんて・・・！

そんなことをエドガーに言つてしまえば、ピーナは本当に自分が侍女として役立たずだということを認めてしまつゝ気がしたのだ。

「それは、そのう・・・」

ピーナが言つのを躊躇つていると、エドガーは長い足で歩いて、ピーナとの距離をすぐに埋めてしまった。

「何があった。どうして、ピーナ殿は泣いているのか。何が、ピーナ殿を苦しめている？」

そう言つて、エドガーは座り込んでいたピーナと同じように、方膝で座り目線を合わせてきた。なんだか、泣いているピーナよりもエドガーのほうがつらそうだった。

「い、言えません！」

自分にだつて、プライドがあるのだ！ 自分がダメ押しされたなんて、この人に言いたくない。

意固地になつて、顔を背ける。

何故か、エドガーにだけには、弱みを見せたくなかつた。

「頬に傷が・・・」

エドガーは、そつとピーナの頬に触れた。  
少し、ピリッと頬が痛かつたが、頬に当てられた手は想像以上に暖かい。

「かすり傷です・・・」

ピーナは、頬に当てられた手をはねることもできず、ぶつきじりまつに答えた。

「・・・フイレナ王女のことか？」

エドガーのポツリと言つた言葉に、ピーナは肩をビクリと動かした。  
もはや、『そうです』と言つたようなものだ。正直な自分が嫌になる

「そりなんだな？」

エドガーもピーナの反応をみて、確信したようだつた。

「神官達に、ピーナ殿がフイレナ王女に呼ばれていた、ということを聞いた。その後、あなたは居なくなつてゐる。フイレナ王女と何かあつたということはすぐに推測できる」

「ちちちち違います！ 何も言われてなんかいません！――

「何か言われたのだな？」

「・・・あ

なんて、間抜けなんだ、私！――そう自責の念が押し寄せると、また目頭が熱くなつた。意図せずに、ふえ、と鳴き声が漏れた。

やつぱり、私は役立たずだ。

「…すまない！泣かせるつもつは…」

「ふええ、うへつ、別に泣いてないですよ！ふう！」

「…・私には泣いてるみたい見える」

「泣いてなんかありません！ふえつ。田の錯覚です、うー」  
強がつて、田をこじめるピート。

「せうか」

「ふえ？」

あつという間だった。いきなり腕を引っ張られたと思つたら、いつの間にかエドガーの腕の中にいた。

ピーナは何が起つてこるのか分からなくなつ。田を口黒とさせた。

え？え？

「何を言われたのかは、もう聞くまい。…・・・だが、これだけは  
言つてく。

ピーナは聖女殿に望まれて侍女となつた。もはや、その働きは誰も

真似ができない。唯一の聖女殿の支えだ。誇りに思え。

ピーナの存在は、かけがえのないものだ。聖女殿にとっても・・・・・  
・・私にとっても

エドガーが話すたびに、吐息が耳に当たってこそばゆい。身体にまわされた逞しい腕が、苦しいくらいにピーナを抱きしめる。顔に押し付けられたエドガーの胸板からは彼のドクンドクンといつ動悸が直に感じられた。

もはや天地がひっくり返つたくらいにペーナは動搖していた。涙が滂沱として流れていたのが、一瞬で引っ込んだ。男の人に抱きしめられるなんて、父親と弟に親愛の情でされるることはあっても、それ以外には全く無かつた。

「誰も泣いていないし、誰も見ていない」と

そう言って、エドガーはピーナの背中をたゞたゞしくさすった。その手は氷のような美貌のエドガーのものとは思えないくらいに、優しい。

そんなことをされているうちに、ピーナは涙腺が緩んでいくのが感じた。泣くまい、と思っていたのにまた涙が溢れてくる。止まつていた嗚咽が再開した。

どうして、この人は私をみつともなくさせるのだろう。  
侍女として、ピーナだつて誇りがあるのでから、強がりたいのに。

侍女として、ピーナだつて誇りがあるのでから、強がりたいの。」

「わ、私は侍女として分不相応でしょつか・・・?」

「そんなことはない」

さつぱりとエドガーは、ピーナを抱きしめながら否定した。

「しかし、貴族の出でもない娘がルナ様のお世話をするのは、他から見ればおかしなことなのでしょう?」

「やう思ひ奴らは、ほおつておけばいい」

「・・・確かに、エドガー様も初めてお会いした時は『侍女のくせに『出すぎ』と嘗つてしましましたよね?』

「・・・・・」

エドガーは無言になつた。ピーナをさすつていた手も一瞬止まる。

(ちやんと、覚えてるんだからね!)

ピーナは意外に根に持つ性格だった。

「あの時は、すまなかつた。私もしつかりと見極めていなかつた。・・・だが、今なら分かる。あなたほど聖女殿の侍女に相応しい者はいない」

エドガーは少し慌てた様子で、弁解した。そんなエドガーをジト目で見つめた後、ピーナはフツと笑つた。

「申し訳ありません。少しハツ当たりです」

「いや、あの時は私が悪かったのだ……」

「いいえ……。私自信が無かつたんです。ルナ様は私に良くしてくださいますが、その好意を受けるほどに私は相応しいのか、って……」

「何を迷う。ピーナは、聖女殿を守る為に軍人の男たちをも恐れずに、果敢に立ち向かつたではないか。」

もひつ、立派な聖女殿の侍女だ」

ピーナは目を閉じた。エドガーの言葉がぽかぽかと体中に染み込んでいく気がする。いつもは怖い、としか感じられないのに、不思議だ。

「ありがとうございます。……私もう一度頑張ってみます。ダメダメな私だけど、精一杯やってみます」

「そりが

そう、女は度胸！と目を開けると、視界いっぱいに、エドガーの麗しい顔があつた。

「ひえっ

エドガーは怖いくらいに整つているが、いつも無表情に近い表情が

緩められている。

切れ長の瞳は、いつもなら鋭さを感じさせるのに、何故か甘い。近くで顔を見ることで、あらためてエドガーの顔が恐ろしいくらいに、整つていいのが分かる。

その笑顔は、見る者すべてを魅了するくらいの威力があった。

(うわっ！殺人的スマイル！！)

ピーナは頬が赤らむのを感じ、思わず顔を伏せた。そして、一人の状況を思い出した。

・・・・私、ずっと抱きしめられている・・・・？

「ひぎやあああああああ、すみませんっ！..」

ピーナは勢いよくエドガーの腕から逃げ出し、頭をさげた。仮にも軍の総司令官になんてことを・・・！

エドガーはピーナが離れてしまったのが不満だったが、とりあえずピーナが元気になつたことで良しと思つことにした。

「いや、謝るな。なかなかいい思いをした」

「へ？」

「あ」

思わずエドガーは、ピーナを抱きしめていた幸福で有頂天になつて

いたので、本音がポロッと出てしまった。

エドガーは、ひとつゴホンと咳払いをした。

「まあ、・・・気にするな」

「はあ」

ピーナは、何だか分からぬが、頷いた。

（あひるひ）あひるひ（後書き）

エドガーのペーナの呼び方が、「ペーナ殿」から「ペーナ」と呼び捨てになつてゐるのは、確信犯です。

頬に傷をこなえたピーナを見て、ルナは顔を大きくしかめた。

「ピーナ、これはどうしたの？」

「え、ええとー、ふびー」

口笛を吹いて誤魔化そうとするピーナ。あまりにもベタである。そんな（少し馬鹿な）ピーナが愛しくいつもは、可愛くでしょうがないのだが、今日は別だ。

ルナは、ピーナに詰め寄った。

「今日、フィレナ王女があなたに面会に来た、と聞いたわ。何を聞かれたの？」

「え、そんな大したこととは、特に

「うそ、目が泳いでいる

正直すぎる、ピーナ。嘘は絶対につけない。

きっと、詐欺師とかにはなれないなあ、ピーナはしみじみと思つた。

「頬にそんな傷なんか作つて、何もないなんて言わせない！白状しなさい！」

そう言って、ルナはピーナに残すことなく今日あつたことは話せた。

エドガーとあつたことは、伏せておいた。なんとなく、恥ずかしかったからだ。

「明日来る、って言つてたのね？」

「はい」

「分かった、こっちとしても策があるわ」

「ルナ様・・・？」

ルナは、「今にみてなさい、ピーナを傷つけたこと後悔させてやるわ～！」といつもの優しいルナではなく邪悪な笑みでニヤリと笑つた。

ピーナはそんなルナを見ないフリをした。

・。

「やーね、御挨拶よ、ご・あ・い・さ・つー、フィレナ様とはちゃんと話したことないし、初めはあたしに会いにきたんでしょ？」

「それは、そうですが」

なんだか、ルナをとりまく空気が、おどりおどりしこ。

(こつものキラキラしたルナ様はビックー!?)

ピーナは、少しだけ怖いルナに恐怖した。

そんな時、神官が来て、フィレナの訪問を告げた。

「いらっしゃりをお通しして」

ルナがそう告げしげらぐしたら、フィレナがやつてきた。

「失礼します」

そう言って、おじとやかにフィレナは、ルナ達がいる部屋へと入ってきました。

部屋に入つたフィレナは、ルナがいるのに驚いた表情を見せたが、すぐに笑顔に変えた。

「はじめまして、聖女のルナスター・アと申します。先日はせつか来ていただきいたのに、お会いできなく申し訳ありませんわ」

話しかけたのは、ルナのほうからだった。

一見笑顔だが、纏つ霧囲気はそつ和やかなものではない。

「とんでもございません。お田にかかりて、光栄ですわ」  
流れるような仕草で、礼をするフィレナ。

流石王女、といふほかないだろう。

ピーナに対して、この前激昂した少女と同一人物だとは思えない。

「ふふ、なんだか、うちのピーナまで話しかけてくださったとか。  
わたくし、お礼を言いたくて（うちの可愛いピーナに何したのよー、  
許さないんだからねー！）」

ルナは、笑みを深めた。

「まあ、お氣になさらなくて良かつたのに（聖女らしく仕事してい  
ればいいのに）」

ルナの皮肉とも言える言葉に、悪びれる様子もなく、フィレナは返  
した。

ピリリリ、トルナとフィレナの間に稻妻が走った（とピーナには見  
えた）

「ローンとコングがなり、女の戦いが始まったのだ。

うふふふふ、と美少女が笑い合つ様子は、なんとも麗しい場面だろう。

しかし、何故かピーナは薄ら寒かった。

「本日はなんでもピーナに用件があるとかで。わたくしも一緒に混ぜていただけない？」

「そんな聖女様にお聞かせするようなお話ではありませんわ」  
フィーレナは、一瞬ピーナを見た。表情は笑顔だが、瞳には憤怒の色が見えた。

その気迫に思わず、ピーナはビクンと肩が動いてしまった。

「そんなことは言わないで。今日は女性同士楽しくお話しましょう？」

ルナは、お茶の用意をしていた丸テーブルをフィーレナに示した。イスは3つある。

「ふふ、今日はフィーレナ様が来る、と聞いてとても楽しみにしていたの。だから是非

「わかりましたわ」

ピーナとだけの会話を諦めたのか、フィーレナはため息をひとつし、席についた。

「うれしいわ

ルナ自身イスに座った。

「ピーナ、あなたも座つて？」

「えー？」

ピーナは戸惑つた。侍女であれば、ルナ達のような身分の高い者と同様イスに座るなんて、ありえない。近くで立つていいべきだろう。いつもルナと二人だつたり、エドガー達が相手であれば、ピーナは一緒にイスに座つていた。彼らがピーナを自分達と同じ目線でいるのを望んだからだ。

だが、今回はそうはいかない。

王女であるフイレナがいるのだ。ついこの間、分不相応と言われたばかりなのに、侍女としての領分を越えては、元も子もない。

「ピーナは侍女である前に、私の親友よ？友達が一人だけ仲間外れになるなんて、ありえないわ」

ルナはフイレナを意識するピーナに元気づけるように笑つた。

「でも・・・」

それでも、ピーナが座るかどうか、迷つていると、フイレナがルナに話しかけた。

「聖女様、あなたがとても慈悲深い方だと思います。ですが、わたくし時と場合があると思いますの。彼女はあくまでも『侍女』。それ以上のものには、成り得ませんわ。しかも、貴族でもない娘を侍女にするなんて、恥ずべきことではありません？」

（ううつ。はつきりとおっしゃいますね、フイレナ様・・・）  
ピーナはトホホ、と少し落ち込んだ。

「何を恥ずべきかは、人によりますわ。それにわたくしとしては、他人の内面を見ず表面的なものばかり見て、見下げる者こそ、人と

して恥ずかしいと思します

ルナはすっと口を細め、ピシャリと言い放った。

「なつ！」

フィレナはまさか自分が恥ずかしい、と言われるとは思わなかつたのか、氣色ばんだ。

「わたくしは、聖女としての沽券に觸れる、と書つたままで！」

「沽券？ そんなものは意味もありません。眞実こそ本当に値打ちがあると思います。ピーナはとても優しく、素晴らしいわ。ピーナがどんな人間か知らないで、ぐたぐた言い立てる人間のほうがおかしい

ルナは、とても堂々としていた。その様は、とても10代の少女とは思えないくらいの貴祿がある。フィレナはそんなルナに押されていた。悔しそうに、ルナを睨みつける。

「・・・何よ。おかしいでしょ？

城下町の出自もろくに分からぬ娘なのよ！汚らわし！」

パシンッ！

フィレナが言い終わらない内に、ルナがフィレナの頬をめいっぱい平手打ちした。

「ルナ様！」

「それ以上言つてみなさい。今度はボ「ボコにあげるわ！」ルナは目を吊り上げ、怒っていた。目がランランとしている。

「・・・何するの！？」

フィレナは叩かれた頬に手を当てて、叫んだ。

「王女であるわたくしを叩くなんて・・・！例え、聖女であつても許さない！」

「王女とか、聖女とか関係ないわ。私個人として、気に入らないだけ」

ルナは、フンだ！とそっぽを向いた。

「ちょ、ちょっと、お二人とも、落ち着いて・・・！」

ピーナは泥沼化している、ルナとフィレナの会話をなんとか治めようとして、オロオロとした。

フィレナ様はともかく、ルナ様がここまで怒るとは・・・。

「そこまでだ」

「そこまでだよ」

収集がつかなくなりかけた頃、制止の声がかかつた。

ピーナ達3人以外にいなはずの人間の声がした方向をみると、エドガーとシオンがいた。

軍人の黒を基調とした服をビシッと着こなし、鋭い眼差しを向けて

くる、エドガー。

明るい金髪に、柔らかい微笑みをたたえる、シオン。

対照的な美貌の持ち主の二人が、ドアの付近で佇んでいた。

କାହାର କାହାର -.

「エドガー様！」

「・・・シオン殿下？」

フィーレナは嬉しそうに、ルナは気まずそうに意中の相手の名前を呼んだ。

フィーレナは、一人の男性のもとに嬉々と駆け出した。

ピーナがルナを見ると、ルナは口を一文字に結んでいる。ルナがこうなつてしまつたのは、しうがいいだろう。何しろ、どんな酷いことを言つたにせよ、好きな人の妹に手を上げ、あまつさえその現場を見られていたかもしれないからだ。

「ルナ様、私のせいです・・・」

どうしよう、こんなことでルナ様がシオン殿下に嫌われでもしたら。ルナ様は、シオン殿下に恋しているのだから、大きなショックになる。

私がきつかけになつたからだ。やつぱり、私は役立たずだ。大事な人を傷つけてしまうなんて。

ピーナが心配そうに自分のことを見つめていると気付いたルナは、微笑んだ。少し硬いが、それでも優しい笑顔だ。

「ピーナ、大丈夫？ 私、ピーナのこと大好きなの。他の人がどう言おうと、大事な親友よ？だから、どんな酷いことを言われても、気にしちゃダメ」

（ああ・・・、ルナ様はこんな時にも、私を気にかけてくれるのね）  
ルナは、先ほどフィレナが言つたピーナへの言葉の方を気にかけて  
いる。

自分がどんな状況にあっても、ピーナのことを最優先にして心配してくれるルナ。ピーナは目頭が熱くなつた。ピーナは話すことが出来ず、コクコクコクと何度も頷いた。

そんな二人とは違つて、フィレナはルナ達が自分にしたことをエドガーラに言い立てていた。

「酷いのですよ、聖女様も侍女も！見てください、先ほどから罵声を浴びせられて、頬まで叩かれましたの・・・。お一人が来なかつたら、どうなつていたことか」

まるで、ルナ達だけが悪いような言い方だ。そんな言い分をするフィレナをルナはジッと見て、何も言い訳をしなかつた。

「でも、わたくし、とても嬉しいです。お兄様だけでなく、その、エドガー様まで助けに来てくださいるなんて・・・」

上目遣いで、エドガーを見るフィレナ。美少女のフィレナがこんなことをすれば、大抵の男は落ちるだろう。もしかしたら、それも計算しているのかもしけれない。

だが、二人の男の反応は、フィレナやルナ、ピーナの想像するものとは、まったく違つた。

「フィレナ、今回は君が悪い」

「え？」

いつも笑顔の表情が多いシオング、眞面目な顔をしている。

「悪いけど、君たちの会話は初めから聞いていた。ピーナ殿のことそんな風にいうのは、いけないよ。君は身分に囚われすぎている。僕たち王族は、国民がいるからこそ、今こうしていられる。いわば、国民に支えられている存在だ。決して、僕らが優れているわけではない。そんなことを忘れて、人を馬鹿にするのは王族として恥ずべきことだ。ピーナ殿にちゃんと謝りなさい」

「な、何でですか!? 頬まで叩かれたのに、何故わたくしが謝らなくてはいけないのでですか! しかも、王族のわたくしが、ただの娘に…」

「フィレナ!」

尚も自分は悪くない、と言い張りうとするフィレナに、シオングは声を荒げた。いつもより、声のトーンが低い。フィレナはびくん、と体を竦ませた。いつも温厚な人が怒ると、怖いと聞くが、正にその通りだ。

茶目っ気な性格のシオングが、厳しい態度で怒る姿は、怒られていないはずのピーナでさえビビッてしまつ。

(こわーーー。つてか、初めから居たのなら、さつさと助けてよ)

ピーナはぶつぶつ心で呟いた。

兄に助けを求めるのは諦めたのか、フィレナは瞳に涙を溜めて、今度はエドガーを見た。

「エドガー様、わたくし、わたくし……みんな酷いですわ……」

。味方はエドガー様だけです」

フィレナは頬に手を当て、弱弱しく呟いた。しかし、何だか、その行為も計算尽くめな気がするのは、何故だろ？。

兄にこいつひどく叱られてもなお、好きな相手に向かっていく根性はすごい。

ピーナは軽く、感心した。

「頬が痛いか？」

エドガーは、フィレナに聞いた。

「はい・・・」

フィレナは弱弱しく答えた。ルナに叩かれても、逆に激昂してきたあの気迫はどうした。

「だが、あなたも同じことをした筈だ。ピーナの頬の傷は、あなたが付けたのだろう？」

エドガーは、淡々とフィレナを追求した。

「そ、そんな」

フィレナは焦つたように、頭を振つた。

「わたくしがそのようなことをするわけが、ありません！」  
フィレナは必死に弁明した。

ピーナは、堂々と嘘をつくフィレナに少し呆れた。ピーナ自身が『フィレナ様にやられました』と言つたら、すぐに嘘はバレるもの。まあ、そんなことは言わなが。

「まあ、どうでもいい。ピーナが頬に傷を作り、泣いていたのは事実なのだから」

エドガーは興味を失ったように、フィレナから目を離した。代わりに、ルナとピーナがいる方向を見てきた。瞳には熱い意志を感じられた。

「すぐに駆けつけなくて、すまない。事実がどのよつたものか我々自身確認したくて、様子を伺っていた。その、大丈夫か……？」  
冷徹で有名なはずのエドガーが、心配そうにこちらを伺ってきた。

「何故、そこまであの者を気にかけるのですか……？」どうして？あなたは誰にも揺り動かされることはなく、孤高の存在であったのに……！」  
最後は叫びに近かった。

フィレナは、キッと顔を上げ、ルナ達を睨みつけた。

「フィレナ……もう、やめなさい」  
そう言って、シオンがフィレナの腕を掴んで、連れて行こうとした。しかし、フィレナはシオンの手を振り払って、尚も叫んだ。

「どうしてですか！ エドガー様！」

エドガーは視線をフィレナに戻した。  
「決まっている。

「彼女を愛しているからだ」

エドガーは、何でもないない、といつもいつにあでやかに笑つて見せた。

フィレナを含め、部屋にいた者達は絶句した。あの、エドガーが笑つてゐる、といつことはもちろんのこと、冷徹漢であり、ロマンチストとは程遠いエドガーが「愛している」なんて言つとは思ひもしなかつたからだ。

「こひまできたなら、誰だつてこの状況がどのようなものか分かるだらう。」

ピーナは田の前で起きている、恋愛小説のよつなワンシーンに感動した。

ピーナは分かつたのだ。どうして、いつもフィレナがエドガーに対しても言ひ募るのか。何故、エドガーが毎日ここへ来たのか。

（エドガー様は、ルナ様を愛していたのですね—————）

噂もバカにはできない。

そして、フィレナはエドガーのことが好きなのだ。だから、恋敵であるルナの侍女であるピーナをまず潰そうとしたのだらう。

（え、どうして…遂に花開く、女のカン…うわ～、冴えてる私…）

ピーナは自分の大発見に、この状況も忘れ歓喜した。

でも、とピーナは思つ。

（ルナ様はシオン殿下のことが好きなのよね。おそらく、シオン殿下も。ってことは、エドガー様は片思いで、そんなエドガー様を好きなフィレナ様も片思いで。

・・・これって、4角関係！？）

「ううううう、三角関係ビリウでない。

そんなことを考えてみると、フィレナが戦慄いてエドガーに詰め寄つた。

「『ジ』が良いのですか、あの娘！わたくしのほうがずっと……」  
自分のほうがエドガーの好きな相手より、優れているといつフィレナの言葉に、ピーナはムツとした。

（フィレナ様、たとえあなたでも、ルナ様の悪口は許しません！）

「すべてだ。どんなところも。弱いところも愛おしい」

そう言って、エドガーは再び、じちらを見てきた。その視線はとても甘い。ルナを見ているはずなのに、隣にいるピーナもビームを感じてしまった。

エドガーの熱い告白に、思わずピーナは手を胸の前で組んだ。  
ほほ、とため息がかる。

恋をしたことなんて無いし、身近にもなかつたピーナだが、エドガーのルナへの思いに胸打たれたからだ。たとえ、その恋が叶わないものとしても、応援したくなる。

（素敵！こんなロマンチックな告白場面、やつぞう持めるものじやないわ）

ピーナが、感動していると、エドガーがじちらに近づいてきた。おそらく、正式にルナに面と向かつて交際を申し込む気だ。

きっと、『君が好きだ。愛している、付き合つて欲しい』とでも言つて。

エドガーはもう田の前まで来ている。

「君が好きだ。愛している、結婚してくれ」

ピーナが想定していた言葉とほぼ同じようなことを、エドガーは言った。ピーナの考えていたものと、違うのは『付き合って欲しい』ではなく、もはや『結婚して欲しい』という一段階飛ばしたプロポーズであり、その相手がルナではなくピーナであることだ。エドガーは、そう言ってピーナの手を掴み、手の甲にそつとキスした。目線はずつとピーナから外さない。

・・・・・え？

ピーナは、気を失いそうになつた。

## 「さあ、今からやる（前書き）」

少し執筆に時間がかかりました。  
内容はいつもより、少し長いので、よろしくお願いします。

手に口付けを落としたエドガーを、ピーナは呆然と見ていた。

(何故?エドガー様はルナ様が・・・)

「え？ え？ ええー！」

ユーチューバーで有名な「あわせたあわせた」

## 返事を聞かせて欲しい

蒸すほぐビーフを見るエドガーは、少し歓が赤らんでいて色っぽい目じりには朱がさしている。

「ああああのうう、エドガー様がルナ様のことが好きなのでは……？」

何を言う。初めから私はピーナー筋だよ

「だつて、ルナ様に会いに毎日来られてたし」

「それは単なる言い分にすぎない。本来の目的は君と話す為だ」

-۱۷۷-

ピーナは冷や汗が大量に流れた。

エドガー様は、その人離れした美貌のゆえに、大変モテる。闘いに行く先々で、多くの女性が彼に夢中になる。敵の国の女性でもだ。

国では、彼のファンクラブがあるくらいだ。

そんな彼と付き合つだけならまだしも、結婚！？  
絶対、殺される！瞬殺だ。

つてか、フィレナ様が先ほどから馬鹿にしていたのは、私だつたのね・・・。

とにかく、丁重に断り、ヒーナは口を開けた。

「無理ですわ。エドガー様ほどの地位にいる方とその子が釣り合つ  
わけありません。周りが反対します」

フィレナは、ピーナが話す前に、異論を唱えた。

「お兄様やエドガー様がどんなにその子を認めて、納得する者は  
少ないでしょう」

「フィレナ・・・」

打ちひしがれていた、と思ひきやフィレナは、嘲笑さえ浮かべてい  
る。そんなフィレナをシオンは複雑そうに見ている。

「お言葉ですが、そんなものは無視させていただくまで。それでも、  
私たちの結婚に反対するのであれば、叩きのめすだけだ」  
エドガーはフィレナを冷たく一瞥する。

（ちょ、ちょっと、待ってください。）

『私たち』！？

いつのまにか、私とエドガー様との結婚が決まっているような言い方じゃないですか！）

ピーナは否定しようと、今度こそ話そうとした。

しかし、またもやピーナは第三者によつて話す機会を失つた。

「ホツホツホ。それは心配せんでいいわい。何しろ、ワシがピーナの後見人になるのでな」

突然、第三者の声がした。部屋に入つてきたのは、高齢の男だ。

白い髪、白い髪から、それなりの年齢だとは推測できるが、機敏な動きで部屋に入る姿は只者ではないだろう。イキイキとした表情は、年齢を感じさせない。

彼の後ろにはヒュージが付き添つっていた。

「「「サルマン元帥！？」」」

ピーナ以外は、驚いたように彼の名を呼んだ。

（・・・サルマン元帥？ええ！？）

ピーナもいきなり部屋に入つてきた高齢の男が、誰か分かると驚愕した。

サルマン元帥。彼は現在の軍部の長の存在であり、エドガーの上に立つ唯一の存在だ。

そういえば、以前ルナが王族と軍部に挨拶しに行つた時、ピーナも一度だけ彼を見たことがある。

年を感じさせない立ち振る舞いは、さすが元帥と言われるだけあるだろう。

「・・・サルマン元帥、『後見人になった』とは、どうこうことです？」

流石のエドガーも、サルマンには頭が上がらないらしい。丁寧な口調ながら、少し戸惑つたように聞いた。

「何、そのまんまの意味じゃよ。ついこの間ワシ、サルマンはピーナの後見人となつた。彼女もそれを了承しておる」

「！」

エドガーだけでなく、ルナ達もその言葉に驚いた。しかし、一番驚いたのは、ピーナだ。

（何ですか？私サルマン様に会つたのなんて、今日が2回目だし。それに後見人になつてもらつた覚えなんてまったくないし）

「そうなの、ピーナ？いつのまに・・・」

ルナはピーナを凝視した。元帥が後見人になるなんて、滅多にないことだ。軍部のトップであるサルマン元帥。彼は、様々な功績を残して、今の地位に上り詰めた。軍人の尊敬を一気に集める人だ。あた、王族や神殿にも広く影響力のある人だ。そんな人が後見人になつてくれるとは。こんな凄いことがあれば、ピーナはルナに教えるだろう。もとより、隠し事が出来ないピーナは、隠し通すことも無理だ。

「初耳です！私、サルマン元帥と話したことなんて、無いし・・・」

「寂しいことを言つのではない、ピーナ。ワシらは以前に会つただ  
るづ？」

悪戯が成功した少年のような瞳をして、サルマンはピーナにウイン  
クした。

何だか、この瞳は見覚えがある。  
ピーナは少し考えた後、叫んだ。

「あーーーあの時のぎつくり腰のお爺さん！」

「正解じゃよ、ピーナ」  
サルマンは、鷹揚に微笑んだ。

「でも、あの時は・・・」

ボロボロの服を着て、ボサボサの髪の毛と鬚。田の前の堂々とした  
人間と同一人物とは思えない。

「思い出しました。でもなんであんな格好を？」

「何、可愛いエドガーに好きな女の子ができた、と聞こじのよ  
な子が見定めよつとな」

「 「 「 可愛い・・・？」 」 」

一瞬背中に寒気が皆に走った。冷徹かつ冷静沈着、いつも無表情な大の男が、可愛い！？

エドガーはムスッとして、眉間に深いしわが寄つてゐる。シオンは、笑うのを堪えていた。・・・が、肩が小刻みに動き、バレバレだ。

「お主は、見知らぬ私に、快く助けの手を差し伸べた。普通、薄汚い爺に、あそこまでする人間はそうそういない。心根の優しい娘だ、ピーナは。流石、エドガーが惚れただけある」

「は、はあ・・・？」

ピーナは褒められ嬉しいといつより、エドガーの名前が出てきて複雑だつた。

逆にエドガーは、先ほどの冷氣を放つような雰囲氣から一転、目を輝かせた。

まるで、分かつていらつしやるーとでも言つよつじ。

「しかし、後見人になつたとは？ピーナ殿は覚えていないようですが？」

シオンはどことなく、わくわくしたようにサルマンに尋ねた。

完全に楽しんできますね、シオン殿下。

しかし、気にしてはいられない。後見人なんて、知らないところでさせていたら、困る。ピーナはシオンに続いて、尋ねた。

「そ、そうです！私後見人になつてもらつた記憶は・・・」

「石をあげたじやろ？？」

「へ？」

「蒼いペンドントにした石じや。あれは、元帥になる者に代々受け継がれるもの、いわば証しのよつた石じや。あれを受け取つたものは、軍部の加護をうけるも同然」

「な、な、な！？」

そんな凄いもの、軽々と渡さないでください！正直いりません！凄すぎて、いりません！身の丈に合つてないものです！

返します――！

そんなピーナの気持ちが分かつたのかサルマンは

「あ、返還は無理じや。受け取つたら、最後、もう後戻りはできん」と笑顔で言つてきた。

なんだつて――！？

ピーナは、あまりの衝撃に、固まつてしまつた。

「・・・それでは、ピーナには、あなた様が後見人となつてくれるのですね？」

ルナは、うれしそうに、サルマンに確認した。

「そつであれば、周りも文句はいえませんね。元帥が後見人になるんですもの！身分が合わない、なんて言えない」

ルナは、未だに固まつていいピーナを見た。このことが彼女にとつて、吉と出るか凶とでるかは分からぬ。だが、ピーナの地位に対する陰口は一気に減るだろ？。

「二人の愛を邪魔する障害物は、なくなるわけだ」  
サルマンは、自慢げに言い放つた。

「・・・そんな」

ポツリと、先ほどから黙つていたフィレナが呟いた。唇はわなわなと震るえ、顔は青白い。彼女はドレスをひるがえして、部屋から走り去つていった。

「フィレナ！」  
シオンが、名前を呼ぶものの、フィレナは止まらなかつた。  
シオンは困つたように、苦笑いした。

「『めんね。フィレナは、根はいい子なんだけど、女の子だから両親に甘く育てられて、わがままなんだ。しかも、彼女の乳母が貴族至上主義者で、その教えがフィレナの中に強くあるんだと思つ。・・・でも、だからと云つて、フィレナがピーナ殿に言つた言葉は許されない。代わりに僕が謝るよ。申し訳なかつた』」  
シオンは、ピーナに頭をさげた。

「そんなん！どうか頭を上げてください！」

一国の王子が、ただの小娘に頭を下げるなんて、前代未聞だ。ピーナは慌てて、否定した。

「！」の後、しつかりとフィレナは叱って、今後は暴走させないよつにさせるから、今回はどつか赦してほしい」「真摯なシオンの言葉が、ピーナの心を打った。（きつとこんなところが、ルナ様は好きなのよね……）ピーナはまゆっくつと頭を振った。

「私、全然気にしてません。初めは悲しかつたけど周りの方が親切にしてくださいましたし……。かえつて、いつも『』えてもらつている皆さんの親切が、どんなに暖かいかを気づくことができました。そういうふた意味では、私感謝しています」

フィレナに辛くあたられて事で、何気なくもらつていたルナたちの優しさのすばらしさを分かることができた。自分が皆の配慮に甘えていたことを再確認し、あらためて感謝する大切さを学べたのだ。ちゃんと、良いこともあるのだ。ピーナはいつのまにか、微笑んでいた。そんなピーナをシオンは、ジッと見つめる。

「ありがとうございます。そう言つてもらえると助けるよ」「シオンはピーナの顔を少しの間見ると、ほっとしたよつて笑つた。もう、いつも笑顔だった。

「さて、僕はフィレナを捜しにいこうかな」「シオンが部屋を出ようとすると、ヒュージがそれを留めた。

「殿ア。御足労かけられませんよ。私が代わりに行きます

「やうへんじやお願いできるかな。妹は意地つぱりだから大変だけど、よろしくね」

「分かりました」

ヒュージは、一礼して去つて行った。

「・・・さてと。んで、二人はどうするの？」  
シオンは、目をキラキラさせて聞いてきた。

（やめてー！話しが逸れていたのに、蒸し返さないで！  
つてか、本当に面白がつてますね）

ピーナは心で絶叫した。

さつきの真撃なシオンはどこに行つた。

「何、これですべてが万々歳じゃ！ホッホ。はやく、二人の子ども  
がみたいのう」

サルマンはウキウキとした表情だ。

「へー？」

サルマン元帥なんてこと言つのですかーまだ、お付き合ひつゝとすり、  
了承してませんよ私！

「身分とか地位に拘らない、二人の姿。感動したよ。僕もいつか絶  
対、高嶺の花を射止めてみせる」

シオンは意味深な熱い視線を、ルナに送つた。  
途端ルナの頬がポツと、赤くなる。

「な！」

ちゅうとおー、何言つているんですかー！不埒な視線を送らないでください、シオン殿下！ルナ様がよこれる！

「ピーナ、私応援するわね！」

ルナは嬉しそうに、言つた。

「うえー！」

ルナ様！違います、誤解です！つてか、何この雰囲気。もはや、私とエドガー様が結婚するの、決まった雰囲気じやないですか！

「一生大変にする、ピーナ……！」

エドガーは、両手でピーナの手を包んだ。ひつとりとピーナを見るので、ピーナは何だか居たたまれない。

「ひつ！」

だから、私返事してない！

ピーナは、予測不可能な事態に、思考が追いつけなくなり、ついには氣絶した。

「いや、ひと段落です。  
つかれたー。」

アサヒのサルマン（前書き）

ルナやサルマン視点です。  
おじいちゃんに願い事を

ピーナはエドガーの熱烈なプロポーズまがいを受け、少しの間身体が固まっていた。

そして、ピーナはふらついたかと思うと、倒れてしまった。

「「ピーナー！？」」

ルナたちが驚いて声をあげるも、すぐにエドガーがピーナを受けとめた。エドガーはピーナの顔を見て、首に手を当てる。しばらぐすると、ほっとしたように息をはいた。

「どうやった、気絶したようだ」

「……氣絶？」

ルナはほつとした。

先ほどは、ピーナの「身分」がサルマン元帥によつて保証された喜びで、舞い上がつてしまつた。ピーナは気にしないように振舞つていたが、フィレナのように時々ピーナの出自を馬鹿にするものがいる。そんなこと阿呆らしいとルナは、思うのだが、大切な友人であるピーナが見下されるのは、我慢できなかつた。

サルマン元帥が後見人となつてくれれば、そんな陰口をたたく者は、いなくなる。そんな嬉しさと、その場の雰囲気に流され、思わずエドガーとピーナの仲を祝福してしまつたが……。

（ピーナはエドガー様に好意をもつてゐるのか、答えていないのよ

ね・・・しまったわ。ピーナにその気がないのに、せつへくよくなことしてしまったかもしれない・・・）

ルナは、猛反省した。だが、そうしてはいられない。とりあえず、この場を収めないといけないのだ。

「そうですか。最近心労が多く、疲れていたのかもしません。ひとまずピーナを寝室まで運んでいただけません、エドガー様？」

「それは、ピーナのか」

エドガーは拳動不信な動きをした。

「・・・そうですが」

エドガーが、慌てた様に聞き返したので、ルナは、いぶかしんだ。

「なんじや、エドガー。好いておる女子の部屋に入れるからって、取り乱すんじやないわ！」

サルマンは、面白そうにエドガーをからかった。

図星だったのか、エドガーは目をそらす。

ルナは冷たい視線をエドガーに送った。だが、あとは任せられる人もいないので、エドガーの行動について何も言わなかつた。

「ピーナの寝室は、ここからつきあたりの部屋です。・・・くれぐれもよろしくお願ひしますね？」

ルナは、とびつきりの笑顔をつくつた。言外には、『ピーナに不埒な真似はするな』と釘をさしている。

エドガーもその意味を汲み取ったのか「ああ」と気まずそうに返事をした。

ピーナを運ぶエドガーを、ピーナの寝室へと案内する。寝室に入ると、エドガーはピーナをベットにそっと降ろした。エドガーは、ベットに横たわったピーナの寝顔から田線を外さず、熱く見続ける。

ピーナといえば、「うう～」とうなされている。寝ているピーナだが、何かを感じ取っているのかもしれない・・・。

「エドガー様、あとは私がしますので、もう戻つて結構ですわ」  
ルナは、このままじやいつまでたつても、エドガーはピーナを見続けていると判断した。現に、ピーナをベットに降ろしたかがんだ体制のまま、エドガーは1ミリと動いていない。ピーナに見とれたまま。

ルナに戻れ、と言われ諦めたようにゆつくりと立ち上がる。だが、未練がましくなおもピーナを見ながら、部屋を出て行つた。そんなエドガーにルナは、苦笑した。

(こつや、ピーナは大変かも)

ルナは、唸つてこるピーナの頬をなで、毛布をそあつとかけた。寝室から出るときは、すこしピーナの表情がやわらんでいた。

ルナがピーナ寝室から出ると、シオンたちがまだ部屋にいた。ちゃんと、フイレナを迎えるべく準備したテーブルを囲んだイスに3人とも座つてゐる。サルマンは用意されたお菓子にまで手をつけてゐる。それぞれの権力者たちが小さいかわらしいデザインのテーブルを囲んでいる姿は、何とも異様であり、近寄りがたい。近づくの

を躊躇つてゐるルナに気付くと、シオンは一コツと微笑んで、手招きした。それだけで、ルナの心は躍つた。もはや、ルナの視線はシオンに釘付けだ。あの二人は、かかし1、かかし2、である。一応、軍のトップの二人だが、恋する乙女には何の意味もない。

シオンに引き寄せられるように近づくと、シオンは近くにあつたイスをとつてきてルナを座らせた。

「ありがとうござります、シオン殿下」

熱くなる頬を自覚しながら、シオンを見る。シオンは瀉ける様な笑顔でルナを見つめる。

「どういたしまして」

シオンとルナは見つめ合つた。もはや、一人だけの世界。ピーナがいたら、歯軋りしていたに違いない。

しかし、ルナは先ほどのことを思い出した。

「あの、先ほどはカツとなつてフイレナ様を叩いてしまい、申し訳ありません」

ルナはシウンとなつた。大好きなピーナを侮辱されたのだから、フイレナを叩いたことは後悔していない。だが、やりすぎたかもしれない・・・。

「いいや、フイレナにはいい薬になつたと思つよ？」  
シオンがルナを気遣うように、眉を下げた。

「でも・・・」

シオンは、なおも詫びようとするルナの手のひらに、自分の手をそつとのせた。

「頬を一回叩かれるだけで済ませてもらつて、かえつてこちらが申し訳ないよ？……それに、友人の為に、あそこまで一生懸命になつて怒る君は素晴らしいと思つたんだ」

「し、シオン殿下……」

ルナは重ねられた手から、じんわりと熱が広がつていくのを感じた。

「おーい、お二人。ワシらもいるのじゃが？」

飄々とサルマンの声が、一人に水を差す。ルナははつとし、今の状況を察すると、恥ずかしさのあまりタコのように赤くなつた。重ねた手を引き抜いてしまう。

（私つたら、サルマン様たちがいるのも忘れて……見られちゃつたわ）

シオンとのやりとりを他人に見られないと考へると、いたたまれなくなつた。ルナは悶えていたので、シオンのチツ、といづ舌打ちに気がつかなかつた。

すぐに、表情をいつもの笑顔にしたが、サルマンたちはシオンが瞬鬼のような顔をしたのを見逃さなかつた。

「……若いの。今舌打ちしたじゃろ」

「何を言つてゐるのですか？そんなことありませんよ。別にルナステリーナ殿との甘い時を無粋に邪魔されたなんて、思つてもないですよー」

「…………」

笑顔だが、シオンがものすごい黒いオーラを出しているのは気のせいではないだろ？

（（絶対、怒っている））

サルマンとエドガーは、シオンの黒い部分を垣間見た。

ルナが意識を取り戻すと、シオンは二コ二コとサルマンを見つめ、サルマンは楽しげに笑っていた。エドガーは、というと我関せず、とお茶を勝手に淹れ飲んでいる。

（？）

ルナは何だか違和感を感じたが、気にしないことにした。

「あの、ピーナのことですが」

「おお、そうじゃった！」

ルナがピーナの名前を出すと、サルマンは嬉しそうに叫んだ。サルマンがいたくピーナを気に入っているのが、伺える。

「あらためて、感謝を。ピーナは私の大切な親友。サルマン元帥が後見人になってくれて、心強いです。ピーナは気にしない、と言つておりますが、心無い人々がピーナの身分についてとやかく言うのには傷ついていると思うのです」

いくら、ルナやエドガーが身分を気にしない、と言つても、批難を受けるのはいつだって弱い立場のピーナだ。ルナたちに文句を言えない分、はけ口をピーナに的を絞るのだ。ピーナをひどい目にあわせたくはない。

「僕からも、お礼を申し上げます」

シオンは眞面目な顔をした。サルマンはまさかシオンから礼を言われるとは思わなかつたのか、変な顔をしてシオンを見た。

「僕はかねがね、今までの貴族至上主義の風潮を変えたいと思つてゐます。位に関係なく、能力があり志が高いものが、重要な位置を占めるべきだ、とも。地位に居座り慢心した貴族が政治に関わつたとしても、国が腐敗するだけです。ピーナはそんな雰囲気を壊してくれる最初のきっかけになれる存在だと思うのです。彼女は、貴族の出ではないけど、聖女の侍女という役に就いた。このことは、きっと他の者にもおおきな励ましとなる。身分が無くとも、志できつと大成できる、つて」

シオンは、眞剣だつた。その姿は、一国の王子に相応しい。シオンをルナは食い入るように、サルマンは興味深そうに見つめている。エドガーは尚もお茶を飲んでいたが、シオンの言葉に耳を傾けていた。

「ホツホツホ。いい目をしとる。お前さんの気持ちはよう分かつたわ」

サルマンは目を嬉しそうに細めた。けして、今の王が暗愚などではない。むしろ、よくやつている方だと思う。しかし、国の体制に巣食う腐心した貴族や権力者に歯止めを効かすのは、手こずつている状態だ。王でさえも手を焼く存在は、王一人では対抗できない。だから、少々の悪事は見逃しているが今の現状だ。以前、聖女が攫われ、一度は狸どもを一掃できたが、すぐにまた同じ様な者が出でくるに違ひない。

だが、と思うのだ。もし、王族・神殿・軍部の力を合わせれば、国の体制を変えることは不可能ではない。目をつぶるしかなかつた、

力に慢心する者らを取り除く勢いが、目の前にいる若いリーダーたちには感じられる。彼らなら、長い間の悪しき習慣を取り除けるかもしれない。

「今日にでも、正式にワシがピーナの後見人となつたことを発表しよつ」

今はサルマンが後見人にならないと、ピーナは排除されてしまうかもしれない。だが、身分のないピーナが聖女の侍女として、正式になれる意味は大きいだろう。

シオンとルナは見つめ合つた後、サルマンに向かつて頭を下げる。

それまで黙つていたエドガーが、口を開いた。

「シオン殿下の熱意痛み入った。私もヒーナを姫縁者として唐けいに認めさせる努力を惜しまない。貴族でないピーナと私が結ばれることで、周りの貴族至上の認識も変えられるだろう」

キリッとエドガーは言い放つた。整った顔には、やる気がみなぎっている。切れ長の瞳は、いつも冷たい印象だが、今は熱い意志が感じられた。

容姿だけに注目するなら、とてもかっこいい。だが、言っている内容は・・・あまりそういうでもない。

」」」・・・・・

（それは、単にお前の希望だろつ・・・・！）

他の3人の心が一つになつた瞬間だつた。

シメは、やつぱり彼しかいない！…とこうじとで（笑）

そして、シオンは腹黒です。ルナが大好きです。

## ひじき いわむね（前書き）

誤字・脱字ありましたら、教えてください。  
今回もよろしくお願いします。

ルナのこと好きだと思っていたエドガーに求婚され、氣絶した日から、一週間がたつた。

ピーナは困っていた。とつて——も、困っていた。何にかといふと、今置かれている状態だ。

なんと、ピーナにサルマン元帥という軍のトップに後見人についてまにかなられており、しかもエドガーがピーナに求婚した、という情報が国全体に流れまくっているからだ。ありえない。本当ありえない。

このせいでピーナのことが、世間に明るみに出てしまった。庶民のピーナが軍の次期トップのエドガーに求婚されるなど、信じがたいことだ。しかし、実際にサルマンがピーナの後見人になつた以上、二人の結婚は秒読みだと、噂されている。

待つて。私の意見はどうした。

ピーナはこのことを考へると、激しい頭痛に見舞われる。國中の女性を敵にしたかもしれない。そう思ふと、頭を壁に打ち叩きたくなる。もし、ノイローゼに10段階をつけるとしたら、間違いなく今のピーナの状態は10だろう。

氣を失い、起きたらもう次の日だつた。

「あることは、きっと夢ね」と現実逃避しようとしたピーナだつたが、大量に送られてくるエドガーのファンからの脅迫状を見て、叶わぬことなのだと悟つた。

幸運なことに一週間まったく、エドガーの音沙汰が無い。いや、高級なお菓子や花がエドガー名義で贈られてくるが、これは無視だ。まあ、お菓子は食べているが。

しかし、何故か、エドガーとピーナの情報が周りに流れるのが、早すぎる気がする。噂つて、もつとゆっくり浸透していくもののはずだが・・・。エドガーが来ない代わりに、何だか暗躍されている気がしてならない。考え出すと、大きな策略が感じられ、寒気がする。

「人の噂も7・5日つていうし、きつといつかは無くなるわよね！？」自分に言い聞かせるように、ピーナは呟く。そうしていないと、精神が不安定になってしまふのだ。

（何か手を打たないと・・・。でも、どうやつて？はつきり、もう一度エドガー様に結婚をお断りして・・・）

ルナは務めで居ない今、ピーナは部屋でうわうわと動き回っていた。

「エドガーだ。失礼する」

前もつて来るという知らせもなく、部屋に入ってきたのは、一番会いたくない人物だった。サラサラの銀色の髪をなびかせ、部屋に入つてくる。

「え、エドガー様・・・」

まだ、心の準備が出来ていないピーナは、冷や汗を流す。エドガーを直視できない。

「一週間ぶりだな、ピーナ。元気か？」

「へ？ ははは！」

「ずっと、会いたかった……」

声色に熱を感じ、思わず顔を上げると、精悍な顔をつりとさせ、目の縁が赤くなっているエドガーがいた。強烈な色香を放っている。

「ひえっ！」

駄目だ。私には刺激が多すぎる。この人をお付き合にするなんて、不可能に近い。すぐにでも、求婚を断ろい！

命の危険を感じたピーナは、勇気の欠片を集めて、あらためて求婚の返事をすることにした。

「あ、あの～、エドガー様？」

「なんだ？」

問う聲音は、甘い。そして、ピーナを見つめる瞳も。

（頑張るのよ、私！ ちゃんと断れば、全て解決なんだから…）

ピーナはキッとエドガーを見る。

「あの、結婚についてなのですが、私お断りしますー。」

言えた！ 言えたよ、私…！ そりゃ、たった一言ですむ問題だったのよ…

ピーナは、断りの一言を言えた事で、すっかり安心し、もはやエドガーとの求婚の問題もこれで解決された、とつかの間喜んだ。

「・・・何故だ？」

「え、何故って、私とエドガー様とじや身の丈にあってないし、私ずっとルナ様をお守りすると決めているので、結婚はしないつもりです」

ピーナは、ほつとしたままだつたので、エドガーの声が低くなつたことに気がつかない。

ガシツ

「ふわっ！－」

いきなり、ピーナはエドガーに両肩をつかまれた。エドガーはさつきとはなつて変わり、目が真剣だ。というか、瞳孔が開いている！？

「身の丈というものは、最初から気にしてはいない。サルマン元帥がピーナの後見人になつたのだから、もはや問題ないのでは？」

「そ、そりですけど・・・」

「聖女殿をお守りする、といふことだが。ピーナと私が結婚すれば、

もし聖女殿に万が一の事があつても私が守る」とがでれる。しいては、聖女殿のためになるとは思わないか?」

「そ、そらがもしれませんが……」  
あまりのエドガーの気迫にピーナは押される。言われるままに頷きそうになるのを、必死に堪える。

「では」

エドガーは、肩に置いた手をピーナの頬にもつていき、ひと撫でした。そのなで方は、どこか艶かしい。  
吐息が、ピーナの頬に当たる。

「問題はない」

エドガーは、口元を弧に描いて、妖しく笑つた。

「ありまぐりです――――――!？」

ピーナは、思わず涙声になつた。

「私結婚する気ないので!そ、それにお気持ちは嬉しいのですが、エドガー様がお相手の方として考えることは、・・・・その出来ません」

最後は小さい声になつた。

「きつと、エドガー様にはもつといい方がいらっしゃいます」

「無理だ」

エドガーがきつぱりと否定した。

「え?」

「ピーナしか考えられない」

「・・・ひ」

「とか、もはやピーナとの結婚しか認めん」

「ふへっ」

エドガーはピーナの手を握った。もはや、拒否を許さない」というふうに。

なんだ、これは。何だか、堂々と居直られたんだけど。これじゃ、居直り求婚だ。

「あのう、拒否権は・・・」

恐る恐る、ピーナはエドガーに聞いた。

「無い!」

取り付く島も無かった。

## ハジタツルハシメ（後書き）

一人の誤解は解けましたが、今度はエドガーがぐいぐいと迫ります。次は番外編です。前編・後編になる予定です。よろしくお願ひします。

王女と大佐 前編（前書き）

初めての番外編です。

登場人物は、フィレナ王女と、エドガーの部下ヒュージとなります。

女は皆かわいいと思う。

特に、誰かに恋をしている表情が一番好きだ。

今まで、一つのことに真剣になつたことは、自分はない。だからなのだろうか。

一途に相手を想う姿は、何にも執着してこなかつた自分とは違い羨望を感じるほどだ。

伯爵の次男として生まれた俺は、気楽な生活をすることができた。それなりに地位ある息子として生まれ、なに不自由なく育てられた。また、伯爵という責任ある位は兄が受継ぐことが、決まっており、自由きままに育てられた。逆に、ほっとかれすぎなくらいだつた。だからか、気付けば周りからよく「気ままな奴」とか「つかめない」と言われるようになつていた。

15歳になり、特にやりたいことも無かつた俺は、親に反対されたが軍部に入った。軍人はだいたい平民がなり、貴族は入らない。だが、自分でいうのも何だが、剣にはそれなりに自信があつたし、頭を使って戦いに勝つことも得意だつた。だから、すぐに上への地位へとのぼつていつた。しかし、すぐに俺の前に越えられない壁があらわれた。

エドガー・ヘルツォーク、後に総司令官にまでなった男だ。俺と同様、公爵の次男として生まれた彼は、この国の初代王シュベルの再来とまで謳われ、その誰も敵うことの出来ない剣の腕もさながら、どんな戦局でも冷静さを失わない鋭い戦略の知恵をあますことなく用いた。そんな男に、俺を含めた軍人は尊敬を抱き追従している。今は、彼の右腕として大佐という地位までに登りつめた俺だが、どことなく冷めた性格であることは否めない。元もとの性格が何かにのめりこむことはなかつたし、すべてのことにつけてそつなくこなしてこれた。だからだろうか。常に面白いものを探すようになつていた。人を探り、またはからかつては、何か夢中になれるものを探つていた。

そして最近、面白いことが起きた。我らが上司エドガー様が、聖女の侍女に恋をしたのだ。これには驚いた。あの怜俐・冷血な上司が、ただの小娘に骨抜きにされるとは。相手の少女が、上司の迫力に真っ向と対峙したことは、凄いと思う。だが、それ以上に、エドガー様の惚れっぷりに驚いた。恋は盲目というが、あそこまでとは。

もはや、この恋（一方的な）を応援するしかあるまい！と俺や他の軍の奴らで、策を練つた。とりあえず、相手の少女にエドガー様のことを知つて、好きになつてもらう為、交代でエドガー様の素晴らしさを語ることにした。他の奴らは純粹に上司を思つての行動だろうが、俺にとつては面白半分のものだつた。

だが、この作戦はなかなか上手くいかなかつた。肝心の相手の少女がまったく、上司になびく気配が無いからだ。これは誤算だつた。行く所で、女にモテまくつっていたエドガー様だから、すぐに彼の姿・地位に参つて陥落する自信があつたのだが。意外に恋の成就とは難しいものかもしれない。俺は考えを改めた。

そんな中、この国の王女フィレナが、相手の少女に対し脅しをかけてきている、という情報が入つた。フィレナ王女は、エドガー様

に惚れている。だから、エドガー様が恋している少女に圧力をかけたのだろう。これに対しても、エドガー様は行動した。その行動の早さは、戦地でのものと変わらない。今まで関わらなかつた王子に連絡し、王女のやることの証拠を取り、同じことをさせないようにじょうとした。

エドガー様とピーナちゃんの仲を壊そうとしたフィレナ王女だが、サルマン元帥の後継人という後押し、そしてエドガー様の意中の相手への思いの強さを目の当たりにしたことでの衝撃は、さぞや大きいだろう。走り去る彼女の後姿を見ながら、考えた。

「殿下。御足労かけられませんよ。私が代わりに行きます

気付けば、シオン殿下の代わりに彼女を探す、と言つてしまつた。言つてしまつた以上神殿の回廊を歩き、彼女がどこに行つたか人を見つけ次第、聞くことにする。

彼女を追いながら、フィレナ王女と初めてあつた時を思い出していた。

彼女と初めて会つたのは、5年前だ。魔物が群れをなしてこの国を襲つてきた時だ。その時既にエドガー様の部下だつた俺は、常にエドガー様の後ろに従つていた。この国の大好きな試練の時でさえ、エドガー様はとても頼りがいのある上司だつた。非常事態でも、冷静に軍が動けたのもこの上司の功績が大きい。

そんな中、魔物に怯える貴族たちの中で、ひとつの場合が出されていた。それは、『嘆きの乙女』というものだ。150年前、やはり魔物が大量に押し寄せてきた時、この国を憂う王女が、人身御供として己自身を献げたところ魔物たちがその王女の愛国心に感動し国から引いていった、という言い伝えによるものだ。王女が自ら自身を献げたかどうか怪しいものだし、その言い伝え自体が信頼性にかけると思うのだが、切羽詰った貴族たちはこれにすがつた。すなわち、この国の唯一の王女フィレナに、人身御供をするように申し出たのである。普通、主の娘を献げよ、などと言えるものではない。だが、非常事態であり王族としての使命だ、ともつとももらしいことを言って、王に了承させようとした。

王も一人の親である。この意見には大変しぶつた。だが、この國の為である、と言われば王としての責務上果たさざるを得ない。しぶしぶながら、王女を監禁し、いざというときに備えさせた。

だが、戦局は上のものたちが想像したこととは反対に進んだ。エドガー様の活躍によってだ。魔物を絶滅寸前にまで追いやる、という偉大な功績を残したのだ。

闘いに勝利した後、エドガー様がしたことは、監禁されていたフィレナ王女を解放することだった。塔に監禁されていたフィレナ王女は、まだその時13歳。エドガー様が部屋に入ってきたときは、目が赤くなっていた。いつ自分が殺されるか戦慄恐怖として泣いて過ごしていたのだろう。

そんなフィレナ王女にエドガー様は、淡々と事実を述べた。

「我々が勝利した。あなたが人身御供になる必要はない。もう、あなたは自由だ」

もう少し労わりを込めた言い方はないものだろうか、と後に控えた部下の俺たちは案じたが、これが上司の性格なのだから、しようがない。

王女は、言われたことを咀嚼したのか、だんだんと表情が明るくなつた。

「あ、あの私死ななくとも、よろしいのですか？」

「ああ。魔物は追いやつた」

「つ！」

青い瞳から、涙が出てきた。この塔に監禁されて、何度も泣いたのだろう。だが、今のは喜びの涙だと分かる。考えてみれば、13歳の少女に、御供という重荷を押し付けること自体が、酷な話だ。彼女は、王族の出生というだけで、この役目を与えられた。

「ありがとうござります・・・！」

フィレナ王女は見上げてエドガー様に礼を言った。瞳には、感謝の意が込められている。だが、その中に、また別の感情があるのを俺は見抜いた。

「安らかに過ごされよ」

エドガー様にとつては何気ない一言だったのだろう。だが、その一言で、彼女の纏う雰囲気が変わった。頬が赤くなり、瞳を潤ませながら、フィレナ王女はひたむきにエドガー様を見つめる。その瞳に、俺はぞくっと体がふるえた。この時からだろうか。恋する瞳が美しいと思つたのは。

人から聞いた情報を合わせて、彼女が神殿の中庭にいることを特定

した。中庭に行くと、彼女が頬りなさげに、ぽんやりと歩いているのを見つけた。

「フォレナ王女、見つけましたよ」  
フィレナ王女は、ギクリと肩を動かした。気まずそうに振り向く。  
俺を見ると、残念そうな顔をした。・・・そつか、エドガー様だと  
期待したのか。

俺は皮肉げな笑みを作った。

「王女、城までお連れしますよ」

「・・・はい」

フィレナ王女は俺を伺ひよひ見て。瞳には少しの怯えがある。

「エドガー様だと思いましたか？」

「・・・」

いきなりの俺の質問に、彼女は顔を強張らす。それで、是だと分か  
る。

「残念でしたねー。エドガー様は、今頃ピーナちゃんと思いを通わ  
せているんじゃないですかー」

あくまで、穏やかに俺は話す。俺の顔の見てくれば、笑顔だ。  
だが、言葉に含まれる毒に彼女は気付いたのだろう。俺をキッと睨  
んできた。

「何で、そんなこと・・・」

構わず、俺は話を進めた。

「ある意味、あなたのおかげですよね。あなたが、ピーナちゃんに

ちよつかいをかけたから、エドガー様も自分の想いをはつきり伝えるのに躊躇しなかった

「・・・・・」

あえて、彼女が傷つく言葉を選ぶ。もう、エドガー様と相手の少女の間に入る隙間はないのだと、思い知らせたかった。叶わない恋は早く終わらせた方が良い。

俺の言葉を、王女はピンク色の唇に歯をたて、食いしばって聞いている。表情は苦しそうだ。

「誰も、あの一人の仲を裂くことは出来ない。十分に分かつたでしょう」

「黙りなさいっ！」

堪らず叫ぶ彼女を、俺は冷ややかに見た。何故、そこまで気持ちを高ぶらせるのか。そんなにエドガー様に執着していたのか。俺には解せない。本心は心の奥に隠して、他人には見せないものだ。そうでなければ、弱みを握られる。

どんなに好きな奴がいても、恋を成就する為に周りを排除していく程の気持ちなど、理解できない。感情に囚われるなど。

「そこまで、必死になつてエドガー様を自分のものにしたかったのですか？」

「もう、言わないでっ」

「あなたのしたことは、ただ人を傷つけただけ」

「いやっ」

「そんなことをする人をエドガー様は、愛することは無いと思いますよ」

「…………お願い…………やめて…………」  
だんだんと、王女の声が泣き声になっていく。  
しまいには、泣き出した彼女を俺は見つめ続けた。

「では、城に戻りましょう」

「…………」

フィレナ王女は返事をしなかった。ただ、ポロポロと涙を流していた。しばらく動かない様子だ。しうがなく、手をつかみ彼女を引っ張つて歩いた。最初、抵抗したように腕に力を入れた彼女だったが、それでも引っ張ると諦めたように自ら歩き出す。俺は手を離さなかつた。俺たちは、彼女の侍女たちに彼女を渡すまで、ずっと無言だつた。

サルマン元帥がピーナちゃんの後見人となり、同時にエドガー様の想い人が彼女だと知れ渡ると、その後の処理が大変だつた。俺たちエドガー様の部下はその処理に追われた。

時々、「あれ、俺軍人だよな？ 何でこんな仕事してんだっけ！？」  
と考えるときもしばしばだ。

噂で、といつても裏の情報網によりだが、あの後フォレナ王女が、こつてり両親に絞られたらしい、ということが分かつた。まあ、フイレナ王女がわがままになつたのも、5年前彼女を人身御供させる

ことを拒否できなかつた申し訳なさから、周りが甘やかしたのにも原因がある。

今なお、部屋から出るのを禁止されているのは、周りに対してもめしだとこ'うことだらけ。

（王女つてのも、大変だよねー）

周りに振り回されてばっかだ。

ふと、彼女の顔を思い出す。気が強いくせに、すぐ泣く女。恋という感情に囚われた、女。兄のそれより少し色素の薄い青の瞳は、常に一人の男を追っていた。5年前から。俺はそのことを知っている。何故なら、ずっとエドガー様の近くにいて、その様子を見ていたから。

彼女が恋に落ちる瞬間からずっと。

連日、投稿します。

次は後編です。

誤字・脱字があれば、教えてください。

今日も変わらず、俺は軍の職務とはほど遠い仕事をしていた。外では窓の淵にとまつて鳥が相手の鳥に必死に求婚していた。

（つたく、あつちこつちで恋しまくつて）

心は忙しすぎる職務に、荒れすさんでいる。天気は皮肉なくらいに、快晴だ。心地良い風が窓から吹いてくるが、まったく気分は良くな

い。

「おーい、ヒュージ。ピーナちゃんの実家にはつている護衛の報告書、持つて來たぞー」

のんきに、俺の部屋に入ってきたのは、同期のマルコだ。薄い茶色の髪と瞳の彼は、どこにでもいるような顔をしているが、そんな高くない鼻にあるソバカスで愛嬌がどことなく感じられる奴だ。実際、相手の懐にすぐ入つていける性格だ。

「ありがとー」

「何だい、ヒュージ。お疲れな顔だなー！」

わははは、とマルコは能天気な笑い声を上げる。お気楽な奴め。だが、今はその性格が羨ましい。いろんなことがあって、疲れてしまつた。

「当たり前でしょー？エドガー様がピーナちゃんと婚約をほのめかしたお蔭で、いろんなところの暴走を止めなきゃいけないんだからー」

やはり、庶民のピーナちゃんにサルマン元帥が後見人となり、エド

ガーメンが求婚した、となれば周りがほっておかないと。彼女を排除しようとする動き、逆に利用しようとするとする者も出て、その対応に軍部は追われている。シオン殿下が何かと協力してくれているが、予想していたよりも大きな反響を呼んでいる。

ピーナちゃんの実家に対しても、何があるかも分からないので、交代制で見張りをつけている。もちろん、指示したのはエドガーメン。そういうことは、抜かり無い。ピーナちゃんを前にすると、全然ダメだけど。

「そういうえばさ、フィレナ王女の謹慎解けたんだってさー」

マルコは、書類を並べている。洩れている書類が無いか、確認しているのだろう。

「・・・へー」

何でもないといつも、返事をした。

「といつても、城から出れないから、庭とかで時間潰してるんだってー」

書類を揃え、トントンとバラつきを無くす。それを満足げに見るマルコ。視線は書類から離さず、俺を見ない。

「何だ、マルコ。お前詳しいな」

「俺、城のメイドと何人か仲良い子いるから。教えてもらつた」  
「へへん」と胸を張つてと笑うマルコ。そういえば、何気なく人から情報を引き出すのも、こいつは得意だ。だから、何かと情報を得ようとするときは、皆ここに頼む。

「ふーん」

何気ないよつに装つ俺だが、頭の中は彼女の泣いた顔が浮かんでは

消えていた。最後に話をした日の彼女の顔だ。

「あー、俺少し外に野暮用があつたわ！書類は適当に置いておいてー」  
自然に言葉が口から出ていた。ヒラヒラと手を振り、俺は部屋から出た。マルコを見ず、前を見据えて。だから、マルコが俺をどう見ていたか気付かなかつた。

野暮用だ、と門兵に言えばすぐに城に入れてもうつた。俺は大佐だから、顔パスだ。何となく、足が早歩きになる。向かつた先は、庭園だ。

キヨロキヨロと庭園を歩いていると、すぐに探していた相手がみつかる。供の者も付けず、ほんやりと咲き誇るバラを見ている。俺は、自然と口角が上がるのに気付いた。はやる気持ちを何とか抑え、彼女に話しかける。

「綺麗なバラですねー、フイレナ王女」

ギクリと彼女は俺を見た。怯えが瞳には混じっている。いつからだろうか、彼女がこうして俺を見るようになったのは。エドガー様を熱く見つめる彼女を、俺が悪戯にからかつた時からだろうか。

「ヒュージ大佐・・・。どうしてここへ？」

「いやね、城の庭園が見たくなつてねー」  
俺はへらへらと笑つた。

「やつ。それでは、わたくしはこれで・・・」

「失恋の傷は癒えましたかー？」

「つー」

そそくかと立ち去ろうとする彼女を、呼び止めた。思わず足を止める彼女の反応で、まだ立ち直ってないことが分かる。まあ、そうだろうな。何しろ5年越しの恋だし、

「エドガー様は精力的に動き、ピーナちゃんと結婚してしまいますよ?」

まあ、ピーナちゃんの想いは、そうでないかも知れないが。

「・・・何が、言いたいの?」

「いやねー?あそこまで、自分の恋の為に、いろいろと為さつたあなたはどうなのかなー、つて」

「しつこいわねー!わたくしがしたことは散々、お父さまたちから叱られ、お咎めも受けましたっ!」

「へー」

飄々とした俺の態度に、彼女はイラついたようだ。頬を赤く染めて、目じりを上げて怒った表情をした。俺はお?と少し驚いた。ずっと、何かと嫌味を言つてきた俺に対して、彼女が初めて怒りを示してきたのだ。

「ずっと思つてきましたけど、今日しさは言わせてもいいわつ!あなた、何なのですの!/?会うたびに、ちくちくと皮肉ばかり言つて、エドガー様に話しかけよつとする度に、邪魔ばっかりしてつ!いい

加減にしてください……」

はあはあ、と息を荒げる彼女は、猫が威嚇する姿に似ている。どんなすました表情よりも、彼女の魅力が滲んでいる。これが、彼女の本心なのだろう。そうだ、この少女は、静かに誰かを想っているよう、少しづがままであるが、怒つても自分をさらけ出すほうが彼女に似合っている。

「それは、すみませんねえ」

彼女のありのままの気質を見れて、俺は思わずニヤニヤと笑つてしまふのを止められなかつた。初めて、怖がることなく彼女は己を自分にさらけ出してくれたのだ。エドガー様にさえ、見せなかつた姿だ。そんな俺を、彼女は睨んでいる。

「あなたは、私を睨むか人の悪い笑みを浮かべるだけだつたわ！どうせ、馬鹿な女だと思っていたのでしょうか！？」叶わない思いをもつてている、と……」

彼女は、唇をかみ締めた。唇から血が出そうにならないか、と場違いな心配をする。手が勝手に彼女に伸ばされたが、彼女はそれに気付かず、話し続けた。

「王女だから、ある程度の贅沢や好き勝手は出来たわ。でもそれは王族としての責務があるから。……だから、5年前だつてお父さまにそう言われて、嫌だつたけど人身御供になる決意だつてしたわ。なのに、なのに……」

つうつと頬に涙が伝う。美しい青の瞳から出る涙は、水晶のようだ。

「わたくし、あの子が嫌い！何の責務を負わず能天気に過ごしてき

たのに、私が欲しいものを奪ってしまう！エドガー様も・・・。憎かつたわ！あの子を見て、私とは逆に何にもせずのうつと平和に暮らしてきたことが、分かった。なのに、エドガー様の心を捉えた！だから・

「でも、それはただのハツ当たりでしょー？ピーナちゃんがではなく、エドガー様が彼女に惚れたんだから。ピーナちゃんは全然悪くない」

「分かってます！そんなこと・・・でも、止められなかつた」

「本当に好きだつたものねー？エドガー様のこと」

彼女は顔を歪めた。俺の前で必死に声を出して泣くのを、堪えようとしているのだろう。

彼女のした行動は讃められたものではない。だが、彼女の一途な瞳は好ましかつた。俺には無いものだから。

「軍部の者と王族の者が婚姻したら、国の結束力も高まりますし、一石二鳥ですよね。そんな言い訳をしながら、エドガー様への恋心を正当化しようとしたり？・・・。まさか、そんなことも考えました？」

「もう、黙つてくだせー！」

彼女は、顔を赤くする

どつやうら、図星だつたよつだ。

「ふーん？」

俺の意地悪な視線に耐え切れなく、彼女は下を向く。そりり、と金色の髪が揺れ、綺麗な光のようだ。

「でも、それなら出来ますよ?」

「・・・何がですか」

しぶしぶ聞いてきた彼女に、俺は笑顔で答えた。

「軍部の者と婚姻すれば、いいんでしょう? だったら、俺と結婚すればいい! 俺、結構高い地位にいるし」

「はあ――――――?」

思わず顔を上げ、すっとんきょうつな声を出す彼女を、見つめる。あ、間抜け面もかわいい。

「俺と『恋』しましょ? 王女様」

かがんで、彼女の顔と自分の顔を近づける。

「な、何[冗談]を言つてるの? ... 言つてこい」と悪いことがありますつ!」

顔を赤くしたり、青くしたりとなかなかに彼女は忙しい。それを見ていて、楽しんでいる自分がいる。

「冗談じゃありませんよ、酷いなー。本気ですよ? 何しろ、あなたと同様5年越しの想いですからね!」

そう、彼女の恋する瞳に、俺は落ちた。その一途さに。初めは、憧れかとも思ったが、違った。彼女のその愚かな行動さえ、愛しい。彼女がエドガー様ばかり見つめるのが、ずっと気に食わなかつた。だから、彼女に皮肉を言つよつになつた。少々やりすぎた感はあるが。

その瞳で、今度は俺を一途に見てほしい。ぶれることなく、ひたす

ら。前の好きな男は君を好きにならなかつたけど、俺は裏切らない。だつて、俺は見つけたのだから。絶対に手放したくない、必死になれるものを。あの日君の瞳を見てから。

「だ、断固拒否ですわーー！」

庭園で、王女の悲鳴が響いた。

総司令官と聖女の侍女との仲が騒がれている中、もう一組のカップルの攻防戦が、したたかに始まっていたのを、人々は知らない。

マルコは、ヒュージが早足で部屋から出て行くのを見て、ため息をついた。同期であり友人の彼は、意地つ張りだ。プライドが高いのだ。好きな女性に対しても素直に自分の気持ちを伝えないで、別の男に恋する意中の相手に意地悪ばっかりしている。餓鬼か、まったく。

「きっと、ありやヒュージも初恋だぜ」

何せ、好きな相手に、構いすぎて嫌われているのだから。いや、怯えられているのか？

どっちにしろ、エドガー様を熱くみつめるフィレナ王女を、イライラと見つめ、皮肉ばっかり言い怒りをぶつけていたる辺り、ダメダメだ。余裕が無いのだわ。

結局、どんな優秀で頭が切れたり、女の扱いにたけていても、惚れたら、どんな男も同じだ。相手の女性に振り回されるのは。

ふと、ヒュージの机の引き出しが少し開いているのに気が付く。隙間から、本が入っているのが、分かつた。何気なく、引き出しが開け、本を取り出すと、本には

『相手を惚れさせる方法～これであなたも意中の相手と向思いつ』

といつ題名がある。

(ヒュージ・・・)

あいつ、涼しげな顔して、こんな本に頼るほど余裕無かつたのか・・・。

本には、付箋が付けられていることりがあり、ページを開くと、

『惚れさせる極意その2・失恋したところを狙つべしつ』

とあった。丁寧に、マーカーで色までつけられていて、彼の意気込みが伺える。

(ヒュージーーーーーー)

お、お前って奴は・・・。

マルコは、ほろりと涙を流した。彼女との恋を成就するため、ヒュージの涙ぐましい努力が感じられる。プライドの故に、周りには相談しなかつたのだろう。

プライドが高い二人が、これからどうなるか、見守つてこいつ。マルコは静かに決意した。

## 王女と大佐 後編（後書き）

どんな人にも良い面・悪い面があるように、登場人物にも様々な面を持つています。誤ったことをしたフィレナですが、そんな彼女もいろいろな考え方・経験・性格があることを知つてもらえれば、と思います。

皆さんの感想をいただき、この番外編を執筆する意欲が出ました。ありがとうございます！

引かれがちなエドガーも少しカッコ良かつたでしょつか！？

この日に行なわれる、一年に一回の祭りだ。この祭りの日には、旅芸人や見世物がたくさん来て、出店も多く並び、観光客も大勢やってきて、活気付く日となる。國の人間にとっても、大切な娯楽の時ともなり、毎年皆が楽しみにしているのだ。だが、この日は、若者たちにとっても重要な日となる。『花渡し』というのは、男性が意中の女性にプロポーズしたい時、一本の花を贈り、相手に受け取つてもらえば求婚が成立する、という伝統行事でもあるのだ。

城下では、前日からお祭りで賑わいを見せており、当日の今日は最高潮と達しているだらう。だが、これは聖女のルナには、あまり縁が無い行事だ。聖女というものが、軽々しく城下を歩き回つていいはずないからだ。そんなことをすれば、ありがたい存在である聖女に人が群がり、混乱状態になるだらう。だから、ルナがお祭りを見れたとしても、城の高いところから、見おろす程度になる。ピーナも、そんなルナを一人にさせるつもりはなく、今日も変わらずルナと一緒にいるはずだつた。なのだが。

「わ、私が、お祭りにですか！？」

ピーナはすっとんきょうな声を上げた。ルナに言われたことがまだ、ちゃんと理解できない。

「ええ、私、お祭りに行けないでしょ？だから、代わりにピーナに

お祭りに行って、その様子を教えてほしいの」  
ルナは、おつとりと微笑む。翡翠色の瞳には、優しさをたたえている。

「で、でも・・・」

ピーナは分かつていた。こんなことを言つているが、ルナは単にピーナにお祭りに行って楽しんできて欲しい、だけなのだと。彼女はどことなく、ピーナが侍女という役柄に拘束されていないか憂いでいるふしがある。だから、何かとピーナのことを気にして、こうやっては気分転換をさせようとしてくるのだ。

その気持ちはとても、嬉しいのだが、同時に申し訳ない思いでいっぱいになる。初めは強制的だったが、ピーナは決意して侍女の役目を果たしているのだから、ルナは責任を感じなくていいのに。

「ね？ お願い！」

顔の前で手をパンと合わせ、ルナはピーナにおねだりする様に言つてくる。

（か、かわいいです、可憐ですっ！）

一瞬、ルナに見とれてしまつたピーナだが、慌てて意識を戻す。

「私毎年お祭りに行ってましたし、今年は出なくていいです。お祭りの様子なら、去年のものであれば、覚えてますし・・・」  
ルナを一人にさせてはならない。彼女だって、お祭りに行きたいに決まっているのだ。だけど、こうして我慢してピーナだけでも行かせようとしてくる。そんなルナだからこそ、ほうつておけない。ピーナは誘いを断つとした。

「毎年お祭りの様子なんて、違つでしょ？それに、お土産も買ってきてくれれば、それでいいのよ！」

頬をふくらますルナ。ルナも負けじと、ピーナをお祭りに行かせようとしてくる。

「でも、ルナ様をお一人になんて」

「一人じゃないよ？」

優しげな声色が、ピーナの言葉を止める。第三者に驚くと、シオンが部屋に入ってきた。今日はお祭りのせいか、いつもより装飾品などもたくさん付けて、煌びやかさが倍増だ。

「ルナスタリーナ殿には、僕と一緒に城からお祭りの様子が見えるバルコニーでのお茶を招待したいな？だから、ピーナは思いつきり、お祭りを楽しんでくればいいよ」

「…ピーナは分かっていた。こんなことを言つてゐるが、シオンの本心は違うことを。訳すと、『ルナと一人でデートしたいから、ピーナはお祭りにでも行つてなさい』だ。にこやかに言つてゐるが、絶対にそうだ。ピーナのルナへの愛ゆえ、センサーが発動していた。この男、危険、と。

「シオン殿下！ いいのですか？」

ルナは嬉しそうにシオンに聞く。逆にピーナの心が荒んでくる。これは邪魔しなければ…。

「わ、私もそのバルコニーに行きたいです！」

てへつと何気なく、一人のお茶会を阻止しようとすると、笑顔が少し強張った気がする。だが、ここで引けば、ルナが危ないかもしれない。自然を装うピーナをシオンは見ると、クスッと笑つた。

「王族の僕や聖女のルナスターーナ殿は、なかなかお祭りには立場から参加できない。せいぜい城から人々に手を振つたりするだけだしね？でも、ピーナは制約がないんだ。せっかくだから行つてきなよ」

軽い調子で言つてくるが、有無を言わせない雰囲気が強くシオンから感じた。何だか、怖い。

（でも、ルナ様をお守りしないと）

徹底的にシオンに対峙する心積もりのピーナだつたが、意外な者に阻止された。

「ピーナ、せっかくだから行つてきなさいよ。あなたには、私の分も楽しんできて欲しいの」

「えつ！？で、でもー」

ルナが曇りの無い笑顔で微笑む。心からピーナを思つてくれているのが、感じられ、何も言えなくなる。ピーナの大好きな笑顔で見つめられれば、拒否できない。ルナの笑みに負け、ピーナはうな垂れて、「はい」と返事をした。ピーナの様子をルナは不思議そうに、シオンは読めない笑顔でそれを見ていた。

「ちえ～。ルナ様大丈夫かなー？」

ピーナは足元にある石を転がしながら、呟いた。お行儀が悪いかもしないが、心配のあまりついつい小さいころの癖が出てしまう。

あの後、あれよあれよと追に出され、城下町に放り出された。もちろん、シオンによつて。あの人、絶対確信犯だ。用意周到であり、計画性を感じる。きっと、ルナとピーナが別々になるこの日を狙つていたのだろう。ルナがシオンを想つてゐるのは知つてゐたが、素直にルナをシオンのところへ行かすのも癪である。ピーナは心をもやもやとさせ、賑わう通りをトボトボと歩いていた。

いつもより格段に、人通りが多く、楽しげな声で満ちた道を通り。そのうちに、ピーナのやさぐれでいた心もだんだんと治つてきた。どうせなら、思いつきり楽しもう。実家に帰つて、久しぶりに家族とお祭りを堪能するのもいいだろ。お土産も買って行かなくては。そういえば、ルナ様たちにもお土産買わないと。

だんだんと、ピーナもお祭りの雰囲気によりわくわくしてきた。何だか、早歩きになり、スキップまでしてしまいそうだ。

（と、とつあえず、出店でお腹を膨らませて、腹ごしらえよね？腹が減つては戦はできぬ、つて言つし。その後家に帰つてー）

頭の中で、今日の計画を立てていたピーナは、大広場に足を踏み入れた。見世物・出店、さまざま人が大広場にいて、特に活気あふれたところとなつてゐる。ここを通つて、少しするとピーナの家なのだ。

どうせなら、ゆっくり歩いて雰囲気を楽しもう、とピーナが考えた矢先、女性の黄色い悲鳴が聞こえた。

（何つ！？強盗？）

にしては、嬉しそうな悲鳴だ。悲鳴が上がったと思われる方向を見ると、人だかりが起きている。女性の。

ピーナは冷や汗が背中に流れるのを感じた。とてつもなく、嫌な予感がする。今までの経験が、危険だとピーナに告げる。やめておけばいいのに、何が起きているのだろうと気になってしまい、その人だかりを注意深く見ていると、中心にいた人物がちらりと見えた。

綿のような銀色の髪がまず目に入る。それは光に反射しキラキラと輝いている。

氷のような冷たい美貌。いつも通り隙のない軍服で、佇む姿は見る者をとりこにしてしまう。

それは、まぎれもなくピーナがよく知る人物だった。

(H、エドガー様　　！？)

なんで彼がここにいるのだろう。エドガーは、とても目立っていた。若い女性たちは歓声を上げ、彼を人目みよと必死になつていて。逆にピーナはこの状況をいかに切り抜けるか、必死に考えた。とりあえず、急いで家に駆け込もう、と一歩後ろに下がった。

その時

ピーナと距離が離れていたはずのエドガーとの視線が一瞬、かち合つた。

ピーナは蛇に睨まれた蛙のよつこ、動けなくなる。視線がそらせない。

一やつと、エドガーは凶悪そつな笑みを浮かべた。

エドガーと視線があつたピーナは身震いした。興味本位で、人だかりを見てしまつた自分が恨めしい。エドガーがピーナとの結婚を諦めない、と宣言してから、会うたびに求婚されている。それとなく、断つたりしているのだが、相手は聞く耳をもたない。何だか、求婚の激しさも日々増している気がする。今日は、そんな日々から解放され、お祭りを楽しめると、思ったのだが・・・。そもそもいかないらしい。

( とつあえず、逃げなきやつ! )

ピーナは、エドガーを背にして走り出した。今実家に帰るのはまずい。というより、家族に迷惑をかけたくない。とすれば、向かう先は、さつき追い出されたばかりの城だ。ルナに匿つてもらえば、なんとかなるだろ。ピーナは下つ端メイド時代に鍛えた健脚で、走った。

「ナニヤー！」

「わが國！」

二二

後ろから、人々の悲鳴が聞こえる。理由は、考えたくない。ピーナは恐々と後ろを振り返った。

ピーナは内心絶叫した。エドガーが、凄い剣幕でこちらに走つてきていたからだ。もともと切れ長な瞳は、さらに鋭くなつており、獲物を狙う狩人のような目つきだ。軍人である彼が、鍛え抜かれた動きで走つてくるのは、なかなかに迫力がある。というより、怖すぎ

そんなエドガーに、誰も近づこうとはしない。エドガーに群がついた女性陣ですら。彼の発する気迫に、人が密集していた広場でさえ、自然と人が彼をよけて道をつくつている。逆に、ピーナは溢れる人に、あまり進めない。このままじゃ、追いつかれてしまつ！

ピーナは、なりふりかまわず叫んだ。そんな必死な形相のピーナに、周りの人間はぎょっとしたように見る。そして、彼女を避けてくれた。なんとなく、悲しかったが、今はそんなことは言つていられない。エドガーから逃げなくてはならないのだ。捕まつたら危険、とカンが告げている。ピーナは今までに無いくらい一生懸命に、走つた。

おそらく、わき田もふらず走るピーナと、ピーナに一直線に疾走するエドガーをみて、人々は一人が追いかけ追いかけられていることが分かつたのだろう。お祭りの楽しげな雰囲気が一転し、皆が一人の動向を手に汗をにぎって見守る奇妙な空気が流れている。お祭りそっちのけで、注目をあびる一人。よく見れば、エドガーの手には一輪のかわいららしい花が握られている。このお祭りの日に、花を持つている理由は明白だ。花渡しの行事にあやかつて、求婚をする、ということだ。そして、その花を受け取つたら最後、ピーナはエドガーの求婚を断ることは難しい状態になることは必至だ。

エドガーが聖女の侍女に求愛している、という噂はもう国中の者が知っている。そんなエドガーが一心不乱に追いかけている少女こそ、エドガーの意中の相手だと予想はついた。だが、それはピーナにとつて大変不名誉な事だ。というより、エドガーを狙う女性たちに顔がバレるのはとても痛い。今ピーナたちを見つめている女性たちに睨まれているのではないか、とびくびくした。それとなく、走りながら周りを見ると、周囲の人間はピーナを可哀相なもの見る眼差しで眺めていた。意外にも、エドガーの登場に黄色い悲鳴をあげていた乙女たちですら、ピーナを同情や哀れむように見つめてくる。

もはや、ピーナは止まらない滂沱と出る涙を流しながら、走った。

軍人のエドガーは本気で走るのだから、ピーナとエドガーの距離はだんだんと縮まってきた。だが、ピーナも死ぬ気で走っている為、いまだエドガーに追いつかれる事はない。息を切らしながら、城下を駆けていると城の門が見えてきた。ここをくぐり、シオンと城のバルコニーにいるルナに助けを求めるべば、こっちのもんだ。

（やつた――つ・ゆづりやくへ、私にも運が回ってきて・・・た!?)

ほつとしたのもつかの間、城の門には、ズラーツと軍人たちが構えて立っているのが見えた。確か、城を出た時には、こんなに人数は

いなかつた。だが、今は重層な警備体制だ。何か、城で起こつたのだろうか？しかし、軍人たちの顔には焦りの色はない。疑問に思いながらも、走る速度は緩めず、門をぐぐりと近くの軍人に声をかけた。

「すみませんっ！聖女様の侍女、ピーナ・リロットです！城に入れてくれださいっ！」  
早くしないと、エドガー様が来てしまつ！ピーナは軍人をせついた。

「あ、ピーナちゃん！ひさしぶりー」  
そんなピーナに声をかけたのはヒュージだ。いつもの「」とく、読めない笑顔でピーナを迎える。

「ヒュージさん！？お、お久しぶりです！今日は何も言わず、はやく城へ入れてくださいっ！！」  
ピーナはヒュージにかけよつた。

切羽詰つた表情のピーナを、申し訳なさそうにヒュージは見つめた。  
「ごめんねー。それが出来ないんだよ」

「何故！？」

意味が分からぬ。一応、ピーナは聖女の侍女なのだから、顔パスマで門をくぐれるはずだ。何しろ、ヒュージといつ立場の高い軍人がピーナを認知すれば、手続きなど不要なはずだ。

「命令でね、ピーナちゃんだけは門をくぐるときは、エドガー様と一緒にないと、駄目なんだー」

ほら、これが令状、とヒュージが見せた書状には、

本日ピーナ・リロットが城に入る際は、総司令官であるHドガーフ付添いが無ければならない、とする。

総司令官

なんじや こつや ――――――――――――

ピーナはヒュージから令状を奪つようにして取り、何度もその文を読み返した。なんだか、今日の事は前々から仕組まれた感がバシバシ感じる。

「お願いです～～～～～！今日だけは見逃してくださいー！」

ピーナは涙目になりながら、ヒュージに頼み込んだ。

「いやねー？ピーナちゃんとエドガー様がくつこてくれれば、俺としても助かるんだよね。だから、無理」

笑顔で断られた。しかも、意味が分からぬ。なぜ、ヒュージが助かるのか。ヒュージでは、頼りにならないと判断し、他の軍人たちをみると、さつと目をそらされた。・・・酷すぎる。

お前ら、民間人を守るのが仕事だの。だつたら、危機に瀕していれる私を助ける。

ピーナが恨みがましく、つぐづぐ、と唸つていると、ポンと肩を叩かれた。しかも、ピーナが逃げなによつ両手がピーナの肩をつかむ。

誰かが、後ろにいるのが分かつた。何だか、寒気がする。ピーナは、自分がふるえているのに気付いた。

「もう、諦めるしかないよねー」とヒューリジが楽しげに微笑んでいる。他の軍人たちは申し訳なさそうに、ピーナを見つめていた。

「ピーナ」

少し掠れた美声が、ピーナの脳天に響く。その一声で、ピーナは石化したように動けなくなる。両肩をつかまれて、相手の手の温度が伝わる。それは、熱いほど。ポン、と後ろからピーナの頭に己の頬を摺り寄せたのが、感触で分かる。

「捕まえた」

「ひ」

強制的に体を後ろに回され、向かい合わせにされる。予想通り、エドガーが嬉しそうにピーナを見据えてきた。追いつかれてしまったのだ。さつきまで、疾走したとは思えないくらい、涼しい顔だ。

「今日は花渡しの祭りだな」

「は、はい」

迫力に負け、思わず返事をしてしまうチキンな自分恨めしい。

「花を受け取れば、求婚を承諾することになるな?」

「そうでしたっけー?」

ピーナは目を泳がせた。ここで、しらばっくれて、話をうやむやにしたい。そんな挙動不審なピーナを愛しそうにエドガーは見た。そ

して、表情を獣のように獰猛な顔つきへと一転させる。思わず、一歩下がるうとしたが、いつの間にか腰に腕がまわされ、動けない。エドガーはもう一方の手で、胸のポケットにさしていった花をとり、ピーナに差し出す。

「花を受け取つてくれますか、ピーナ？」

顔を息が掛かると思つくらいに、近づけてくる。優しげな言葉とは逆に、瞳は有無をいわせない意志が感じられる。だが、ここで花を受け取れば、後が無い。尚も逃げ道を探るうとピーナが返事を躊躇つていると、エドガーはピーナの耳に唇をそつと押し付けた。その柔らかな感触に、心臓が高鳴った。

「いじで、花を受け取るか、私の口付けを受けるかどつちか選択しない」

ピーナにしか聞こえないよう、ボソボソと言葉をつむぐ。熱い吐息がピーナの鼓膜を揺らす気がした。他には選択肢は無いらしい。唇を耳から離し、もう一度エドガーはじつとピーナを見つめる。

人は、何でも問題から逃げたいものだ。逃避をする生き物だ。もし、問題が先送りに出来るのであれば・・・。

ピーナは緩慢な動作で、花を受け取つた。エドガーは花を受け取つた喜びと、口づけ出来なかつた残念さが混じつた表情をした。だが、これで求婚に承諾したことになる。エドガーは結婚が近づいてきた喜びで、ピーナを強く抱きしめた。めつたに見られない、笑顔で。抱きしめられたピーナは、遠い目をしていた。温度差のある一人である。

そんな二人を周りの人間は、何とも言えない顔で、ぱちぱちと拍手

をした。

このことで、正式にピーナとエドガーの仲は『婚約者』、となつた。ピーナにとっては、最悪の事態となつたのだ。

だが、ひとつ良かったこともある。大量に送られてきたエドガーのファンからの脅迫状が、ピタツと止まつたのだ。エドガーに追われたピーナが、哀れすぎて怒る気が削がれたらしい。嬉しいやら、情けないやら、である。

ピーナは、これからどうなるのだろう、と未来に想いを馳せた。

## 「さよなら」（後書き）

皆さん想像の通り、これはシオンとHドガーノの共謀です^\_^  
ヒュージも「」の恋の為、協力的です。

もう、物語も後半になりました。  
ラストスパートに向けて、頑張ります。

アカデミー賞受賞作（前書き）

軽い流血表現あります。ご注意を。

事件はこの国、アインシュベルの北で起きた。最北の村が、隣国の国フランタ国の軍によつて襲撃されたのだ。幸い、怪我人はいたが、死人はでなかつた。だが、このことは意図的にされたことで、フランタ国のアインシュベルに対する宣戦布告とも言える行動だつた。

数日後、フランタ国から使者が送られてきた。その使者が言ったフランタ国の意向とは、『聖女であるルナスターイーナをこの国に引き渡せ』というものだつた。一方的に圧力をかけてくるフランタ国の行為に、王たちは怒つた。フランタ国は、国の規模としてはアインシュベルと同じくらいだ。大陸の中で強国なアインシュベルに並ぶ、大国だ。だが、この国の姿勢は強硬的で、他国からも敬遠されていた。この国も、聖女はいなく、久々に生まれたアインシュベルの聖女が、喉から手が出るほどに欲しいのだろう。ここ数年、とみに疫病や飢饉に見舞われていたからだ。

もちろん、大事な聖女をおめおめと引き渡すわけにはいかない。だが、このことを拒否すれば、フランタが戦争をしかけてくるのは、明白だつた。大国同士が争うのは、巨大な被害をもたらす。返事はまた後で、と一旦使者には帰つてもらい、王や権力者たちは会議を毎日のように繰り広げていた。

「そうね・・・」

ピーナは窓から外をキヨロキヨロと見渡した。暖かい光が、庭に注いでいる。いつもと変わらない風景なのに、どこが不穏な空気が流れている気がしてならない。実際、神殿の中においても、会う神官たちの顔の表情は暗い。自分たちのリーダーである聖女が隣国に狙われているのだから、仕方ない事だらう。ピーナは、渦中にある本人のルナがどう感じているのか心配だつた。心優しいルナがこの状態を憂いはないはずがないのだ。ルナは時々ため息をつくようになつた。戦渦が始まつていなか気にしているように、遠くを見ていることが多いくなつていて。今も、ルナは長いため息を吐いた。

ピーナの周りも緊張感のある雰囲気を漂わせている。エドガーやヒュージも最近は、固い表情をして仕事の忙しさから神殿に訪れることがなくなつてきた。シオンは、時々ルナに会いに来るが、ルナが元気か気落ちしていないかを気にしているようだつた。そんな状況であるため、ピーナとのエドガーとの婚約話の噂も鳴りを潜めていく。國中、これからどうなるのか心配して活気がなくなり、嵐の前の静けさといった感じだ。

（ああ、嫌だなー！早く、問題が解決されればいいのにっ）

楽天家のピーナでさえ、気がふさいでしまう。何より、大好きなルナが悲しむのは見たくない。ルナは、神殿から一切でのを禁じられ、事実上監禁状態だ。いつ隣国の賊が襲つてくるか、分からぬことここで部屋からも出れなくなつた。ただでさえ、息が詰まるのに、さらに気分が重くなつてしまつ。ピーナは明るいを声を出した。

「でも今日は、久しぶりに外に出れますね？私はドキドキします！」  
今日は午後からこの国の創始者、シュベルが魔王を倒した日、とされ大々的な式典がある。王族・聖女・軍の上層部が出席する日だ。侍女であるピーナも出席が許され、ルナの側に控えていることにつた。緊張するが、誇らしい心持もある。

「そうね。ただ座つていればいいのだけど、式の間あまり動けないのだから疲れそうだわ」

ルナは目を細めピーナに微笑みかけた。ピーナが何とか自分の心をほぐそうしてくれているのが、分かったから。

「そろそろ、準備しましょうか？」

「ええ」

式に備えるべく、式典用の衣装に着替えることにした。  
そんな一人の周りを不穏な影がつらつらしているとは知らずに。

式は王の号令から始まった。ずらりと王たちを始めルナやサルマン、エドガーなどの長がイスに座る。ピーナはルナの後ろの小さなイスに座つた。途中エドガーの熱い視線を感じたが、式の最中はピーナだけを見ていてるわけにもいかず、しぶしぶと前を見ていた。神官がずらすらと国の英雄であるシュベルの偉大さを物語口調で謳つ。あまりにも長いので、ピーナはうとうとした。目の前にいるルナは、始めの姿勢と同じ姿で話を聞いていて、凄いと想う。

(やっぱり、ルナ様はすばらしいな)

改めて、ルナのことが大好きになる。式典では中央に王族、左右に聖女、元帥と総司令官が座っていた。シオン見ると、いつもより派手な服装をしている。優しげな顔立ちでありながらも、王族としての風格を備えている姿は、さすが王子だ。王子の隣には王と后、アレックス王子、そしてフィレナ王女がいた。美しい金髪を結い上げ、上品に座っている。エドガーが初めてピーナに求婚した以来、話したことはないが、今はどうなのが気になつた。少し離れたところには、サルマン元帥とエドガーが並んで座っている。サルマンは、目を開けてまだ話す神官を見ている。・・・が、口の端からよだれがつと出でていた。以前に、『得意技は、起きたフリじゃつ!』と言つていたが、今まさに目を開けて寝ているのかも知れない。

そして、横に視線を滑らすと、エドガーがいた。無表情で神官の言葉を聞いていた。カリスマ性のある彼はただ、座っているだけなのに目が引き寄せられる。

(私すごい人に求婚されているのよね・・・)

今更だが、そう思う。今までのピーナの人生は、平凡ながらも幸せだった。優しい家族に恵まれ、憧れの神殿で働く事ができた。大変ながらも、やりがいのある生活だった。それが、変わったのはやはりルナと出会つてからだろう。このことは、ピーナの中でも、最大級の幸運だったに違いない。物語で聞かせられて、夢見ていた聖女のもとで今は一番身近な侍女という働きをしている。庶民のピーナが侍女することに陰口をたたく者もいたが、気にしなかつた。それ以上に、僥幸に恵まれていたから。だが、そんな日常が波乱万丈なものになつたのは、彼、エドガーのせいだろう。会うたびに睨んできた彼が、実は自分に好意を抱いていたなんて、誰が思うだろう。

思えば、最近はいろいろなことがあった。そう感じさせないくらいに。ピーナはしみじみと感じ入った。

じつとエドガーを見つめて物思いにふけつていると、エドガーの灰色の瞳と視線が合つた。

「つーー」

すぐに目を離せばいいものを、なんとなく視線を外せない。自分が彼を見ていたことに、気づかれた事が何故か恥ずかしかつた。心臓がどきどきした。そういえば、この人に抱きしめられたことが、幾度かあつた。今になつて、その感触をさまざまと思い出してしまつ。

絡まる視線をどうすればいいのか分からなく、焦つてているとエドガーは薄く微笑んだ。その笑顔を見た時、心臓がつかまれた気分になつた。いたたまれなく、視線を必死に外す。尚も彼の視線を感じたが、もう一度彼を見る勇気はない。

（ど、どうした、私？心臓病！？）

ピーナは、さらにバクバクする心臓がどうすれば治るか、必死に考えた。

そんな時、異変が起きた。式典を見ていた観衆の中から悲鳴があがつたのだ。その後は一瞬だつた。一般人に見せかけた数十人の男たちが、刃物を取り出し、一斉にルナたちのほうに向かつてきただ。陣形のとれた様子でせまつてくる。警備にあたつていた軍人たちが、必死に交戦する。莊厳な式典は一気に騒がしい空気にのまれた。何が起こつてているのか分からぬ。ただ、一つ言えることは、男たちがルナを目指している、ということだ。

「ルナ様っ！！」

「ピーナ！？」

ピーナは、思わずルナの前に立つた。何も出来ないが、いざとなつたら、自分の身を挺してもルナを守る所存だ。そんな時、数人の徒党を組んで、刀を持った屈強な男たちが近くまでやって来た。シオンが必死にこちらにやつて来ようとする姿が見えたが、他の男に阻まれ、動けずにいるのを目の端に捉える。

（せめて、私が時間稼ぎをつ）

ピーナが決意を込めて、男たちを睨むと、その途端に男たちは倒れこんだ。ピーナは睡然とした。ただ、睨んだだけで、人は倒れるのか・・・？

（わ、私、実は目からただならぬ霸氣を出せるとか・・・？）

そんなお馬鹿なことを少し考えたピーナだったが、「大丈夫か？」という声で現実に戻される。いつのまにか、エドガーが右隣にいて、ピーナを心配そうに見おろしている。

「え？・・・はい」

思わず、返事をするピーナ。よく見渡せば、暴動を起こした男たちの大半を軍人たちが既に取り押さえているのが目に入る。エドガーの手には刀がいつのまにやら握られている。式典の時には、脇に差していたものだ。やつと、ピーナの頭が覚醒した。どうやら、先ほど倒れた男たちはエドガーが倒したのだろう。自分が倒したのだと一瞬でも考えた己が恥ずかしい。顔が熱くなるのを感じた。

「ピーナ、大丈夫？」

そんなピーナに黙っていたルナまでもが、心配そうに見てくる。二人に見つめられ、いたたまれなくなつたピーナは、赤面しながら、後ずさつた。

「だ、だ、大丈夫です——っ！」

しかし、それがいけなかつた。軍人に拘束されていた一人の男が、一瞬の隙をつき縄を這い出しナイフを投げてきたのだ。

「このやうつ！」

それは悔し紛れの行為であつた。ナイフはピーナに向かつて飛んできた。ピーナが気付いた時には、ナイフが目前と迫つてきていた。

「ピーナアーツ」

ルナの悲痛な叫び声が響く。

ザシユツという何かを切り裂く音と共に、ピーナの目の前で赤い血しぶきがあがつた。

「おひるねのさむへい」（後書き）

初めて暗い内容ですね。  
すみません。

暗いままが嫌なので、堪らず更新します。

ピーナは呆然と赤い血の塊が、床に落ちるのを見た。銀色の髪が顔をくすぐる。そこで、初めて誰かに抱きかかえられるようにして、かばわれているのに気付いた。顔を上げると、眉をひそめるエドガーだった。そして、視線をずらすと、エドガーの右肩にはナイフが刺さっており、血がにじんでいた。

「……エド……ガさ……ま……？」

掠れた声が出る。上手く言葉を話せない。視線も血が流れる肩から離すことができない。そんなピーナに薄く微笑み、ピーナの頬をそつと撫でた。そして、エドガーは身をひるがえし、先ほどのナイフを投げてきた男に近寄った。既に男は、再度他の軍人によつて捕えられていた。エドガーは先ほどのピーナに向けていた笑顔から、怒りに満ちた表情へと一転させる。

「ひつ！」

男はエドガーの剣幕に、思わず悲鳴をあげる。エドガーの放つ憤怒のオーラにのまれていた。

エドガーは、男の目の前に来て、視線を合わす。

「貴様、よくも俺のピーナにナイフを投げたな」

男を凄い勢いですごむ。睨まれていない筈の、軍人や捕まつた他のルナたちを襲つてきた者でさえ、その激しい形相に怯えた。

「ピーナがいるから、今は何もしない。だが、覚悟しておけ」

言い放つと、ナイフを抜き取り、投げ捨てた。ナイフを投げた男は恐怖に、呆然自失となっている。

エドガーはそんな様子を一瞥し、先ほどまでナイフが刺さっていたと思わせない、きびきびとした動きで軍人たちに指示をし始めた。そんな様子をピーナは、ずっと見ていた。『いつ、あなたのピーナになつたのですか』といついつこみは思い浮かばなかつた。ピーナは、エドガーが浅はかな行動をしたピーナをかばつて、怪我をしてしまつたのだと、気付いた。一気に、心が重くなる。ドロドロとしたものが胸に溢れる。

エドガーは、一瞬ピーナを伺うように見た。だが、ピーナはびくつと思わず体をふるわせる。自分の過ちで怪我をさせてしまつた、エドガーにどうすればいいのか分からぬ。すぐにでも謝ればいいのだろうが、頭が混乱してそれすらも思いつかなかつた。エドガーはそんなピーナを見て、どことなく悲しそうにしたが、己の業務に戻つていつた。

もしかしたら、エドガーは自分のことを怖がつているのだと思つてしまつたのかもしねりない。

「あつ・・・・・」

思わず、手をのばす。

違う、そうじやない。あなたが恐ろしいのではないのです。ただ、自分の罪が大きすぎて、どうすればいいのか分からぬのです。結局、何もエドガーに言えなかつた。

「ピーナ、大丈夫？」

心配そうに口を見てくるルナを見て、思い出したように涙が溢れた。エドガーの肩にナイフが刺さり、血が流れる場面が何回も頭の中で繰り返される。

「ふえっ、ルナさま、どうしよう・・・、うう」

自分の行動から、あんなことになるとは思わなかつた。謝つて、済む問題ではない。何より、人に傷を負わせてしまつたことが、ピーナにとつて重かつた。今までそんなことは無かつたから。

えぐえぐ、と泣くピーナの背中をそつとルナは撫でた。もはや、この状況は軍人たちが立ち回り、式典どころではない。王たちは避難させられ、人々も軍の指示にしたがつて、移動し始めている。そんな慌しい中ピーナは取り残されたように、泣いていた。そんなピーナとルナにシオンが気付き、近寄つた。

「大丈夫？もし歩けるなら、神殿に戻ろう。あっちのほうが、落ち着けると思つし」

「ええ、そうですね。ピーナ、歩ける？」

シオンはピーナに手をかした。ルナは肩を抱き、ゆっくりとピーナを連れていった。

神殿にピーナを連れて行き、一回戻つてきたシオンからの情報によると、エドガーの傷は深くなく、傷を縫うほどでもないようだ。し

ばらく、動かさないよう」に、との診断、といつゝとらし。だいぶ落ち着いたピーナだつたが、それを聞いて、ピーナはほつとした。ひとまづ、一安心だつ。

「良かつたわね、ピーナ！でも、あなたがそんなに気を負つことはないのよ？悪いのはナイフを投げてきた奴なんだから」

「いいえ、私の短慮すゞぎる行動のせいです・・・。謝らないと」ピーナは、スカートをぎゅっと握り締めた。さつきは、自分のあやまちに、我を忘れるほどうろたえてしまい、ルナたちに迷惑をかけてしまつた。しつかりしなくては、と自分に言い聞かせる。

「それがね、わつを襲つてきた犯人たちなんだけど、びつやひ、フアランタの国の奴らみたいなんだ。もつ、これには王や高官たちも怒り心頭でさ、もしかしたら戦争が始まるかもしれない」

「ええ！？」

「そんなつ」

シオンの発言に、少女らは言葉を無くす。シオン自身つらそうな表情だ。そういうえば、あの刃物を向けてきた男たちはルナをひたすら狙つていた。おそらく、ルナが公の場に出るときを虎視眈々と狙つていたのだろう。

「たぶん、強制的にルナスタリーナ殿を奪おつとした計画だと、思う。・・・だから、その後始末や、もしかしたら戦争するかもしれないからその準備とかで、エドガー殿は忙しいと思うんだ」

「・・・そうですか」

ピーナは唇をかんだ。謝りたくとも、エドガーの迷惑になるのなら、意味が無い。もし、戦争が始まるなら、軍の総司令官であるエドガーは多忙を極めるだろう。ピーナになどかまつていられないほどに。そんなことを考えてみると、ルナがそっとピーナの手を握るのを感じた。思わず、ルナを見ると、心配そうな顔をしながらも瞳には力強さが感じられる。ピーナはその手の温かさに、励まされる気がした。

「では、お詫びのお手紙だけでも書いて送ります  
そして、感謝の言葉も添えて。

「では、僕がエドガー殿のところに届くよつ、手配しようつ」シオンは力づけるように笑つた。  
ピーナは深々とお礼をした。

次は、ピーナいろいろ頑張ります。  
暗いのは、ここまでです。

ピーナはすぐにエドガーへ、お詫びと感謝の言葉を綴つた手紙を書いた。

その翌日、「怪我が無くてなにより。私は大丈夫だ」という短い返事と花束とピーナが大好きなお菓子が送られてきた。お菓子までついているのを見て、ほつこりと笑つてしまつ。手紙をにぎりしめて嬉しそうに微笑んでいるピーナをルナは、じつと見た。

「ピーナは、エドガー様のことどう思つてているの？」

「ふえ！？」

いきなりのルナの質問にピーナは戸惑つた。拳動不審に手をパチパチさせるピーナに、ルナは思わず笑つた。そして、また爆弾発言をした。

「好きなの？」

「！」

ピーナは、自分の頬が赤くなるのが分かつた。こういつた恋についての話は、あまり今までしたことがない。下つ端メイドの時も、友人たちがそんな話をしているのを聞いていたが、話半分に聞いていた。自分には関係ないことだと思っていたからだ。免疫のない話に、あたふたした気持ちと、どこか心が弾む気分を味わう。

ピーナはエドガーのことあまり考えようとしてこなかつた。とうより、考えられなかつた。自分とは縁の無かつた軍の偉い人に、

求婚されることは、ピーナにとつて信じられないことだつたからだ。だが、目を輝かせ、どこかわくわくとしたルナに、ピーナは観念した。

自分の思いが何なのか、自分自身に問いかける。

「私、エドガー様は私のこと嫌つて、嫌味で毎日来られると思つていたので、わ、私のことを好いてくれているなんて、始めは整理ができなくて・・・からかいのかとも思いました。すぐに、飽きるとも、」

「うんうん」

「でも、求婚されたり、『愛している』つて言つてくれたりして、本当なのかなつて。信じてもいいことかもしれないつて、感じて」

「そう」

ゆつくり自分の気持ちを咀嚼しながら、言葉に出す。そんなピーナの言葉を、急がすでもなく、親身になつて聞いてくれるルナ。だから、ピーナは安心して、自分の想いをしどろもどろになりながらも、吐き出せる。

「でも、エドガー様のことを好きな方はいっぱいいますから、自分が敵対されるのは、どうしても嫌で。そんなことになつて、受け止められる自信はありませんでしたし」

「ええ」

「だから、お断りしよう」と

「やうなの。でもね、ピーナ、そのことがピーナがエドガー様を好きにならない理由にはならないはずだわ？彼に対してピーナがどう思っているか、が一番よ。後のことば、一の次」

「私が・・・どう思っている・・・か？」

「やうよ」

ピーナはルナの言葉を繰り返した。自分は彼をどう思っていたのか。エドガーと出会つてから今までのことをずっと、思い出す。それは、鮮明に思い出せた。

「始めは、怖い方だつて・・・。眉間にしわを寄せ、睨んできたから。でも、最近は時々、笑いかけてくれるんです」

式典の時も、わずかであるが、エドガーはピーナに笑つた。他人には気付かないかもしれないが、最近ピーナはエドガーが笑つているか、など表情が読めるようになつてきた。エドガーのふと見せる笑顔が、結構好きだ。ルナのような優しいものではないし、シオンにような柔軟なものでもない。彼は、そつと微笑むのだ。

「半強制的に求婚はされるし、何かいろいろと裏でなさつていたようですが・・・」

「そ、そうね」

少しやさぐれたように言つピーナに、ルナは冷や汗を流す。エドガ

ーが彼女にせまつたやり方は、誰が見てもやりすぎだと感じるだろう。エドガーが暴走していたことは、否定できない。

「・・・でも、私が本当に悲しかつたり、苦しかつたりした時、慰めてくれたのは、エドガー様でした。そのことで、私はだいぶ救われました。最近は何気なく、頼りにしてしまつんです」

ピーナは目を閉じた。そうだ、もう既に彼への気持ちは決まつていたのだ。それを認めなかつただけで。

「ピーナ・・・それは」

「・・・本当は、私エドガー様のこと好きなのだと思います」言葉にだして言つことで、さらに確信が強まる。目を開けると、キヤーッとルナがピーナに抱きついた。

「自分の気持ちが分かって、良かつたわね！あとはそれをエドガ様に伝えるだけよ！？」

ルナはピーナをぎゅうぎゅうと抱きしめた。ピーナはルナに抱きつかれて、慌てた。

ルナからは、いいにおいがして、じきじきある。

「る、ルナ様。びっくりしました」

「ふふ。それで、いつ行く？」

「へ？」

何のことですか？といつよに首をかしげるピーナ。

「エドガー様に気持ちを伝えるときよ」

当たり前でしょ~と腰に手を当てる。

「ええ！？」

まさか、気持ちを自覚した途端に、それを伝えるとは。一気に、恥ずかしさが増す。もじもじし始めたピーナ。そんな彼女を見て、ルナは少し呆れたように笑つた。

（後書き）ささやかな想ひをこめて

かうと思ひぬこなつたでしようか？

ここ数日、軍部は忙しかった。フランスと戦争へと王たちの意志は固まり、それに向けて着々と準備が進んでいたからだ。総司令官であるエドガーも、指示をしたり、手配をしたり、と寝る暇も無く働いた。ピーナと会えなくなつたのが、辛い。唯一の救いは、彼女からの手紙だ。彼女の人柄を表したような、すこし丸い文字で綴つた手紙を疲れたときは読んで、自分を慰めた。

いよいよ開戦間際となり、軍部では会議が続いた。明日にはこの国をたち、エドガー自らフランスに遠征することになつていて。今日の会議は、サルマンやヒュージなど軍のなかでも高位の地位にいる者が集まつた。作戦をまとめ、ひとまず最終のうちあわせが終わつた。

「では、明日に」  
というエドガーの声に、皆が立ち思ひ思ひに退出しようとしていた。そんな時、一人の若い軍人が会議室に入ってきた。

「失礼します！総司令官殿にお会いしたい、という方がお見えになつてゐるのですが・・・」  
申し訳なさそうに、びくびくしながらエドガーに向ひをたてる。

「馬鹿者、無理に決まつてゐる。こんな忙しい時に。帰つてもらえ」  
エドガーは、すぐさま答えた。取り付く島もないエドガーの応えに、若い軍人は怯えたように首をすくめる。だが、すぐに諦めずに、もう一度恐る恐るエドガーに話しかけた。

「あのー、そのお会いしたいという方が、ピーナ・リロットさんな

のですが・・・

「馬鹿者、早く通さんかっ！」

くわっと田を見開いて怒るエドガー。

「は、はいーーー！」

若い軍人は、声をひっくり返しながら、敬礼した。すぐに、走って部屋から出る。内心、何で、俺2回も怒られるんだよーとぼやきながら。

そんな様子を、好奇や恐怖の田で見る他の軍人たち。エドガーはそんな周りに気にせず、というか余裕が無いのか、そわそわとし始める。机にある資料を意味もなく広げたり閉じたり、うるうろと部屋の中を歩いたりする。さっきまでの会議での威厳は完全に消えていた。そんなエドガーをサルマンやヒュージは生暖かい目で見守っている。何だか、他の男たちも会議室から出るに出れなくなっていた。

そのうち、先ほどの軍人が戻ってきた。後ろにはピーナを連れている。どことなく緊張した様子の彼女を見て、エドガーは口元をほころばせた。久しぶりに彼女と会うことができ、溜まっていた疲れが吹っ飛ぶ。

ピーナエドガーを見つけると、お辞儀をした。

「お忙しい時に、すみません。お時間はどうせません

「いや、別に大丈夫だ」

(さつき、忙しそうと言つてたくせに・・・)

見ていた者たちは、エドガーの変わりよう、つゝこんだ。

「あの、私エドガー様に伝えたい事があつて・・・その、あの」  
頬をそめて、視線をいろんなところに飛ばすピーナ。  
可愛すぎる。エドガーは静かに悶絶した。

そんな中、軍人たちは沈黙を守つていたが、一人だけ空氣を読まない人間がいた。

「おお！ピーナ！元氣じやつたかー？」

サルマンは、飄々とピーナに話しかける。

「お久しひりです、サルマン元帥！お立場のため、忙しいかと存じますが、お体にはお氣をつけてくださいね？」

「ふむ。ほんに、ピーナはいい子じやのうー」

サルマンは、ペコッとお辞儀をするピーナに目じりを下げる。そんなサルマンをエドガーは殺人的な目で見ている。

（サルマン元帥　　！？空氣読んでください！）

ここには屈強な男たちばかりが集まつていたが、エドガーの殺氣には固まつた。対して、サルマンは己をエドガーが睨んでいると知つていながらも、余裕の態度だ。

「・・・会議は終わつた。解散だ」

エドガーはサルマンを睨みつけながら、言った。背中にはブリザードがふぶいている。

「ええ～！？わしもピーナと話したいのう」

サルマンは口をとがらす。エドガーは、いい年して、何かわいこぶ

つてんだ、と内心毒づいた。しかも、何気にピーナの手をつないでいる当たり、いろいろ油断ならない。

「か・い・せ・ん・です！！」

エドガーがサルマンをねめつけた。サルマンにはだいぶお世話になつたが、ピーナに関しては譲れない。エドガーが威嚇する様子をサルマンは楽しそうに眺めてくる。あ、確信犯だ、と見ている男たちは思った。

「サルマン元帥！会議でお疲れでしょう！？今日はゆっくり休みましょう！」

「今日、この後食事にでも行きませんか！？」

「うぬーーー！」

このままでは、泥沼化する、と感じた軍人たちは一致団結した。強制的にサルマンの背中をグイグイと押し、いやじや、いやじや、と喚くサルマンと一緒に部屋から出た。そして、パタンとドアが閉まる。部屋はピーナとエドガー以外いなくなり一瞬にして、静かになった。

果然とその様子を見るピーナ。逆に満足そうなエドガー。あいつらには特別ボーナスを出そう、と考えていた。そして、ゆっくりとピーナに向き合つ。エドガーが自分を見てくることに気付かず、ピーナは体を強張らせた。

「せつかくてくれたのに、騒がしくてすまない。して、話しどはなんだ？」

自分の声が自然と甘くなっているのが、分かる。ピーナ自ら自分のところに来てくれたことが嬉しい。最近は本当に、忙しく彼女のところにいけなかつた。だがそれだけではなく、最後に会つたときにも

彼女を怖がらせてしまったのではないかと思い、何となく行きづらかつた、というのもある。今まで、何度も彼女に求婚を断られては、いろいろと工作したり強引に迫ってきた。だが、本気で彼女が自分を拒否したら……とすると、息がつまるような苦しい思いになる。どんな敵にも果敢に向かつってきたエドガーだが、好きな少女に否定される事は、恐ろしかった。

「あの、先日は私の不注意で怪我をさせて、すみませんでした！」  
ピーナが勢いよく、頭を下げる。

「……あの、お怪我はどうですか？」

頭を下げた姿勢から、伺つよつて、エドガーを見る。自然と上目使いになる。その様子にエドガーは、またまた悶絶した。表情には出さないものの、脳内では「かわいい」のワードが繰り返され、頬はかすかに赤くなっている。

「頭を上げてくれ。怪我はもうすっかり完治した。心配するな。……それに、ピーナを守れたのだから、私は嬉しい」

「へつ！？」

みるみるピーナの顔が赤くなる。今まで、どんなに甘いことばを言つても、迷惑そうな顔をするかひきつった顔をしていたのに。ピーナの対応の変化に、エドガーは喜んだ。これは脈ありか！ 脈ありなのかつ！？

「そ、そ、そ、うですか。……あ、あのお話したいこと、もう一つあるのです」

ピーナは、エドガーにさめよつていた視線を戻す。茶色い瞳には強い意志が感じられる。

「なんだひう？」

「エドガー様たちは明日に遠征される、と伺いました」

「やうだ

「エドガー様がお帰りになつた時、申し上げたい事があるのです。  
・・その時は聞いてもらえますか？」

心配そうに見上げるピーナ。声音にはどこか、懇願するような響きを感じる。エドガーは、必死なピーナをじっと見つめた。何なのだらうか？

「・・・どんな内容が、今聞いても？」

わざわざ、戦争が終わつてから、なんて。エドガーはいぶかしんだ。

「わ、私とエドガー様の、将来・・・のこと・・・です」  
最後は小声になつていたが、エドガーは一句漏らさずに、聞き取つた。一気に胸が高まる。そ、それは、もしかして・・・！？

「期待していいのか？」

思わず、質問に熱が入る。思わず、一步ピーナに近づく。

「今は、何も申しません」

ピーナは詰め寄るエドガーに、軽くビビリながらも、答えた。はつきりしたことを聞けなくて、少しエドガーは気落ちした。だが、次の彼女の言葉で、またエドガーのテンションは上がった。

「・・・だから、絶対に戻つてきてくださいね？」

ふ、とピーナは柔らかく微笑んだ。今まで、こんな風にエドガーに笑ってくれたことは、あつただろ？いや、ない。エドガーはピーナに見とれた。

きっと、この笑みを生涯忘れる事は無いだろ？

（あくまでも）おめでとうございます（後書き）

あと、2・3話で、完結となります。

皆様には、大変感謝しています。

最後まで、楽しんでいただければ、幸いです^\_^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0294w/>

---

侍女と総司令官

2011年10月17日23時33分発行